奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

昭和61年度

昭和62年

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

昭和61年度

昭和62年

奈良市教育委員会

序　　文

咲く花のにほふがごとくとうたわれた、約1200年前の寧楽の都も、現在ではわずかながら残された寺院の伽藍や伝えられてきた文物にそのおもかげをみるにすぎません。

しかし、私達の住む奈良市の地下には、都平城京の遺跡が永い年月とともに眠りつづけております。

この地下に眠る歴史を過去から受け継ぎ、また、未来へ引き継ぐべく保存していくことは重要な使命であります。

奈良市では昭和53年以来、発掘調査を進めてまいりました。そして今年度もこうした発掘調査の成果をここに報告書としてまとめることができました。ここに示した調査の成果が、幾分なりと利用、活用いただければ幸いに存じます。内容的に不十分な点もあると思いますが、それを克服すべくよりいっそう調査体制の充実をはかってまいる所存であります。

最後になりましたが、現地調査、及び本書の作成にあたって、御指導、御協力を賜わりました奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめ、関係諸機関の方々に対しまして、厚く御礼申し上げます。

昭和62年 3 月

奈良市教育委員会

教育長　久保田　正一

例　　言

1．本書は、昭和61年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査概要報告を集録したものである。
2．昭和61年度には、37件の発掘調査を実施した。そのうち、奈良北区土地区画整理事業に伴う遺跡確認調査については、昭和62年度に本調査を予定しているため、次年度に報告を行う。また東市跡推定地（平城京左京八条三坊六坪）の調査については、別に報告書を刊行した。
3．本書に収録した報告は次頁に記したとおりである。なお、調査地の位置は、発掘調査位置図に示した。
4．発掘調査は、奈良市教育委員会文化課埋蔵文化財調査センター（所長・森川倫秀）が行ったが、一部の調査については奈良県教育委員会の協力を得た。調査に関わる庶務は、文化課文化係（係長・野口　宏、森　光彦、西　哲夫）が担当した。
5．現地調査及び本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会の御指導、御教示を仰いだ。また、史跡大安寺旧境内（第28次）の調査では、奈良国立文化財研究所長・鈴木嘉吉、同平城宮跡発掘調査部長・町田　章、奈良県教育委員会文化財保存課長・東森正文、奈良市文化財保護審議会長・土井　実の各氏の御指導を仰いだ。記して感謝したい。
6．発掘調査および出土遺物の整理には、下記の諸氏の参加、協力があった。
相原嘉之・茜　昌代・大西明彦・大野佳子・金村浩一・河合順之・川辺悦代・桐山美佳・伊藤佐和子・金子真由美・花谷めぐむ・原田憲二郎・宮腰瑠璃子・佐伯博光・菅原道子・瀬本弘子・芹川順子・玉林尚子・樋泉彰子・古川成美・保坂香恵・松山径子・松田光広・三上牧子・村松京子・柳本智恵・山浦　修・山村光子
7．報文中で使用する遺構記号、遺物の名称、型式等の標示は奈良国立文化財研究所、および当市教育委員会の刊行物による。
8．報文中、および図中で表示した方位、座標は平面直角座標系Ⅵによる。
9．本書の作成は、文化課長・亀井伸雄の指導のもとに調査担当者全員があたり、それぞれ分担し、執筆した。なお、各報告の末尾にその文責を明らかにした。
10．本書の編集は、森下浩行が行った。

目　　次

Ⅰ　平城京の調査

1．史跡平城京朱雀大路跡の調査　第 119次……1

2．平城京東七坊大路の調査　第 118次……7

3．平城京左京（外京）五条七坊三坪の調査　第 115次……12

4．平城京左京九条一坊三坪・六坪の調査　第 106次……16

5．平城京左京二条三坊四坪の調査　第 107次……18

6．平城京左京三条四坊一坪の調査　第 113次……20

7．平城京右京二条二坊十六坪の調査　第 116次……22

8．平城京左京三条三坊六坪の調査　第 120次……24

9．平城京左京四条四坊七坪の調査　第 121次……26

10．平城京西二坊大路の調査　第 109次……29

11．平城京左京四条三坊十二坪の調査　第 110次……30

12．平城京左京六条二坊十坪の調査　第 111次……31

13．平城京一条条間路の調査　第 114次……32

14．平城京左京（外京）三条五坊十三坪の調査　第 117次……33

15．平城京左京九条三坊十一・十二坪の調査　第 122次……34

16．平城京左京四条一坊十五坪の調査　第 108次……35

17．平城京西三坊坊間路の調査　第 112次……35

18．平城京左京七条一坊九坪の調査　第 123次……35

19．平城京朱雀大路の調査　第 124次……35

Ⅱ　寺院の調査

1．元興寺旧境内（第６～９次）の調査……37

2．史跡大安寺旧境内（第25～28次）の調査……58

3．史跡東大寺旧境内（第７・８次）の調査……68

4．薬師寺旧境内（第１・２次）の調査……69

5．西大寺旧境内（第１次）の調査……70

6．新薬師寺旧境内（第１次）の調査……70

7．菅原寺旧境内（第１次）の調査……70

Ⅲ　その他の調査

1．佐保山遺跡群の調査……71

2．平城京内のその他の調査……73

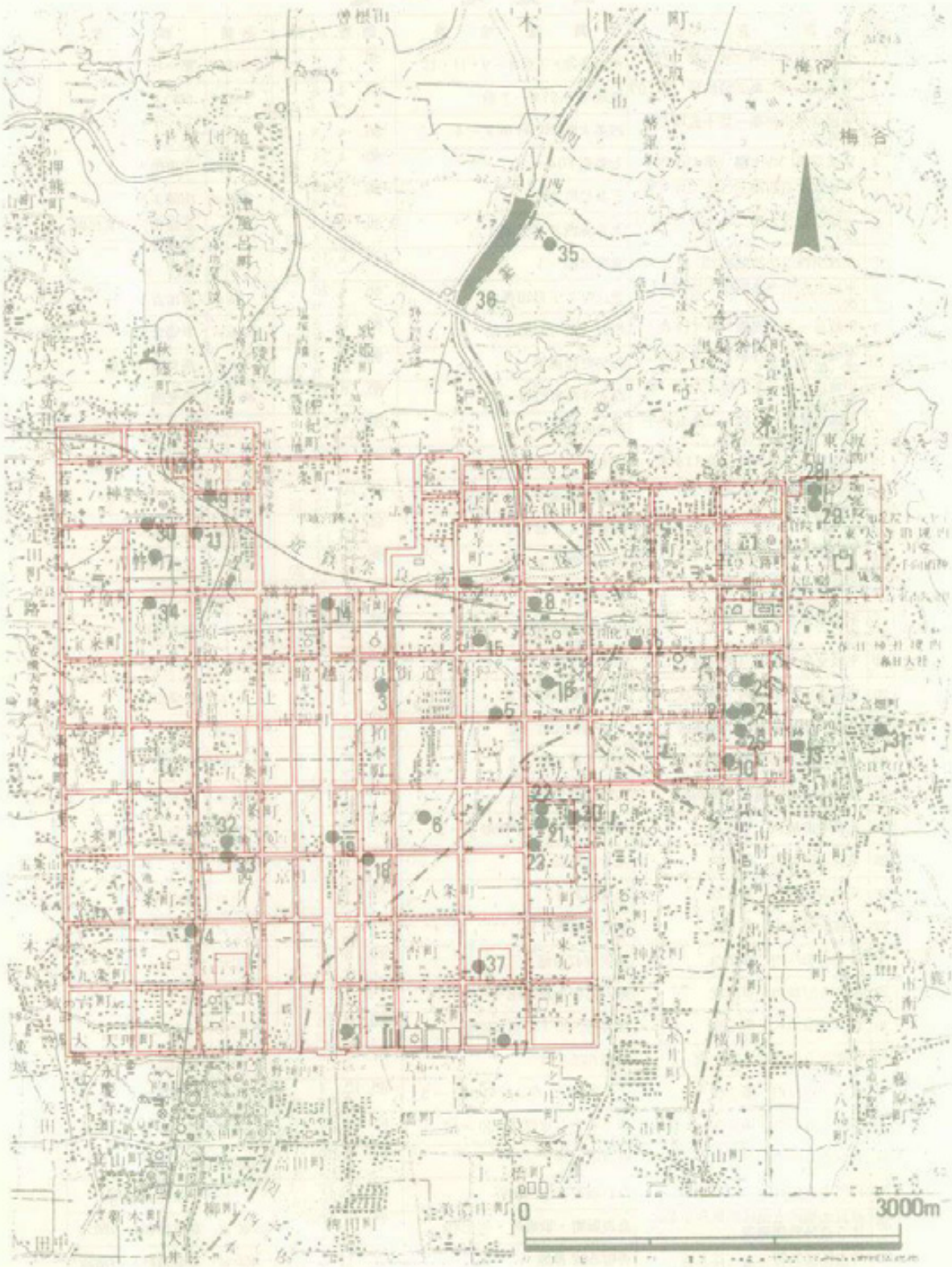
図　版　目　次

図版1　史跡平城京朱雀大路跡　西発掘区全景　第119次(1)
図版2　同　(2)　東発掘区全景
図版3　同　(3)　坪境小路
図版4　同　(4)　下っ道側溝
図版5　同　(5)　ＳＢ01～03
図版6　平城京東七坊大路　発掘区全景　第118次(1)
図版7　同　(2)　ＳＫ18，ＳＥ15，ＳＦ22
図版8　平城京左京（外京）五条七坊三坪　第115次　発掘区全景
図版9　平城京左京九条一坊三坪・六坪　第106次(1)　発掘区全景
図版10　同　(2)　ＳＦ１，ＳＤ02～04
図版11　同　(3)　ＳＢ06～08
図版12　同　(4)　ＳＸ05，ＳＥ10
図版13　平城京左京三条四坪　発掘区全景　第107次
図版14　平城京左京三条四坊一坪　第113次(1)　発掘区全景
図版15　同　(2)　ＳＥ05
図版16　平城京右京二条二坊十六坪　第116次　発掘区全景
図版17　平城京左京三条三坊六坪　第120次　発掘区全景
図版18　平城京左京四坊七坪　発掘区全景　第121次(1)
図版19　同　(2)　発掘区遺構
図版20　同　(3)　発掘区遺構
図版21　平城京西二坊大路　発掘区全景　第109次
図版22　平城京左京四条三坊十二坪　第110次　発掘区全景
図版23　平城京左京六条二坊十坪　第111次　発掘区全景
図版24　平城京一条条間路　発掘区全景　第114次
図版25　平城京三条五坊十三坪　第117次　発掘区全景
図版26　平城京左京・九条三坊十一・十二坪　第122次　発掘区全景他
図版27　平城京東一坊大路　第108次・平城京西三坊坊間路　第112次　発掘区全景
図版28　平城京左京七条一坊九坪　第123次・平城京朱雀大路　第124次　発掘区全景
図版29　元興寺旧境内　第７次(1)　発掘区全景
図版30　同　(2)　発掘区全景他
図版31　同　(3)　ＳＥ06・08他
図版32　同　(4)　ＳＥ11・12他
図版33　同　(5)　ＳＥ14
図版34　同　(6)　ＳＥ15
図版35　同　(7)　ＳＫ07，ＳＸ10・22他
図版36　同　(8)　出土遺物
図版37　同　(9)　出土遺物
図版38　元興寺旧境内　第６次　発掘区全景他
図版39　元興寺旧境内　第８次・第９次　発掘区全景
図版40　史跡大安寺旧境内　第28次(1)　発掘区全景
図版41　同　(2)　発掘区全景他
図版42　同　(3)　礎石建物
図版43　同　(4)　発掘区南西部
図版44　史跡大安寺旧境内　第25次・第26次・第28次　発掘区全景
図版45　史跡東大寺旧境内　第７次・第８次　発掘区全景
図版46　薬師寺旧境内　第１次・第２次　発掘区全景
図版47　西大寺旧境内　第１次　新薬師寺旧境内　第１次、菅原寺旧境内　第１次　発掘区全景
図版48　佐保山遺跡群　(1)　調査地全景他
図版49　同　(2)　発掘区全景
図版50　同　(3)　発掘区全景

調　査　地　一　覧

位置番号	調　査　名	調　査　地　番	調査期間	面積	備　考
1	平城京左京九条一坊三坪・六坪（第106次）	西八条町5丁目4－9・11・12	'86. 4. 1 ～ 5. 13	216㎡	第一化工
2	平城京左京二条三坊四坪（第107次）	法華寺町214－1他	'86. 4. 8 ～ 4. 23	147㎡	(株)ヒラサワ
3	平城京左京四条一坊十五坪（第108次）	四条大路2丁目869－4	'86. 4. 9	18㎡	まると工業
4	平城京西二坊大路（第109次）	七条町504－1	'86. 4. 14 ～ 4. 26	85㎡	吉田恒夫
5	平城京左京四条三坊十二坪（第110次）	三条桧町407	'86. 4. 18 ～ 5. 10	259㎡	山岡工務店
6	平城京左京六条二坊十坪（第111次）	大安寺西2丁目281	'86. 5. 13 ～ 5. 28	46㎡	奈良市埋蔵文化財調査センター
7	平城京西三坊坊間路（第112次）	青野町42－1	'86. 5. 15 ～ 5. 24	100㎡	松田　進
8	平城京左京三条四坊一坊（第113次）	芝辻町2丁目10番地	'86. 5. 26 ～ 6. 4	44㎡	西田吉弘
9	平城京一条条間路（第114次）	西大寺栄町2331番地	'86. 6. 5 ～ 6. 13	84.5㎡	中畑忠夫
10	平城京左京（外京）五条七坊三坪（第115次）	瓦堂町19番地	'86. 7. 9 ～ 8. 20	350㎡	奈良日日新聞
11	平城京右京二条二坊十六坪（第116次）	西大寺南町2244－3	'86. 8. 18 ～ 9. 10	40.5㎡	明光開発
12	平城京左京（外京）三条五坊十三坪（第117次）	西之阪町29－1	'86. 8. 21 ～ 9. 11	50㎡	西之阪共同浴場
13	平城京東七坊大路（第118次）	紀寺町字地蔵町984他	'86. 8. 20 ～ 9. 10	150㎡	飛鳥地区公民館
14	史跡平城京朱雀大路跡（第119次）	二条大路南3丁目200他	'86. 10. 3. ～ 12. 16	850㎡	シルク博会場
15	平城京左京三条三坊六坪（第120次）	大宮町4丁目301－1	'86. 11. 4. ～ 11. 21	100㎡	村本建設
16	平城京左京四条四坊七坪（第121次）	三条宮前町4－29	'86. 11. 11 ～ 11. 20	200㎡	家庭学園
17	平城京左京九条三坊十一・十二坪（第122次）	東九条町	'86. 11. 25 ～ 12. 11	90㎡	都市計画道路
18	平城京左京七条一坊九坪（第123次）	柏木町383他	'86. 9. 10 ～ 9. 11	56㎡	森高茂樹
19	平城京朱雀大路（第124次）	柏木町190－1	'86. 11. 21 ～ 11. 25	32㎡	中村安雄
20	史跡大安寺旧境内　第25次	大安寺町988－3	'86. 5. 19 ～ 5. 22	7㎡	近藤正廣
21	史跡大安寺旧境内　第26次	大安寺町1067－2	'86. 6. 2 ～ 6. 3	6㎡	武野　正
22	史跡大安寺旧境内　第27次	大安寺町1067－2	'86. 6. 2 ～ 6. 4	15㎡	大西逸男
23	史跡大安寺旧境内　第28次	大安寺町1303－4	'86. 7. 16 ～ 9. 33.	400㎡	大安寺本堂
24	元興寺旧境内　第6次	鵲町30－1・4．中院町2－3	'86. 5. 7 ～ 5. 17	50㎡	田中正夫
25	元興寺旧境内　第7次	東寺林町32	'86. 6. 9 ～ 8. 11	550㎡	コミュニティ
26	元興寺旧境内　第8次	芝突抜町6	'86. 12. 15 ～ 12. 24	16㎡	藤原照次
27	元興寺旧境内　第9次	中新屋町25・26	'87. 2. 9 ～ 2. 24	27㎡	田中宏一
28	東大寺旧境内　第7次	雑司町47番地	'86. 5. 19 ～ 5. 24	22㎡	集会所
29	東大寺旧境内　第8次	雑司町字中組118－1	'86. 5. 19 ～ 5. 24	15㎡	川辺　弘
30	西大寺旧境内　第1次	西大寺芝町1丁目2525他	'86. 9. 18 ～ 9. 25	20㎡	岡本勇治
31	新薬師寺旧境内　第1次	高畑625－1	'87. 1. 26 ～ 2. 6	96㎡	村田昌昭
32	薬師寺旧境内　第1次	六条町1272．西ノ京町320－3	'86. 12. 4 ～ 12. 8	10㎡	新井康彦
33	薬師寺旧境内　第2次	西の京町字東堂院320－14	'87. 3. 10 ～ 3. 19	50㎡	吉岡康男・吉岡潔
34	菅原寺旧境内　第1次	菅原町518	'87. 2. 26 ～ 3. 4	100㎡	菅原神社
35	佐保山遺跡群	奈良阪町字又四郎谷	'87. 1. 19 ～ 2. 18	423㎡	奈良北1号線
36	奈良北地区土地区画整理事業に伴う遺跡確認調査	奈良阪町・歌姫町・佐紀町	'86. 9. 20 ～ 11. 1	1,080㎡	奈良市都市再開発
37	東市跡推定地（平城京左京八条三坊六坪）	杏町592番地	'86. 11. 4 ～ '87. 1. 22	400㎡	重要遺跡範囲確認

位置番号は次頁の位置図の番号と対応する。



発掘調査地位置図

Ⅰ. 平 城 京 の 調 査

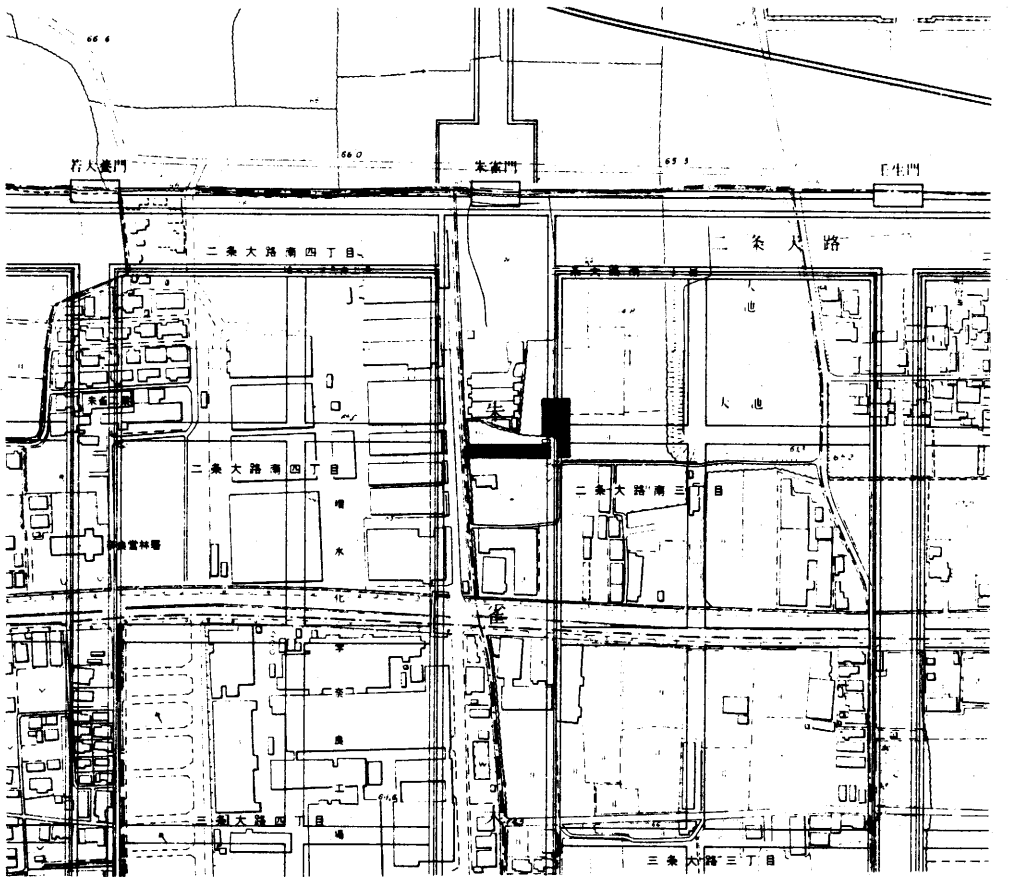
1. 史跡平城京朱雀大路跡の調査　第119次

(1) はじめに

本調査は、奈良市二条大路南３丁目200番地他で実施した、なら・シルクロード博会場展開に伴う発掘調査である。調査地は、朱雀大路および左京三条一坊一・二坪の坪境小路に相当する。調査地の中央には農業用水路が通っているため、東西に２つの発掘区をＬ字形に設定した。西発掘区は面積450㎡で、朱雀大路とその東側溝、下つ道とその東西両側溝の検出を目的とした。東発掘区は面積400㎡で、朱雀大路と坪境小路の交差部の検出を目的とした。調査面積は合わせて850㎡、調査期間は昭和61年10月３日～12月16日である。

Ⅱ　検出遺構

主な検出遺構は、奈良時代の遺構、下つ道、古墳時代の遺構に大別できる。



調　査　位　置　図

A　奈良時代の遺構

朱雀大路　路面約49.8m分と東側溝（ＳＤ06）を確認した。東側溝の位置はこれまでの調査例と一致する。西側溝は発掘区外約40mに位置する。路面には石敷きなどの痕跡がなく、地道であったと考えられる。東側溝は幅4.1～4.3m、深さ約70cmをはかる。素掘り溝で護岸施設はない。埋土は下から灰色粗砂、灰色粘土、茶灰色粘土が水平に堆積し、一時期に埋められたことがわかる。出土遺物には須恵器、土師器、瓦があるが、溝さらえが徹底していたためか、その量は少ない。なお、朱雀大路に沿って築地塀を想定できる。盛土本体は失われているが、構築時の添柱穴、足場穴とみられるものの一部は残る。しかし、これらも遺存状態は良好ではなく、築地本体の正確な位置や規模を決めるに至らない。

坪境小路　北側溝（ＳＤ07）は幅1.7～1 9m、深さ約37cm。埋土は下から灰色粘砂、茶灰色砂土、灰色砂土、灰褐色土が堆積する。南側溝（ＳＤ08）は両岸が侵蝕されており、本来の規模は不明である。特に朱雀大路東側溝にとりつく南岸では大きくくずれており、溝としての機能は南側溝のみが果たしていたのかもしれない。また、両側溝には暗渠などの痕跡はなく、朱雀大路に沿ってみられる築地塀は一坪と二坪とでは途切れていたと考えられる。両側溝心々間距離は6.78m。出土遺物には両側溝ともに須恵器、土師器、瓦があり、その量は少ない。また、朱雀大路と坪境小路の交差部分には橋脚などの痕跡はみられなかった。

B　下つ道

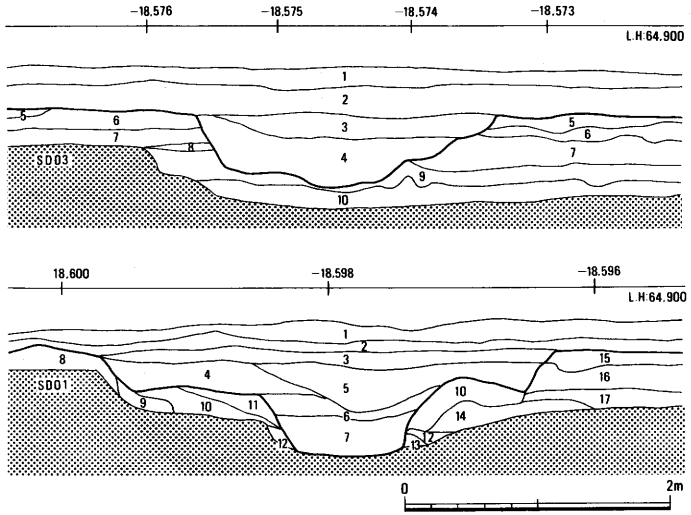
西側溝（ＳＤ01）は幅3 10～3.45m、深さ約80cmをはかる。２段に掘られていることより、あるいは改修されたかもしれない。埋土は下層に灰色粘砂、上層に灰褐色粘土、茶灰色粘土がみられる。東側溝（ＳＤ03）は幅1.80～2.50m、深さ約55cmをはかる。埋土は下から灰褐色粘土、茶灰色粘土の２層で、改修の痕跡はみられない。両側溝心々間距離は22.44m、路肩幅は19.6mであり、これは従来の下つ道の調査例と一致する。出土遺物には土師器、須恵器があるが、構築の詳細な時期を決めうる資料とはならない。

C　古墳時代の遺構

南北溝ＳＤ02・04・05　ＳＤ02は幅0.8～1.2m、深さ約40cm。ＳＤ04は幅1.2～2.0m、深さ約55cm。ＳＤ05は幅1.9～2.5m、深さ約45cm。ＳＤ04・05は同規模である。埋土はそれぞれ２層。溝の主軸は北で西にＳＤ02が約18°、ＳＤ04が約9°、ＳＤ05が約12°振れる。出土遺物には土師器、須恵器、埴輪がある。

位置	X	Y
朱雀大路東側溝心	−146151.00	−18548.10
坪境小路北側溝心	−146148.63	−18541.00
坪境小路南側溝心	−146155.41	−18541.00
坪境小路心	−146152.02	−18541.00
下つ道東側溝心	−146161.00	−18574.60
下つ道西側溝心	−146161.00	−18597.04

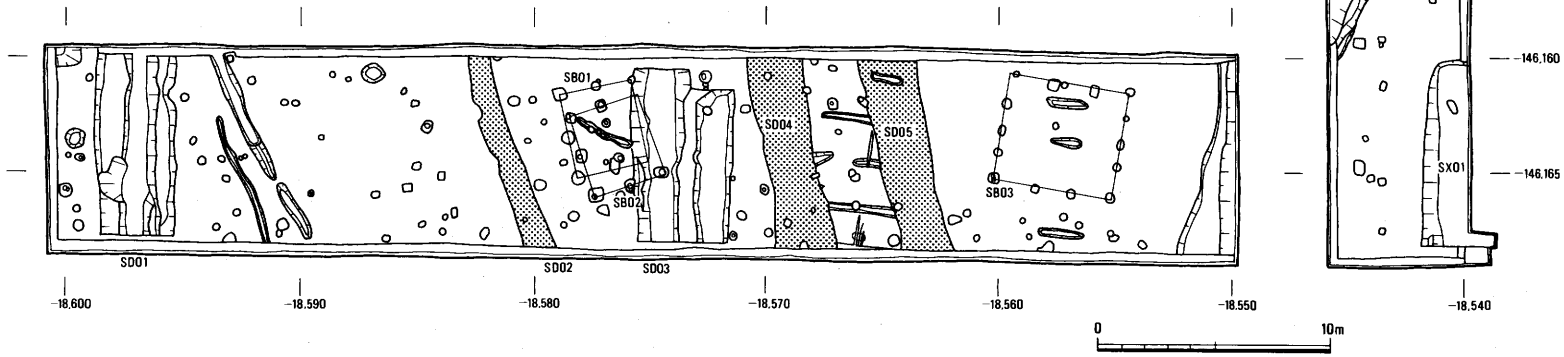
計測座標表



1．黒色腐蝕土　6．茶灰色土
2．灰褐色土　7．灰色砂土
3．茶灰色粘土　8．灰色粘土
4．灰褐色粘土　9．黒灰色粘土
5．茶褐色土　10．黄褐色砂

1．黒灰色腐蝕土　10．灰色粘土
2．黄灰色砂土　11．灰白色砂土
3．灰褐色粘土　12．灰色粘土
4．茶灰色粘土　13．灰色砂
5．灰褐色粘土　14．黒灰色粘土
6．灰褐色粘土　15．茶灰色土
7．灰色粘砂　16．茶灰色砂土
8．茶灰色粘土　17．灰色砂土
9．灰褐色粘土

下つ道側溝土層図



遺　構　平　面　図

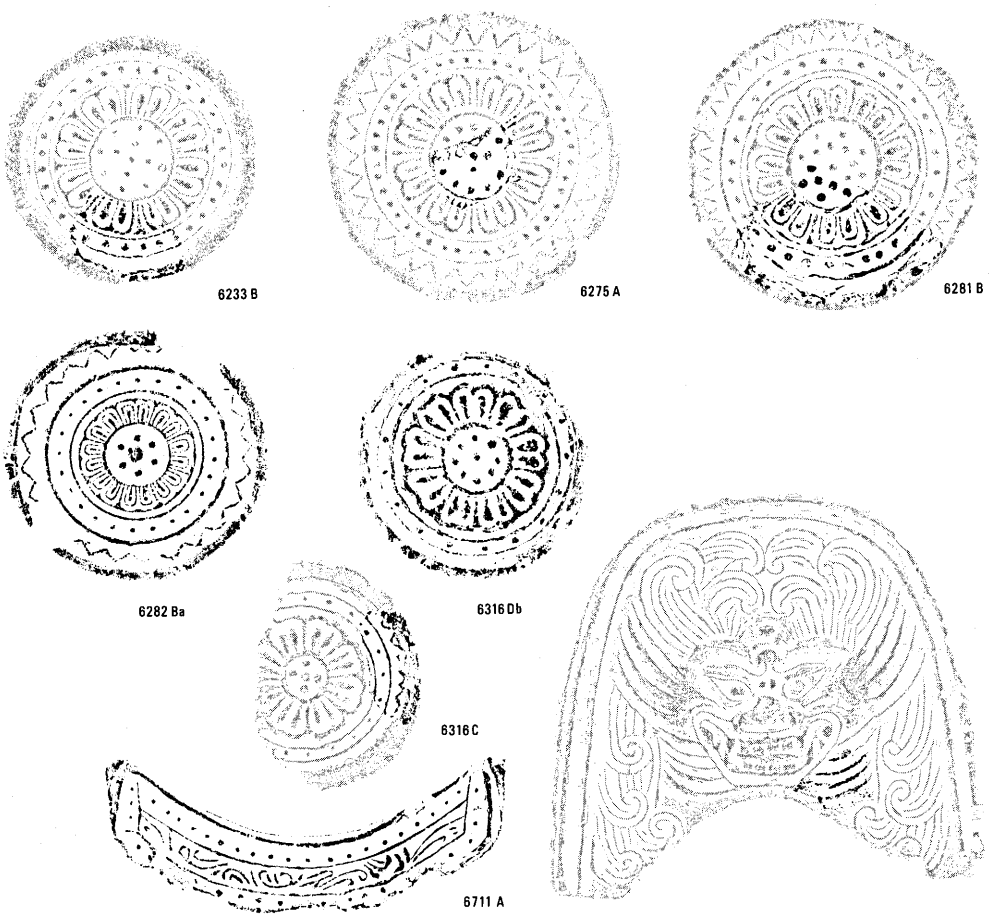
掘立柱建物ＳＢ01～03　ＳＢ01は東西２間（3.2m）、南北２間（3.9m）の総柱建物で、柱間は東西1.6m等間、南北1.95m等間である。ＳＢ02はＳＢ01とほぼ同規模で重複した位置にある。なお、ＳＢ01・02はＳＤ03との重複関係からＳＤ03よりも古い。ＳＢ03は桁行３間（4.95～5.15m）、梁行４間（4.65m）の東西棟建物である。柱穴は柱筋の整わないものが多い。それぞれの主軸は北で西にＳＢ01が約13°、ＳＢ02が約18°、東にＳＢ03が約10～13°振れる。出土遺物は皆無だが、ＳＢ01・02の主軸がそれぞれＳＤ05・02と一致することからＳＢ01・02はそれぞれＳＤ05・02と同時期と考えられる。

Ⅲ　出土遺物

整理箱約100箱分出土した。奈良時代の遺物と古墳時代の遺物とがある。

Ａ　奈良時代の遺物

瓦　類　整理箱50箱分が出土した。朱雀大路東側溝、坪境小路両側溝およびＳＸ01から出土したものが大半で、ほとんどが丸・平瓦であるが、軒丸瓦８点、軒平瓦２点、鬼瓦１



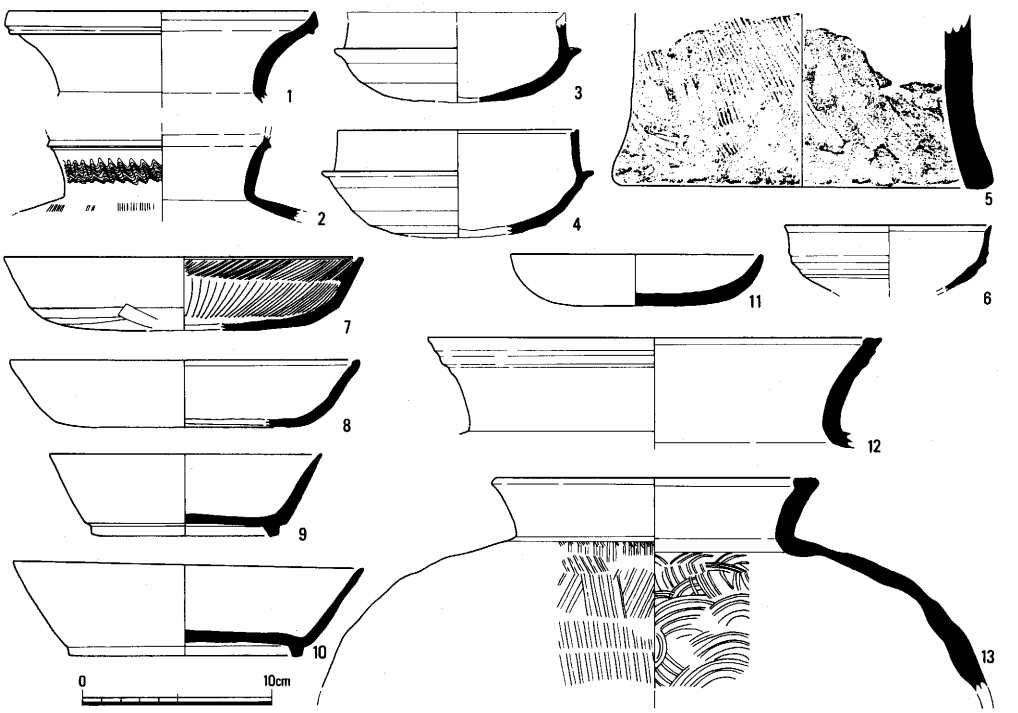
軒瓦・鬼瓦　1／5

点が含まれる。型式と点数の内訳は、軒丸瓦6233B・6275A・6281B・6281型種不明・6282Ba・6316C・6316Db・6316型種不明が各1点、軒平瓦6711Aが2点である。6233B・6275A・6281はいわゆる藤原宮式で平城宮軒瓦編年第Ⅰ期（和銅元年～養老5年）に、6282Ba・6316は同第Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）に編年される。6711Aについては、文様が変則的ではっきりとした編年的位置付けが躊躇されるが、朱雀大路の羅城門付近の調査でも6316とともに出土した例が知られており、これとの組合わせも考慮できよう。6233B・6275A・6281型種不明の3点がＳＤ08出土で、残りすべてはＳＤ06からの出土である。鬼瓦は下顎の鬚を残すのみの断片だが、毛利光俊彦氏分類の平城宮Ⅱ式Ｂ1に比定することができる。ＳＤ06東側の遺物包含層から出土した。

土器類　土師器、須恵器がある。朱雀大路東側溝、坪境小路両側溝、ＳＸ01および包含層から出土した。そのうち遺構に伴う遺存状態の良いものを図示した。

土師器には、皿Ａ（7・8・11）、甕などがある。7は口径18.7cm、器高3.7cm。口縁部は丸く、Ｂ形態。調整はｂ手法で、内面には上下2段に斜放射暗文がみられる。8は口径18.2cm、器高3.5cm。口縁部は丸く、Ｂ形態。11は口径13.2cm、器高3.5cm。口縁部は丸い。7はＳＤ06より、8・11はＳＤ08より出土した。

須恵器には、杯Ｂ（9・10）、甕（12・13）、壷、横瓶などがある。9は口径14.1cm、



出土土器・埴輪　1／4

器高4.3cm。10は口径18.3cm、器高4.8cm。調整は9・10ともにロクロナデ。9は底部内面に、10は底部外面に不整方向のナデ。12は口径23.7cm。13は口径16.5cm。ともに口縁部はやや外反気味に広がり、端部で丸く内方に肥厚する。13の口縁部は短い。調整は12・13ともに体部外面にタタキメ、内面に同心円状圧痕がみられる。9・10はSX01から出土。12はSD12から、13はSD06から出土した。

B　古墳時代の遺物

土師器、須恵器、円筒埴輪がある。SD02・04・05のほか、奈良時代条坊遺構、下つ道側溝、包含層から出土。うち、古墳時代遺構に伴っている遺存状態の良いものを図示した。

土師器には、高杯、椀などがみられるが、いずれも遺存状態が悪い。

須恵器には壷（1・2）、杯（3・4）、高杯（6）がある。1は口径16.0cm。口縁部は外反。端部には突帯をめぐらす。2は外傾する口縁に突帯を施す。その下に波状文。肩部外面に平行タタキ。3は復元口径約11.3cm、器高4.7cm。4は口径12.6cm、器高5.6cm。3・4ともに口縁部は内傾してたちあがり、端面に段をつくる。底部は丸い。ケズリは3が底部の約1／2、4がそのほぼ全面。方向はともに逆時計回り。3・4ともに田辺編年[註)]TK47型式の特徴をもつ。6は口径11.8cm。口縁部は外傾し、端部では内傾面をつくる。底部にはケズリ。1・3・6はSD04、2はSD05、4はSD02から出土した。

円筒埴輪（5）はSD02から出土。底径20cm。外面にタテ・ナナメ方向のハケ、内面にナナメ方向のナデを施す。

Ⅳ　まとめ

今回の調査で得られた新知見は次に掲げる点である。

従来の平城宮内の調査でも、下層に古墳時代の住居址などの存在が知られていたが、この時代の遺構がかなり広範囲に及ぶことが判明した。今回の調査では5世紀後葉～6世紀初頭に少なくとも2時期以上の溝、掘立柱建物の存在が判明し、今後の調査によっては、規模の大きな集落遺跡の実態を明らかにしうるであろう。

朱雀大路と坪境小路との交差部分の様相が初めて明確になった。従来の朱雀大路の復元では、坪境小路は直接朱雀大路に開かずに、坊垣（築地塀）で閉塞されていたとする考え方もあるが、今回の調査地についてみる限り、坪境小路側溝には築地塀の下で暗渠になっていたような痕跡はなく、築地塀は小路の両側で坪ごとに途切れていたと判断できる。ただし、朱雀大路東側溝には橋脚などの痕跡はみられず、小路からどのようにして朱雀大路に出たのかなど判然としない側面もある。あるいは、小路から直接朱雀大路へ出ることは許されなかったのかもしれないが、かかる問題は今後の交差部分の調査例の増加をまって慎重に判断すべきことである。　　（中井　公・森下浩行）

註）田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ、1966年。

2. 平城京東七坊大路の調査　第118次

Ⅰ　はじめに

この調査は奈良市立飛鳥小学校の校庭、奈良市紀寺町字地蔵町984番地において実施した、公民館建設の事前発掘調査である。調査地は遺存地割からみて平城京外京の東辺を画する東七坊大路の一部に相当する可能性があり、また、平安時代以降勢力を伸ばす興福寺の子院大乗院の門前郷、大乗院郷の一画を占める。調査は南北に細長い敷地にあわせ東西4m、南北35mの発掘区を設け、昭和61年8月20日から同年9月10日まで行った。

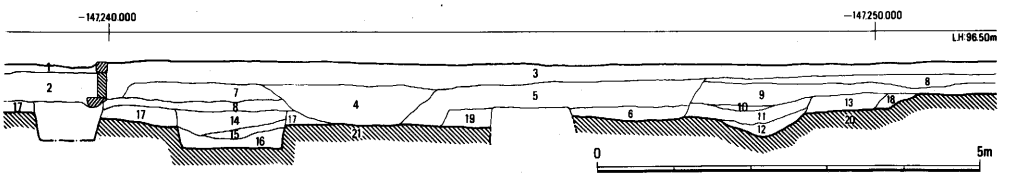
Ⅱ　検出遺構

層　序　調査地の基本層序は以下のようなものである。現地表面から30cmほどは造成客土である。以下、灰色砂質土、灰茶色砂質土あるいは茶褐色土と続き地表面下70～100cmで地山である暗茶色砂質土あるいは黄白色粘土層に達する。遺構は灰茶色砂質土か暗茶色砂質土層から掘り込まれている。

検出した遺構には、柱穴、溝、井戸、土坑があり、出土遺物から大きく12世紀代、14世紀代、18～19世紀代のものにわけることができる。以下、時期ごとに概要を記す。

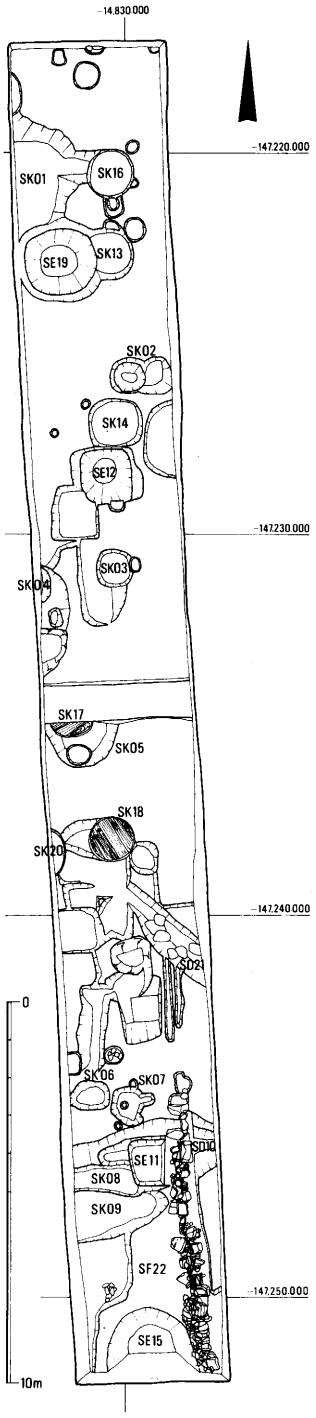
12世紀代の遺構　土坑ＳＫ01～09、溝ＳＤ10、井戸ＳＥ11・12がある。ＳＫ01は不整形な平面形の土坑。深さ約60cm。東側に幅80cmほどの張り出し部があることから東西溝と重複しているのかとも考えられるが、埋土が一様で区別がつかない。ＳＫ07は13世紀まで下るかもしれない。ＳＫ08・09、ＳＤ10とＳＥ11はほぼ同位置で重複している。土坑はいずれも東西に細長い不整形なもの。深さはＳＫ08が60cm、ＳＫ09は最も残りのよいところで40cm。ＳＤ10は素掘りの東西溝。ＳＥ11は一辺1.2mほどの隅丸方形の掘形をもつ井戸。検出面からの深さは1.03m。井戸枠は残っていない。これらの遺構は重複関係からＳＥ11、ＳＫ09、ＳＤ10、ＳＫ08の順に掘削されたことがわかる。

14世紀代の遺構　土坑ＳＫ13・14と井戸ＳＥ15がある。土坑は平面円形で径1.4～1.5ｍ



1．淡灰色砂（砂場）
2．栗石（砂場基礎）
3．黄色土
4．撹乱土
5．撹乱土
6．撹乱土
7．灰色砂質土（礫混り）
8．灰色砂質土
9．灰茶色砂質土
10．灰白色土
11．黒色土
12．黒茶色粘質土
13．黒灰色砂質土
14．茶色土
15．暗茶色砂質土
16．黄茶色粘質土
17．暗茶褐色土
18．灰白色砂質土
19．暗茶色土
20．暗茶灰色砂質土
21．黄白色粘土

西壁土層図　1／100



遺構平面図　1／200

程度。いずれも底は平らで、検出面からの深さは30cm前後。痕跡は全く残っていないが、掘形の形態から桶などを据え付けたものかとも考えられる。井戸ＳＥ15は径2.4mの円形掘形をもつ。深さは2.1m。木製の井戸枠があったのか、掘形内に円筒状の灰色粘土の埋土がある。埋土から整理箱にして15箱分の土器が出土した。大部分が土師器皿で、完形のものの他に多量の細片がある。

18～19世紀代の遺構　土坑ＳＫ16～18、井戸19がある。ＳＫ17・18は径1.2mの円形土坑に桶を据えるもの。桶底を30～50cm土坑内に埋め込む形になる。桶は底板のみが残り、側板は１点も残存しない。ＳＫ16は径1.22mの円形土坑。底は平らで、深さ31cm。桶の痕跡はないが、掘形の形態からＳＫ17・18同様、桶を埋め込んだものであろう。他に、出土遺物がないので時期は明らかではないが同様の形態の土坑にＳＫ20がある。

時期不明の遺構　出土遺物がないか、あるいはごく細片であるため時期不明の遺構もある。柱穴は掘形のみで柱痕跡は検出できなかった。発掘範囲が狭いこともあり建物にはまとまらない。ＳＤ21は幅95cm、深さ20cmの素掘り溝。溝内に人頭大の石が落ち込んでいる。溝の方向は北で西へほぼ45°ふれ、重複関係からＳＫ18・20より古いことがわかる。ＳＦ22は南北方向の道路遺構。東・西の縁辺に２～３段石を積み、路肩としている。東路肩は比較的よく残っており7.9m分を検出した。西路肩はほとんど残っておらず、石積みの裏込め石の一部が遺存している。道路幅は2.8m以上。重複関係からＳＫ08・09、ＳＤ10、ＳＥ14より新しいことがわかる。明治23年の地籍図では、このＳＦ22が接続すると思われる南北通りは、調査地の北辺を東西に通る現在の地蔵町の通りと逆Ｔ字状に交差し途切れており、そこから南へは伸びない。このことからおそくとも明治中期の段階で交差部以南の南北道路ＳＦ22は廃絶しており、地表にはその痕跡すらも残っていなかったことが知られる。

Ⅲ　出土遺物

出土した遺物には土器類と若干の瓦類がある。全体の量は遺物整理箱にして32箱ほどである。このうち、遺構埋土からの出土遺物でまとまりのあるものについて報告する。

ＳＥ15出土土器（１～23）　土師器皿・羽釜、須恵器鉢・甕、瓦器椀・擂鉢・火鉢・蓋、焼締陶器鉢、青磁椀がある。本調査出土土器のうちＳＥ15出土土器が最も多く、全体のほぼ半分を占め、さらにこのうちのほとんどが土師器皿である。土師器皿には白色系のもの（１～５・11・12・14～16）と赤色系のもの（６～10・13）がある。また、口径７～８cm、器高1.3cm前後の小皿、口径10～11cm、器高1.5cm前後の中皿、口径13cm前後、器高3.5cm前後の大皿に区分できる。大皿には赤色系の皿はない。他に、器壁が厚く、内彎ぎみの口縁部をもつ皿（17）が１点ある。土師器羽釜には口径28cmの大型のもの（18）と、口径17.2cmの小型のもの（19）がある。瓦器椀には高台を付さないもの（20）がある。いずれも14世紀中頃の製品である。

ＳＫ01出土土器（24～35）　土師器皿・羽釜・甕、須恵器鉢、瓦器椀がある。土師器皿には口径9.0～9.5cm、器高1.5cm前後の小皿（24～27）と、口径14cm前後、器高2.8cm前後の大皿（28～30）がある。小皿には精良な胎土で薄手のもの（27）と、胎土に砂粒がまざり厚手のもの（24）、そしてその中間形態のもの（25・26）がある。24は灯火用に使用され口縁部に煤が付着している。土師器羽釜は口径33.4～33.8cmのほぼ同大のものが３点（31～33）ある。いずれも12世紀中頃の製品であろう。

ＳＫ02出土土器（36～41）　土師器皿・羽釜、瓦器椀がある。土師器皿は口径10cm前後、器高1.8cm前後の小皿（36・38）と、口径15.4～16.2cm、器高2.4～3.0cmの大皿（38・39）がある。いずれも内面と口縁部外面をよこなでする。37は平坦な底部から短い口縁部を上方へ折り返す特異なもの。瓦器椀は断面三角形の高台をもち、内面には密な、外面には粗いみがきが施される。いずれも12世紀中頃の製品であろう。

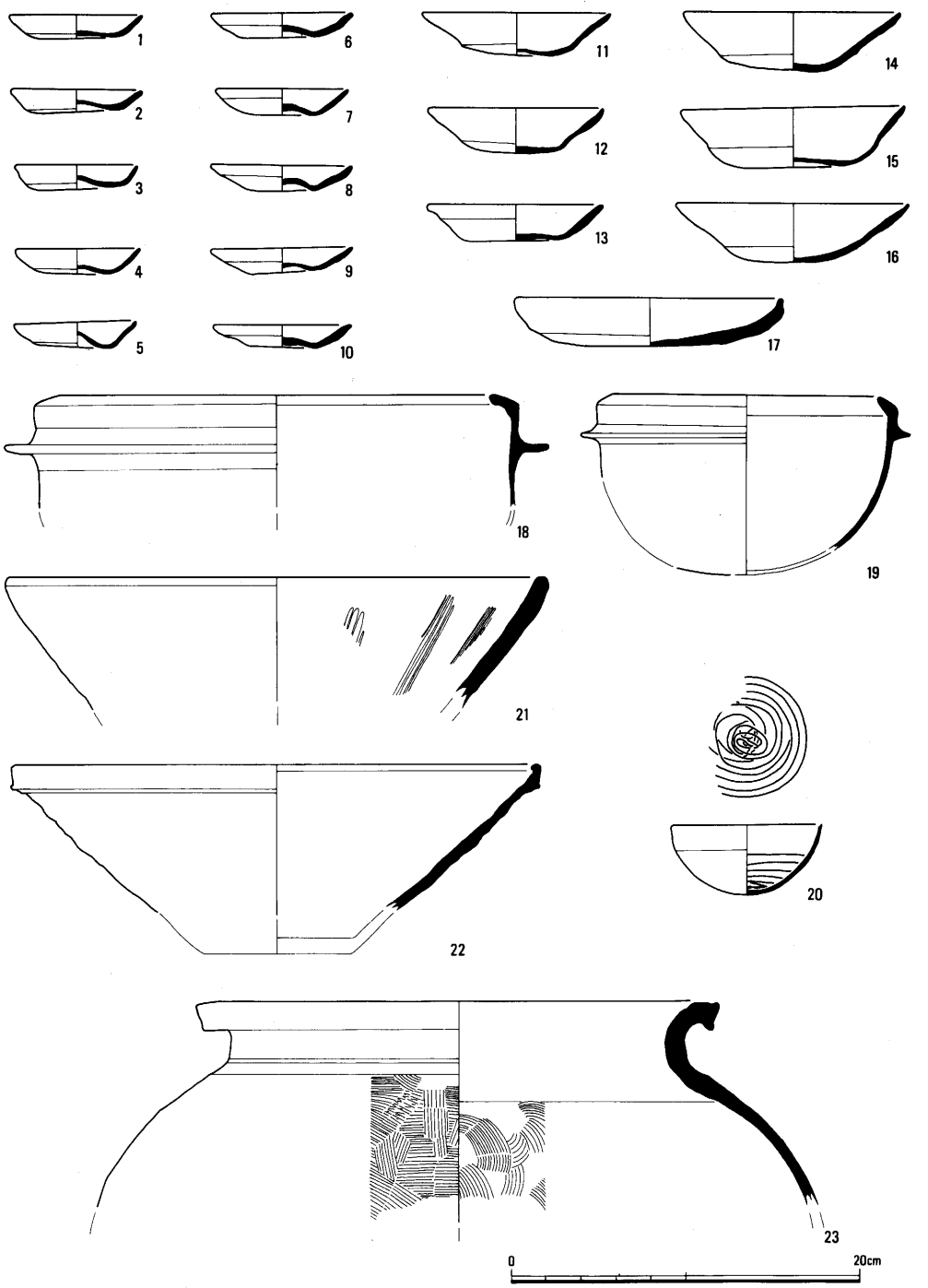
ＳＥ12出土土器（42～49）　土師器皿、須恵器皿・鉢、瓦器椀がある。土師器には口径9.6～10.4cm、器高1.6～2.4cmの小皿（44～47）と、口径15.5cm前後、器高2.8～3.6cmの大皿（42・43）がある。いずれも内面と口縁部外面をよこなでする。47は底部外面に鳥の絵を墨書する。瓦器椀（48）はしっかりとした高台をもち、内面には密な、外面には粗いみがきを施す。いずれも12世紀前半の製品であろう。

Ⅳ　まとめ

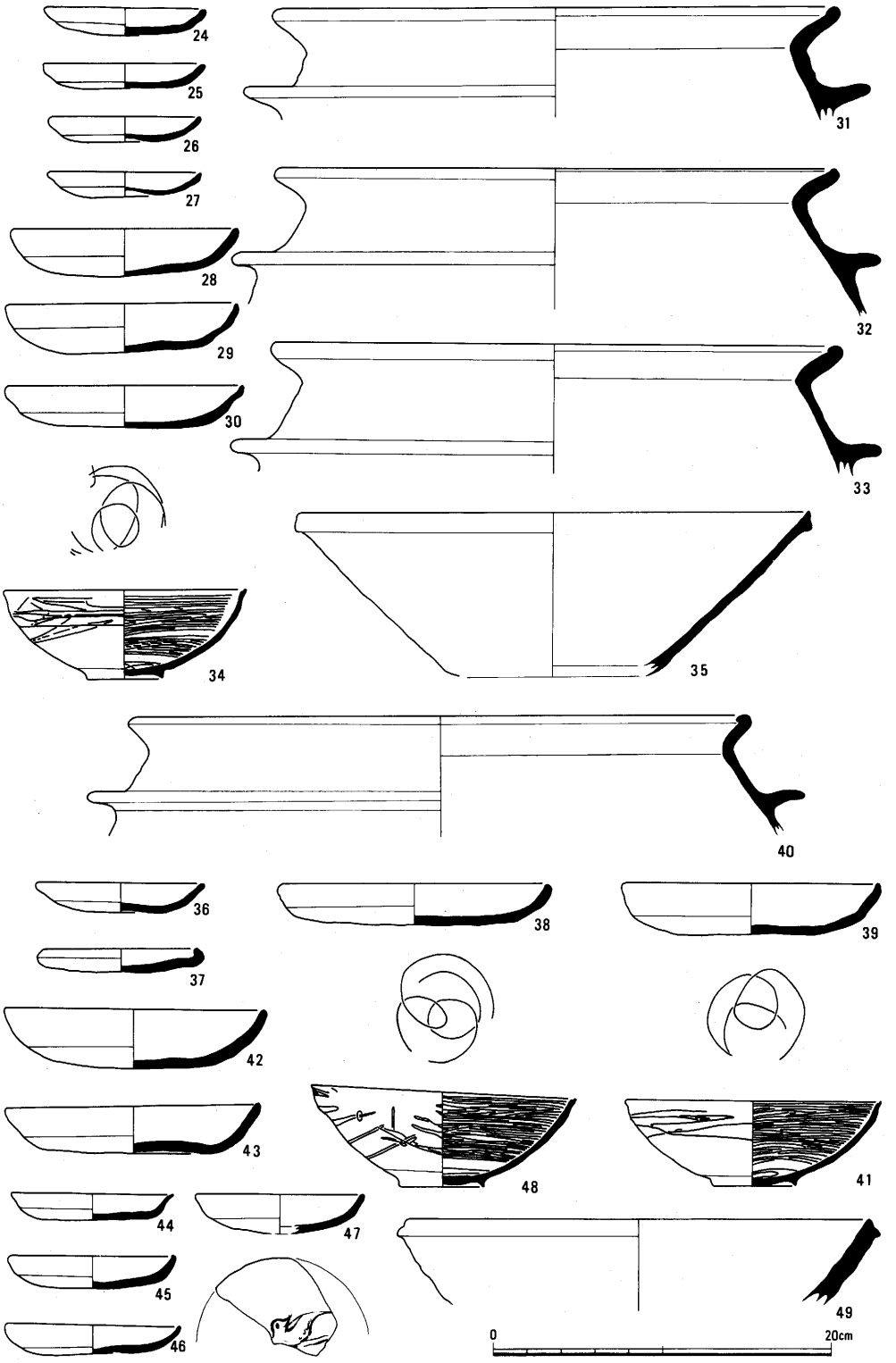
以上、調査の概要を記した。この調査で検出した遺構は12世紀以降のものであり、奈良時代に遡るものはないことから、調査地が東七坊大路には相当しないことが確認できた。

また、「奈良坊目拙解」「奈良曝」によって奈良町の成立過程がある程度知られ、これによれば当該地は17世紀前半に町場になったとされる。それ以前は大乗院郷の一画として

郷民の居住地であったと思われるが、その居住が12世紀前半には始まっており、むしろ町場になったとされる17世紀前後の遺構がないことが注意をひく。　　（西崎卓哉）



ＳＥ15出土土器　1／4



SK01・SK02・SE12出土土器　1／4

3. 平城京左京（外京）六条七坊三坪の調査　第115次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市瓦堂町19番地において実施した奈良日々新聞社届出のマンション建設に伴なう事前発掘調査である。当該地は、平城京条坊復元では左京（外京）五条七坊三坪の西辺にあたり、東六坊大路東側溝の存在が想定される位置にある。また、中近世期には奈良町として栄えた地でもあり、享保年間の文献地図によって、近世期には芝居小屋が設けられていたことがわかる。また、周辺は木辻遊里の一端にあたり、往時は賑わいをみせていたことが知られている。

調査地敷地は、間口が狭く奥行きが広い奈良町通有の敷地形態を示す。この調査敷地東端に石垣をめぐらす基壇痕跡がみられ、北端の石垣が調査地を南北に二分割する位置にある。このことから、調査当初に調査地には南北に２戸の町家があったことが窺えた。

これらのことから、調査は東六坊大路東側溝の確認とともに、奈良町町家の様相と、その町割の解明を目的として、調査地全域にわたる約370㎡の発掘区を設定して行なった。

調査期間は、昭和61年７月９日から８月20日にかけてである。

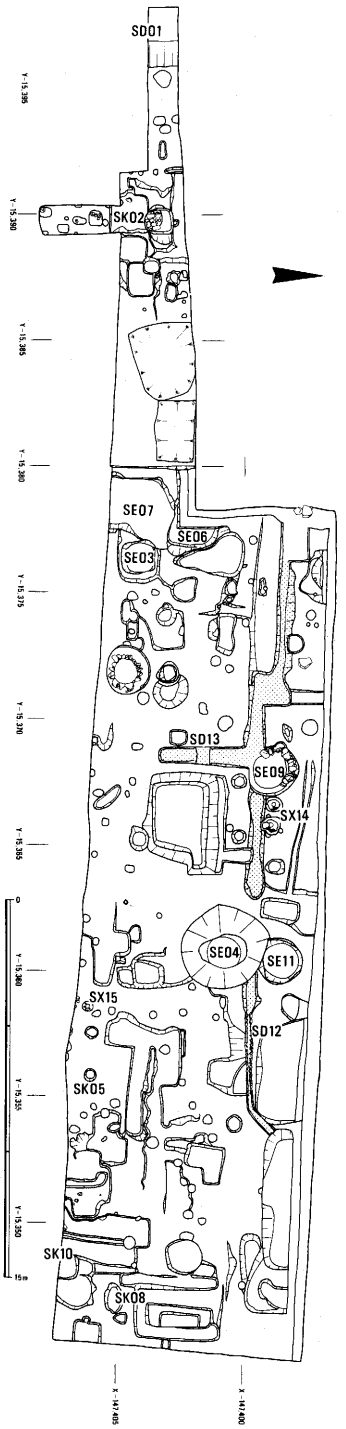
Ⅱ　検出遺構

調査地は、御蓋山から西に延びる丘陵の西斜面にあたり、発掘区内の地山は西に向かって除々に下降する。発掘区東端と西端とでの地山比高差は、約２ｍにもなる。発掘区東端の一部では、地表土下約５cmでただちに黄褐色砂礫の地山となるが、地山の下降に従い、各所に平坦面を意図した整地土がおかれ、複雑な層序を呈する。整地土は、発掘区全面に連続してみられるものではなく、地山の高低差を補うための部分的な整地と考えられる。検出した遺構は多く、溝、井戸、土坑　柱穴等があるが、ここでは主なものを概述する。

ＳＤ01　発掘区西端で検出した南北方向の素掘り溝である。発掘区西側へ広がる。検出幅約2.3m、検出面からの深さ約0.6mを測る。東肩を検出したのみで、溝全幅については不明である。埋土から瓦器片等の中世期の遺物が出土している。おそらくは、東六坊大路東側溝を踏襲する溝であろう。

ＳＫ02　発掘区西部拡張区で検出した一辺１ｍの隅丸方形の土坑である。検出面からの深さ約0.6m。壁面が垂直に掘り込まれ、底面に礎板状に塼を重ね置いていることから、柱穴となろう。発掘区南側に拡張区を設け、これに組み合う柱穴を精査したが確認できず、北側へと続くものとなろうか。底面に敷かれた塼は、長寸30cm、短寸15cm、厚さ10cm程度のもので、８個体分が出土。埋土からの出土遺物は少なく、時期決定資料となるものはない。

ＳＥ03　発掘区西部で検出した一辺1.2mの隅丸方形の井戸である。検出面からの深さ



遺構平面図　1／300

約２ｍまでを確認したが、壁面が袋状を呈し危険なため、掘り下げは断念した。埋土中から10世紀前半代の土器類が出土した。井戸枠は残存せず、抜き取られたものと考えられる。

ＳＥ04　発掘区中央付近で検出した平面円形の井戸。検出面では、直径約３ｍの円形を呈するが、深さ0.4ｍまでを断面擂鉢状に掘り、その中央を径約1.2mの円形に掘り下げる。検出面からの深さ約３ｍを測る。底部付近から曲物と12世紀代の瓦器椀等が出土した。井戸枠はみられず、おそらくは素掘り井戸であろう。

ＳＫ05　発掘区中央東南寄りで検出した土坑。直径約0.5mの不整形な円形を呈する。検出面からの深さ約0.2m。13世紀中葉頃の瓦器椀、土師器皿が出土した。

ＳＥ06　発掘区西隅で検出した井戸。一辺約２ｍの平面隅丸方形となろう。発掘区外へと続く。検出面からの深さ約1.5mまでを確認。更に深く掘り込まれているが、壁の崩落が著しく危険なため掘り下げは断念した。13世紀の土器片少量が出土した。

ＳＥ07　ＳＥ06に南接し、ＳＥ03の北西肩を掘り込む形で構築された一辺約1.5ｍの平面方形に復元できる井戸。検出面からの深さ1.5ｍまでを確認した。埋土から13世紀後半代の土器片が出土した。このＳＥ07に重複して近世井戸が南側に掘り込まれている。ＳＥ07の南肩を掘り崩し、北壁に地山土を塡めて壁を作り替えたもので、一辺約1.5mの平面方形となる。

ＳＫ08　発掘区東端で検出した土坑。14世紀後半の土師器皿と滑石製鍋１点が出土。

ＳＥ09　発掘区中央北寄りで検出した石組井戸。径約２ｍの円形を呈し、検出面から約0.3m掘り込んだのち、その中央を径約1.6mの円形に掘り下げている。検出面からの深さ約２ｍまでを確認した。石組は、一段掘り込まれた平坦面上に巡らされており、一段分のみが残存していた。井戸内には築かれていない。地表に

現われる部分にのみ石組を築いたものであろうか。出土遺物からみて、近世期には廃絶されたものである。また、この井戸の廃絶後に後述のＳＤ12・13が作られている。

ＳＫ10　発掘区東部壁際において検出した土坑。近世期の土師器皿が多量に出土した。

ＳＫ11　ＳＥ04の北側に接して構築された径約1.8m、深さ2.5m以上の近世期の井戸。

ＳＤ12　ＳＥ04、09の上面で検出した幅約20～40cm、深さ５～30cmの東西方向の溝で一部に護岸の列石が残る。この溝の位置は、調査地の旧町割の南北区画線上にあたり、この溝を境に旧町家は南北に分かれていたものと考えられる。

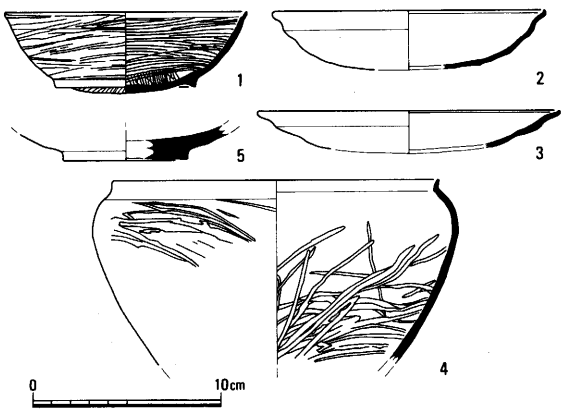
ＳＤ13　ＳＤ12に流れ込む形で作られた幅60cm、深さ30cmの素掘り溝である。これは丁度、調査地敷地を東西に二分する線上に位置する。この溝を境に東西の地山に10～20cmの段差がつき、一部にそれを補う形での整地土がみられる。この溝により、町家内建物の東西区割がなされていたものであろう。

ＳＸ14　ＳＥ09の東側でＳＤ12の廃絶後に作られた埋甕遺構である。一辺約0.7ｍの方形土坑に胴部径45cm程度の陶器甕を据える。東西に２基並ぶ。これと同様の埋甕遺構が発掘区南東ＳＸ15にみられる。また、ＳＸ14の西側ＳＥ09の上面に漆喰で作られた方形枡状の施設が二基並び作られていた。両者ともに便槽として用いられたものであろう。

Ⅲ　出土遺物

今回は、古代から近代にかけての多種多様な大量の遺物が出土した。ここでは特に、井戸ＳＥ03出土の土器についてとりあげ、概述する。

出土土器には土師器皿（２・３）、黒色土器Ａ類鉢（４）、Ｂ類椀（１）、緑釉陶器椀（５）がある。土師器皿は、器壁が薄く、「て」字状の口縁を呈するもの。２は口径14.5cm、器高3.2cmを測る。３は口径16.1cm、器高2.9cmとやや大型で器高の低い特異な器形を呈する。黒色土器Ｂ類椀は、内彎する半球状の体部を呈し、口縁部内側に一条の沈線を巡らす。口径は12.7cm、器高4.3cmを測る。内外面ともに緊密なへら磨きを施し、内面見込部も同様に整方向のへら磨きを施す。底部外面高台内にも平行方向のへら磨きを行なう。黒色土器Ａ類鉢は、口径17.2cm、残存高9.6cmを測る。内面及び外面肩部上半が炭素吸着により黒色化する。内面及び、外面肩部に斜め方向のへら磨きを施す。緑釉陶器椀は、底部のみが残存する。焼成はやや硬質で、胎土は灰色を呈し緻密である。



ＳＥ03出土土器　1／4

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、奈良町遺跡で初めて町家一軒分の敷地範囲を調査することができた。その結果、近世期における当該地の様相を窺うことのできる遺構や遺物を明らかにでき、また別に古代末期における土器編年に重要となる資料をも得ることができた。ここでは、この２点についてふれ、まとめとしたい。

これまでの奈良町遺跡の調査では小規模な範囲での調査しか行なうことができず、肝要な町家内での様相を明らかにすることはできずにいた。当該地が近世期における南北２軒分の敷地範囲を含むことは、調査地東端にある石組基壇の存在からある程度考えられた。

調査の結果、護岸列石を伴なう溝ＳＤ12を検出し、これがほぼ基壇石組の北限と筋を合わせていることから、この溝により南北２軒の区画がおこなわれていたことを明らかにし得た。更に、南側の町家では中央で建物が東西に区画されていたであろうことが、中央部を南北に流れ、溝ＳＤ12につながる溝ＳＤ13の存在により窺えた。このＳＤ13をもって建物を東西に区分していたであろうことは、溝を東西の限りに整地土が一段の段差をもち、東側が一段高く平坦面となっていることからも明らかである。当該地では、このように溝を境に建物を分割し、基礎部分の整地土の高さを変えることによって階段状とし、東西端の２ｍにおよぶ高低差に対処していたことが窺える。現存の町家からの検討に加え、これら地下遺構の解明により、更に具体的な様相が明らかになっていくことであろう。

次に、井戸ＳＥ03出土土器についてふれよう。出土の黒色土器椀は、10世紀中葉に比定している平城京左京六条三坊ＳＫ21[1]出土黒色土器Ｂ類椀に比して、形態的に一段階古い型式を示している。また土師器皿（２）は10世紀前半に比定する左京六条三坊ＳＥ01出土[2]の土師器皿に類似する形態を示す。このことからみて、ＳＥ03出土土器の年代は概ね10世紀前葉～中葉に求めることが可能であろう。

ところで、左京六条三坊ＳＥ01では、黒色土器の供膳形態は、椀形態に近しいものがあるが、基本的にはＡ類の杯Ｂのみである。また、六条三坊ＳＥ01の次段階に相当すると思われる平安京左兵衛府ＳＤ01[3]では、椀形態の黒色土器が出土しているが、これもＡ類のみが見られる。ところが、左京六条三坊ＳＫ21及び、天暦７年（953）の墨書のある緑釉陶器椀が共伴する平安京右京二条二坊ＳＸ01[4]では既にＢ類での椀形態がみられている。

以上を総合してみると、黒色土器Ｂ類椀形態の出現は、概ね10世紀前半第２四半期頃に考えることができよう。しかし、この段階では黒色土器Ｂ類椀の占める割合は少なく、普遍化するのは10世紀後半になってからと考えておくのが妥当ではあろう。　（立石堅志）

１）奈良市教育委員会『昭和58年度　奈良市埋蔵文化財調査報告書』　1984年
２）奈良市教育委員会『昭和58年度　奈良市埋蔵文化財調査報告書』　1984年
３）京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報　1978』　1978年
４）京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度　平安京発掘調査概報』　1982年

4. 平城京左京九条一坊三坪・六坪の調査　第106次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市西九条町５丁目４－９・11・12番地において、株式会社第一化工届出の工場建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、市域南郊の工場団地内の一画にあり、平城京の条坊復原では左京九条一坊三坪の東辺中央部と三・六坪々境小路とにまたがっている。調査は昭和60・61の両年度にわたり、昭和61年２月15日から３月31日にかけて三坪内の約600㎡を、同年４月１日から５月13日にかけて坪境小路部分で約216㎡を発掘した。両年度の調査結果を併せて報告したい。

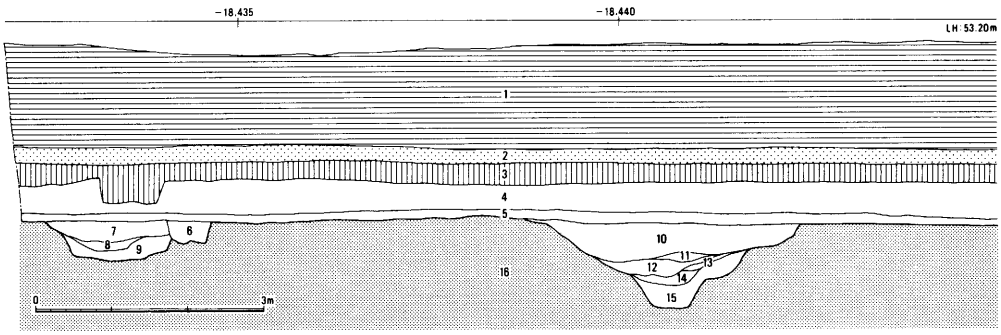
Ⅱ　検出遺構

発掘区内の土層は、地表下1.6～1.9mまでが造成盛土、以下に灰色粘土と灰褐色粘土の堆積２層で0.3～0.5mがあり、黄褐色粘土の地山に達する。遺構検出面は地山の上面で、奈良時代の主な遺構には、三・六坪々境小路と、三坪内では掘立柱建物４棟、井戸１基などがある。そのほか、最近まで使用されたとみられる灌漑用の井戸５基（網目で表示）がある。

ＳＦ01　南北方向の道路で、左京九条一坊の三坪と六坪とを画す。東西両側溝を有し、路肩間の幅は5.3m前後である。舗装などの有無は確認できなかった。

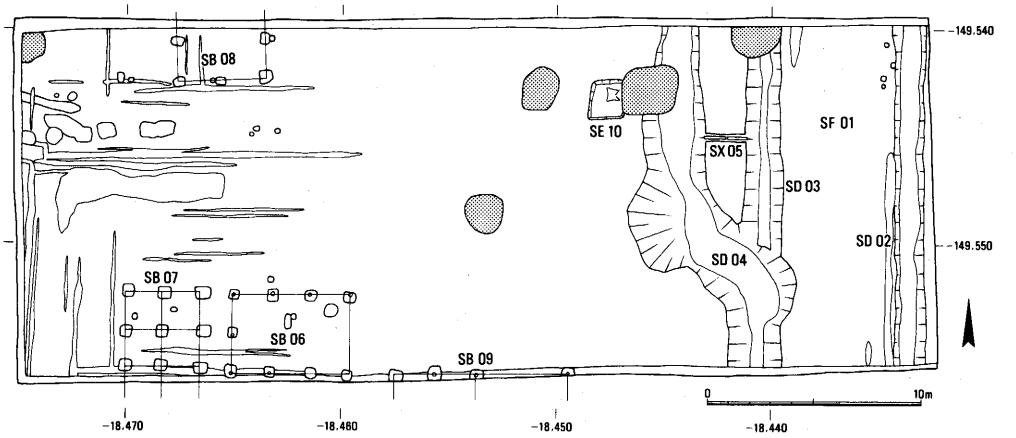
ＳＤ02　ＳＦ01の東側溝。幅1.3～1.5m、深さ0.3～0.5mの素掘り溝である。溝内には上層に茶灰色土、下層に灰色粘土が堆積し、奈良時代中頃～後半の土器が出土した。

ＳＤ03　ＳＦ01の西側溝。幅1.5～1.9m、深さ0.3～0.4mの素掘り溝で、発掘区南半では後述のＳＤ04と合流し、以南は幅3.0m、深さ1.1mで急に深まる。東側溝との間隔は溝心々で約6.9mである。溝内には茶灰色土が堆積し、奈良時代中頃～後半の土器が出土した。



1. 灰白色礫砂（造成土）
2. 黒色砂土（造成土）
3. 褐色砂（造成土）
4. 灰色粘土
5. 灰褐色粘土
6. 茶灰色土
7. 茶灰色土（ＳＤ02）
8. 灰褐色粘土（ＳＤ02）
9. 灰色粘土（ＳＤ02）
10. 茶灰色土（ＳＤ04）
11. 灰褐色粘土（ＳＤ04）
12. 灰色粘土（ＳＤ04）
13. 灰褐色粘土（ＳＤ04）
14. 黄灰色粘土（ＳＤ04）
15. 灰色粘土（ＳＤ04）
16. 黄褐色粘土（地山）

南壁（三・六坪々境小路部分）土層図



遺 構 平 面 図

S D04　S D03の西側でこれに平行する南北方向の素掘り溝。両溝の間に築地塀の存在を想定し、これの西雨落溝と考えるが、発掘区南半では東に折れてS D03と合流する。幅1.7～4.5m、深さ0.7～1.1mで、合流部に向けて深まる。溝内には下層に灰色系の粘土が、上層に茶灰色土が堆積し、奈良時代中頃～後半の土器が出土した。ところで、両溝合流部のすぐ北側には、両溝をつなぐ後述の木樋S X05がある。この点から、S D04は当初この付近で完結し、木樋を通じてS D03へ排水していたが、のちに以南を掘削してS D03に合流させたとみることが可能である。

S X05　S D04からS D03へ水を流す東西方向の木樋。幅25～35cm、深さ20cmの掘形内に、一木刳貫のもの2本をつないで据えており、東側が長さ90cm、西側が82cm、内法幅はともに14cmで、高さ10cmほどまで残存した。底面の平均勾配は約$\frac{1}{41}$である。蓋は残存していなかったが、暗渠であったと推察される。

S B06　桁行3間（5.4m）、梁行2間（3.6m）の東西棟建物。削平のためか、東妻柱は遺存しない。柱間は桁行、梁行ともに1.8m等間である。

S B07　桁行2間（3.4m）以上、梁行2間（3.6m）のいわゆる総柱の南北棟建物と考える。柱間は桁行が1.7m等間、梁行が1.8m等間である。

S B08　桁行1間（1.8m）以上、梁行2間（4.2m）の南北棟建物。梁行柱間は2.1m等間である。建物方位が北で西に振れている。

S B09　東西3間（8.2m）の柱列で、東廂付南北棟建物の北妻柱列と考える。柱間は身舎梁行が1.95m等間で、廂の出は4.3mである。3柱穴に柱根が残存した。

S E10　東西1.6m以上、南北1.85mの隅丸方形掘形をもつ井戸で、深さ2.4m。井戸枠は各辺一枚の竪板を隅柱なしの横桟で支持する構造で、竪板の合わせ目仕口を釘留めしている。内法は一辺55cmである。枠内からは奈良時代中頃～後半の土器が少量出土した。

（中井　公）

5. 平城京左京二条三坊四坪の調査　第107次

1. はじめに

この調査は、株式会社ヒラサワ代表取締役平沢宗雄氏届出の商業ビル建設に伴う事前発掘調査で、奈良市法華寺町214—1,216—1,217、221番地において実施した。届出面積は2,026.40㎡である。このうち一部は水田として残っていたが、大半は厚く土砂が入れられ造成されていた。

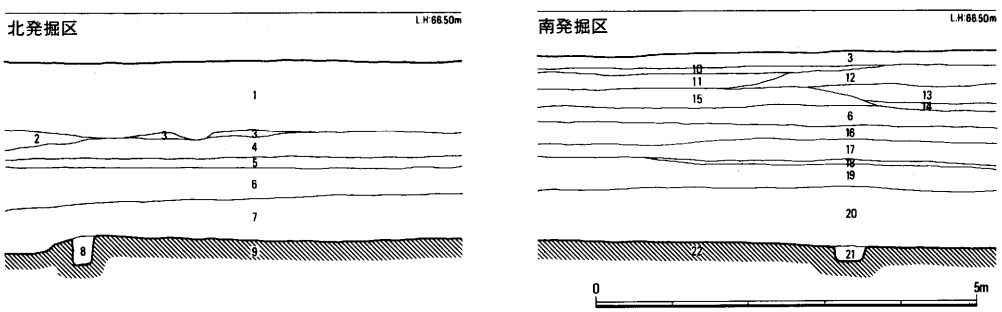
これまでの周辺の調査から、今回の届出地はかって佐保川の氾濫原となっていたことが知られており、奈良時代の遺構はすでに削平されている可能性があった。そこで、まず昭和61年２月26日に遺構の残存状況を確認するために小範囲の試掘を行ったところいくつかの小柱穴を確認したので、いったん試掘坑を埋め、あらたに発掘調査を実施することにした。発掘調査は南・北二箇所に発掘区を設定し行なった。昭和61年４月８日に南発掘区の調査を開始、同月14日に終了。ひきつづき北発掘区の調査に入り同月22日に終えた。

2. 検出遺構

発掘区ごとに層序と検出した遺構の概要を記す。

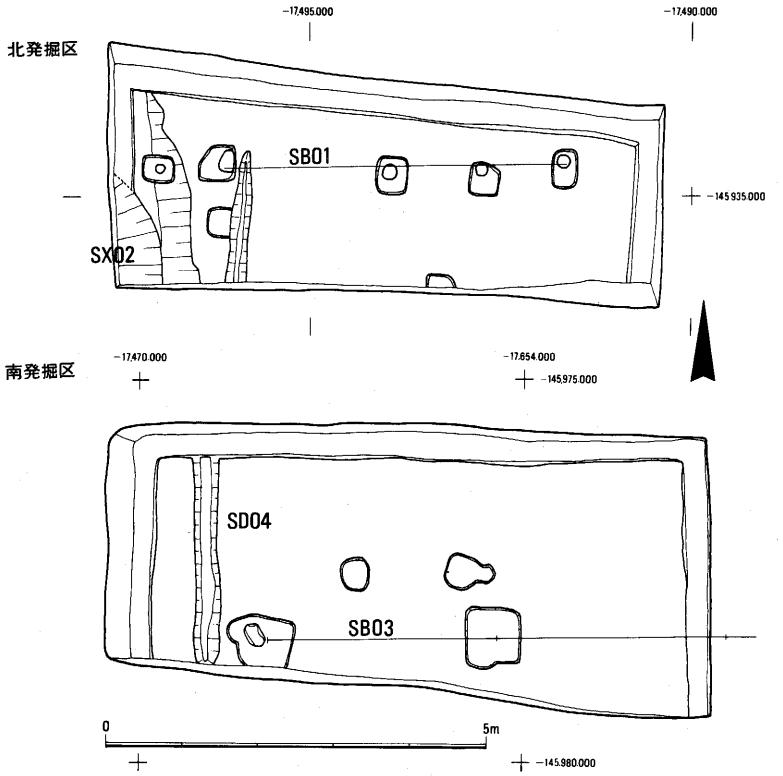
南発掘区の遺構　調査地の最奥部、四坪の南端部に相当する地点に設定した。現状は水田であり、この耕作土と床土を取り除くと約1.2m砂層が続き灰色粘土層に達する。灰色粘土層は少量の奈良時代の瓦片、土器片を含んでおり１mほどの厚さがある。遺構は灰色粘土層の下、黒色粘土層上面で検出した。遺構面の標高は63.50m前後である。遺構面が深かったことと砂層からの激しい湧水のため、発掘面積150㎡に対して実際に遺構検出ができたのは約30㎡とごくわずかになった。

検出した遺構は溝１条と柱穴である。いずれも奈良時代の遺構である。溝ＳＤ03は素掘



1. 造成客土
2. 撹乱土
3. 黒色粘土（旧耕作土）
4. 暗茶色粘土
5. 茶灰色砂質土
6. 灰色砂
7. 暗灰色粘土
8. 灰色粘土（柱穴埋土）
9. 黄灰色粘土
10. 黒灰色粘質土
11. 灰色粗砂（黄褐色粘土ブロック）
13. 灰色粗砂
14. 青灰色細砂
15. 黄褐色砂質土
16. 青灰色砂質土
17. 青灰色粗砂
18. 灰色砂
19. 灰色粘土
20. 灰色粘土（19よりさらに粘土質）
21. 灰色粘土（柱穴埋土）
22. 黒色粘土

南・北発掘区北壁土層図　1／100



遺構平面図

1／100

りの南北溝。幅30cm、深さ10cm。柱穴は掘形の一辺が70cmの大柱穴と、小柱穴にわけることができる。大柱穴は発掘区東壁にさらに1個がかかっており、10尺等間で少なくとも2間分ある。小柱穴は柱間5尺で1間分を検出したのみである。

北発掘区の遺構　この発掘区は調査地の北端、国道24号線にほど近いところに設定した。層序は南発掘区と似かよっているが、こちらは厚さ1.0mほどの造成客土があり、現地表面から約2.5mで遺構面に達する。遺構は黄灰色粘土層上面で検出した。旧水田面の標高は65.0m前後で南発掘区に比べ約1m低いが、遺構面は63.6mとほぼ同レベルである。この発掘区も発掘面積150㎡に対して実際に遺構検出ができたのは20㎡である。

検出した遺構は土坑、柱穴、溝である。土坑SK02は発掘区の西端で検出したので全体の規模は不明だが、東西0.56m以上、南北1.44m以上、深さ20cmある。埋土から瓦片が出土した。柱穴はすべて掘形の一辺が40～50cmほどのもので、なかに柱間7.5尺で2間分ならぶものがある。いずれも奈良時代のものである。溝は素掘りの南北溝で幅25cm、深さ10cm。時期は不明である。

遺構を検出できた範囲が狭いためにこれらの遺構はまとまったものとはならないが、少なくとも佐保川の氾濫原となっていたこの地でも遺構が残存していることが確認できたことは、今後この地域の発掘調査をすすめるうえで参考となろう。

なお、両発掘区の出土遺物はごく少量で、遺物整理箱1箱に満たない。　（西崎卓哉）

6. 平城京左京三条四坊一坪の調査　第113次

本調査は、西田吉弘氏届出の共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は近鉄新大宮駅の北東約150mの位置にあたり、条坊復元では左京三条四坊一坪の東辺部分に推定される。調査は調査地中央に東西10m、南北４mの発掘区を設定して行なった。

土　層　発掘区の土層堆積状態は地表から0.7mまでは黄灰色砂土の造成客土で以下、旧耕土、暗黄褐色土、黄灰色砂礫、黄褐色土、茶褐色土、茶褐色砂土と続き、地表下1.6～1.7mで茶褐色土の地山となる。遺構はすべて地山上面で検出した。なお、発掘区の南東隅には古墳時代の遺物を包含する灰色粗砂があり土師器甕片が出土している。また、発掘区の北西部は自然流路ＳＤ06によって一部を削平されている。

検出遺構　奈良時代の掘立柱建物３棟、溝１条、井戸１基がある。

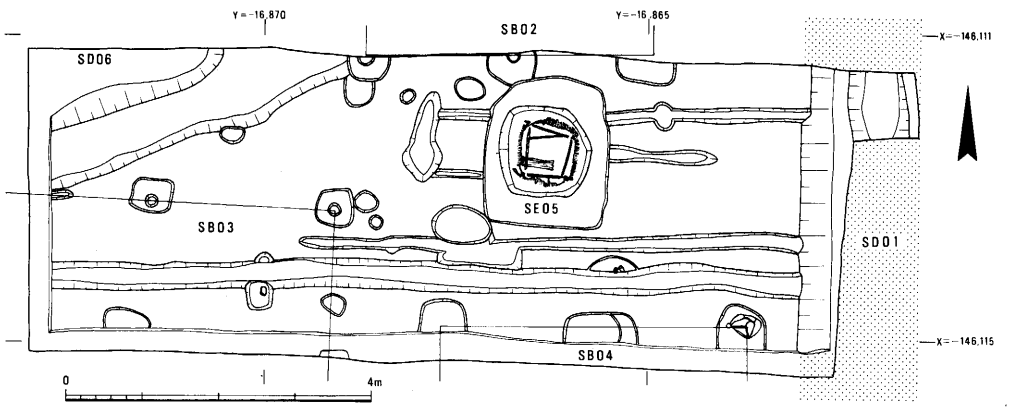
ＳＤ01　発掘区の東辺で検出した南北の素掘り溝である。発掘区内では西岸のみを検出した。溝は幅1.8m分を検出し、深さ0.4mを測る。埋土から奈良時代の土師器、須恵器が出土した。この溝は一坪の東辺を画する何らかの溝と考えられる。

ＳＢ02　発掘区の北辺で検出した東西２間の柱列で、南北棟建物の南妻柱列と考えられる。柱間寸法は1.8m（６尺）等間である。中央の柱穴には柱根が残存している。

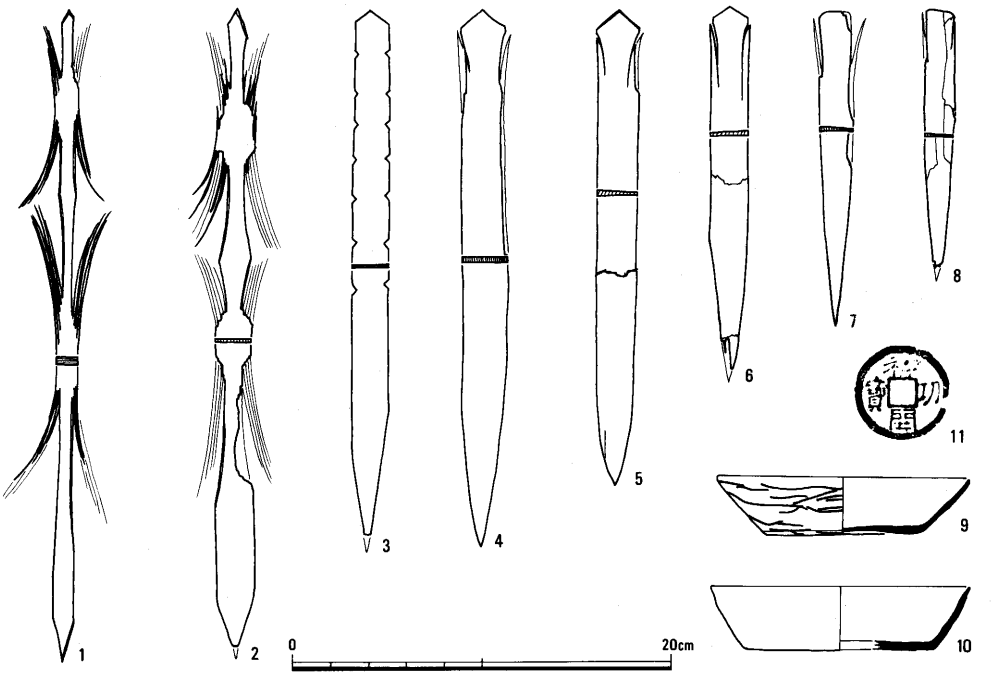
ＳＢ03　発掘区の南西隅で検出しな東西１間以上、南北１間以上の柱列で、建物の南東隅にあたる。柱間寸法は東西2.4m（８尺）、南北2.1m（７尺）である。

ＳＢ04　発掘区の南辺で検出した東西２間の柱列で、南北棟建物の北妻柱列と考えられる。柱痕跡はなかったが、柱穴中央で柱間寸法を復元すると1.95m（6.5尺）等間となる。

ＳＥ05　ＳＥ02の南側で検出した井戸である。掘形は東西1.6m、南北2.0mの隅丸長方形で、深さ1.6mを測る。井戸枠は下半が曲物、上半が縦板組のものである。曲物は径80cm、



遺　構　平　面　図　1／100



出　土　遺　物　1／4（11は1／2）

高さ55cm、厚さ0.9cmのものを2段積上げたもので、上段の遺存状態は悪い。縦板組は一辺に4～5枚の縦板をあてがい、内側の四隅に角柱をたて横桟で枘組するもので、一辺は約0.8mを測る。縦板はその遺存状態が悪いためその幅などの大きさについては不明である。井戸底には2～3cm大の小石を敷つめている。井戸枠内からは、奈良時代後半の土器と共に斎串が出土している。

出土遺物　奈良時代の軒丸瓦、丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、木器、古墳時代の土師器、その他に時期不明だがサヌカイト剝片がある。そのうちＳＥ05井戸枠内から出土した緑釉平瓦、土器、木器、銅銭について述べる。

緑釉平瓦　小片だが凹面のみ施釉する。釉の発色は濃い緑色を呈し、胎土は細かく、色調は乳灰色である。

土　器　土師器には椀Ｃ（９）、皿Ａ、杯Ａ、甕、製塩土器、黒色土器Ａ類などが、須恵器には杯Ａ（10）、杯Ｂ蓋、壷Ｍ、甕などがあるが９・10を除いていずれも破片である。

木　器　斎串８点（１～８）がある。両縁の切り込み方によって３種類に分類できる。１・２は切り込みが上下に２対あるもので、一箇所に７条以上施している。３は横Ｖ字状の切り欠きを左右対称に７箇所施している。４～８は上端の両縁に２～３条の切り込みを施すもので、上端が三角形のもの（４～６）、平坦なもの（７・８）にわかれる。

銅　銭　神功開寶（11）が１点ある。開の字が「開」となるもので、神の字の一部に鋳溜がある。　（篠原豊一）

7. 平城京右京二条二坊十六坪の調査　第116次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市西大寺南町2244－3番地において実施した（株）明光開発届出のビル建設に伴なう事前発掘調査である。当該地は、平城京条坊復元では、右京二条二坊十六坪の西寄りに位置している。過去に、奈良国立文化財研究所により調査地北側及び東側で調査が行なわれ、小規模な掘立柱建物を中心とする奈良時代の遺構が検出されている。

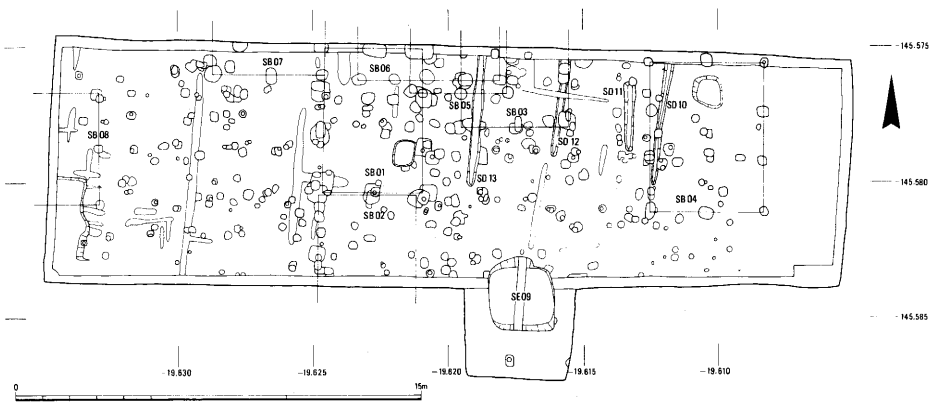
発掘区は、調査地南寄りに東西30m、南北9.2mで設定し、後に294㎡に拡張した。調査期間は昭和61年8月18日から9月10日にかけてである。

Ⅱ　検出遺構

調査地は、駐車場として利用されていたため、造成土が約1mにおよび、以下旧耕土、床土、明茶褐色砂質土と続き、地表下1.3mで灰黄色粘土を主体とした地山に至る。発掘区西側では、やや地山が下降し、暗茶褐色砂質土の下に暗灰色砂、黄褐色粘土が堆積する。遺構は全て地山の上面で検出したが、全体に大きく後世の削平を受けており、柱穴、溝は底部を残すのみで残りは良くない。検出した遺構には、建物8棟、井戸1基、溝数条と柱穴多数がある。

SB01　発掘区中央やや西寄り北側で検出した桁行3間、梁行2間の掘立柱南北棟建物である。柱間寸法は、桁行6尺（1.8m）等間、梁行6尺（1.8m）等間である。建物主軸は国土方眼方位に一致する。

SB02　発掘区中央SB01の南妻柱に、北妻柱を重複して検出した。桁行1間以上、梁行2間の掘立柱南北棟建物である。柱間寸法は、桁行8尺（2.4m）、梁行6尺（1.8m）で



遺　構　平　面　図　1／280

である。建物主軸は国土方眼方位と一致する。東側柱の一部は既に削平され、残存していないものもある。重複関係から建物ＳＢ01より新しいことがわかる。

ＳＢ03　ＳＢ01東側で検出した桁行１間以上、梁行２間の掘立柱南北棟建物である。発掘区北側へ伸びる。柱間寸法は、桁行６尺（1.8m）、梁行７尺（2.1m）等間である。

ＳＢ04　発掘区東寄りで検出した桁行３間、梁行２間の掘立柱南北棟建物である。南に１間の間仕切りをもつ。柱間寸法は桁行６尺（1.8m）等間、梁行７尺（2.1m）等間である。建物主軸は、国土方眼方位に一致する。

ＳＢ05　ＳＢ01・ＳＢ03に重複する位置で検出した桁行１間以上、梁行２間の掘立柱南北棟建物である。発掘区北側へ伸びる。柱間寸法は桁行６尺（1.8m）、梁行６尺（1.8m）等間である。重複関係からＳＢ01・ＳＢ03よりも新しいことがわかる。

ＳＢ06　ＳＢ05の北側で検出した東西４間の柱列。発掘区北側へ伸び、西面に廂をもつ東西棟建物となろう。柱間寸法は、東から1.2m、1.5m、1.2mと不揃いで、廂の出は1.5mである。重複関係からＳＢ03より新しいことがわかる。

ＳＢ07　ＳＢ01の西側で検出した東西２間の掘立柱列、発掘区北側へ伸びる南北棟建物となろう。柱間寸法は７尺（2.1m）等間である。

ＳＢ08　発掘区西側で検出した南北２間の掘立柱列。発掘区西側へ伸びる東西棟建物となろう。柱間寸法は、７尺（2.1m）等間である。

ＳＥ09　発掘区中央やや東寄りで検出した一辺2.4mの平面隅丸方形の井戸。当初北側の一部を検出し、井戸の可能性が考えられたため南側に拡張区を設定し全形を確認した。埋土からは奈良時代後半から末葉にかけての土器類とともに軒丸瓦（6301Ｃ、6303Ｂ型式）、軒平瓦（6666Ａ型式）が出土した。井戸枠は既に抜き取られており残存していなかった。

ＳＤ10　ＳＢ04に重複して検出した幅約30cmの南北方向の素掘り溝。国土方眼方位に対して北で東にふれる。埋土は暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から奈良時代の土器片が少量出土した。重複関係から、ＳＢ04より新しいことがわかる。

ＳＤ11　ＳＤ10の西側で検出した幅35cm程度の南北方向の素掘り溝である。埋土には暗茶褐色土が堆積する。国土方眼方位に一致する。

ＳＤ12　ＳＤ10の西側3.8m隔てて検出した幅約30cmの南北方向の素掘り溝。ＳＤ10に平行する。埋土には暗茶褐色土が堆積していた。重複関係からみてＳＢ03より新しい。

ＳＤ13　ＳＤ12の西側３mを隔てて検出した幅約30cmの南北方向の素掘り溝。ＳＤ10、ＳＤ12に平行する。埋土はＳＤ10に同じ。重複関係からみてＳＢ03より新しい。

以上の遺構は重複関係からみて少くとも４期以上の変遷を考えることができた。これは、東隣地の調査知見とも一致するものであり、当坪内での宅地変遷を考える資料となろう。今後の調査資料蓄積を期待したい。　（立石堅志）

8. 平城京左京三条三坊六坪の調査　第120次

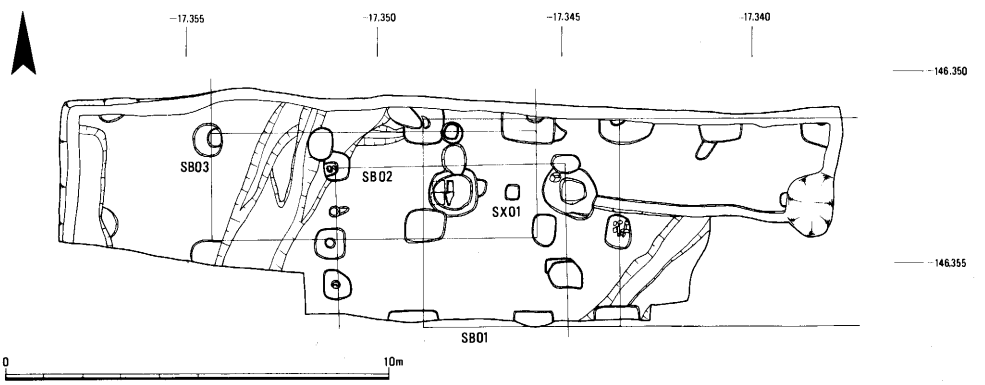
本調査は、奈良市大宮町四丁目301－1番地において実施した、村本建設届出の共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京左京三条三坊六坪に相当するが、その西側約70mには佐保川が南流しており、遺構の削平が懸念された。調査は昭和61年11月4日から11月21日にかけて実施した。

発掘区の土層は、造成土の下に旧耕土、床土、自然流路による砂と粘土の互層、灰色砂質土、赤褐色砂質土（包含層上層）、暗青灰色砂質土（包含層下層）と堆積しており、その下が遺構面となる。現地表から遺構面までの深さは約2.4mをはかる。遺構面は、南北に流れる3本の自然流路により一部が侵蝕を受けていたが、良好に遺存していた。

検出した遺構は掘立柱建物3棟以上である。発掘面積が狭く、建物の全体の規模がわかるものはない。SB01は、桁行4間（10.5m）以上、梁行2間（5.4m）の東西棟で東側は発掘区外へのびる。柱間は桁行で西から3.0m、2.1m、2.7m、2.7m、梁行が2.7m等間である。西から2間目のところに間仕切りの柱穴がある。SB02は、桁行1間（3.0m）以上、梁行2間（6.0m）の南北棟で、南側は発掘区外へのびる。梁行柱間は3.0mの等間である。SB03は、桁行3間（8.4m）、梁行1間（2.7m）以上の東西棟で、北側は発掘区外へのびる。桁行柱間は西から2.7m、2.7m、3.0mで、3間目が広くなっている。重複関係からSB01よりも古く、SB02よりは新しいことがわかる。

SX01としたものは、発掘区中央で検出した東西2つの大形の柱穴である。両柱穴ともに柱抜取穴に瓦塼を投棄している。西側の柱穴底部には塼4枚が「田」字形に上面をほぼ水平にそろえて敷かれてあり、柱の礎板として再利用されていた。

遺物としては、そのほとんどが瓦塼で占められるが、土師器、須恵器も少量出土してい



遺　構　平　面　図　1／200

る。瓦塼の大半がＳＸ01の柱抜取穴から出土しており、ここではこれらについて報告する。

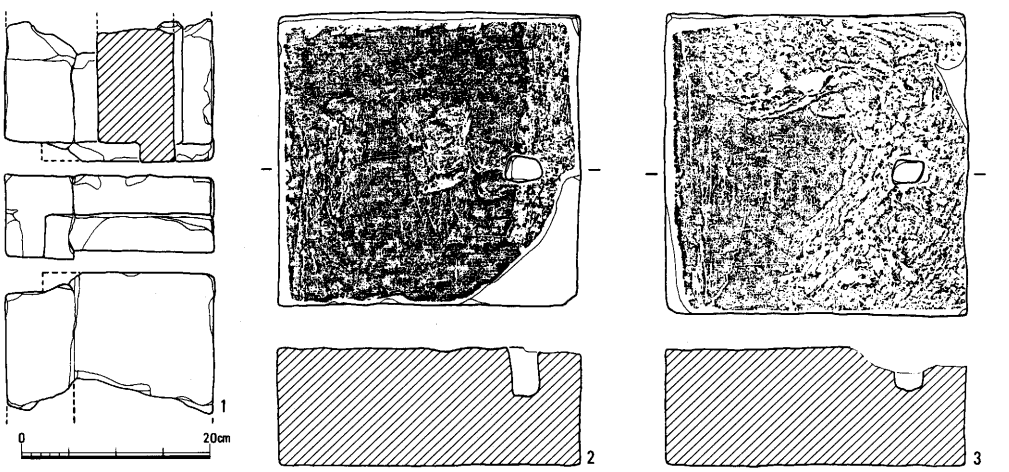
１は一辺が21.6cm、他辺が14.7cmまで残存する方形塼で、厚さ7.8cmをはかる。縁部２ケ所に凸部をもつ。おそらくは組合せの枘のような役目をになったものであろう。

２・３はＳＸ01の西側柱穴で礎板として再利用されていた同規格の方形塼である。２は30.5cm×31.5cm、厚さ12.2cmを、３は一辺31.3cm、厚さ12.2cmをはかる。２は一側面を焼成後にはつっているために正方形とはなっていない。ともに側縁近くに一孔が穿たれているが貫通はしない。２の孔は3.4cm×2.5cmで、深さは5.0cm。３のそれは3.0cm×2.3cmで深さは上部がはつられているため正確な数値はわからないが、現存で2.0cmをはかる。主として孔のかたよる一辺側を帯状に再利用に際してはつっており、そこが凸部であった可能性が考えられる。他にＳＸ01からは丸瓦、平瓦に混じって面戸瓦が17点出土している。すべて形態はいわゆる蟹面戸である。

さらに包含層下層から軒平瓦6572Ｃ型式が１点出土し、灰色砂質土からは鬼瓦片１点が出土している。鬼瓦片は、右眼球部分のもので眉の存在が認められる。周縁には珠文がめぐる。毛利光俊彦氏の分類による南都七大寺Ｖ式の範疇に属するものである。裏面は剥離しており、厚さや固定装置については不明である。

最後に、既存の成果を利用して今回検出した建物の位置を条坊地割との関係で検討してみる。そうすると、ＳＢ01の西側柱列が坪内を東西に４分割した際の西側の分割線と一致することがわかる。また、近接地で行なわれた調査では当坪を東西に２分割、南北にほぼ４分割する位置に溝が検出されている。[註)] これらのことから、おそらく坪内を東西に４分割する宅地割は存在しなかったものと推察できよう。　（鐘方正樹）

註）　橿原考古学研究所・中井一夫氏の御教示による。



出　土　塼　1／8

9. 平城京左京四条四坊七坪の調査　第121次

本調査は、学校法人家庭学園届出の校舎建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は国鉄奈良駅の西500mのところにあり、平城京の条坊復元では左京四条四坊七坪の南東部に推定される。調査は、校舎建設部分に、東西30m、南北８mの発掘区を設定して行なった。調査期間は建設工事との兼合いで制約を受けたために、平面実測はクレーンによる空中写真撮影を行ない図化した。調査は昭和61年11月11日から11月20日にかけて実施した。

土　層　土層堆積は地表から0.5～0.6mまでは黄色砂土の整地土で以下、黒色土の耕土、黒灰色砂質土、黄灰色土となり地表下0.9～1.0mで茶灰色粘土の地山となる。なお、発掘区の南東には自然流路の埋土と考えられる灰色砂層があり、その上面は奈良時代の遺物包含層暗黄褐色砂質土層によって整地される。遺構は地山上面とこの整地層上面で検出した。また、発掘区は旧校舎跡地にかかるため遺構はその旧基礎によって失われている部分があった。

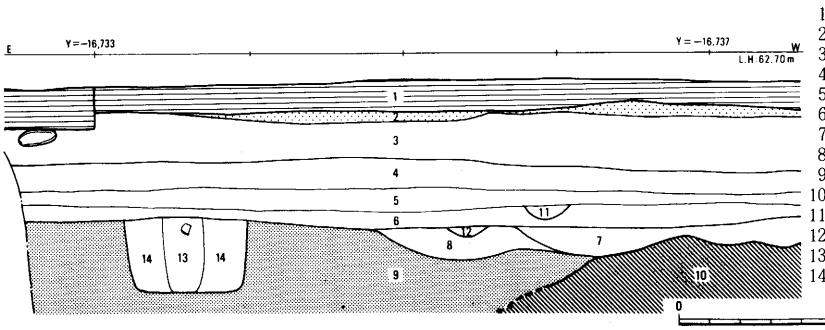
検出遺構　弥生時代の土坑３基、奈良時代の掘立柱建物７棟、柱列１条、土坑１基などがある。

ＳＫ01　発掘区北辺で検出した平面が楕円形の土坑である。大きさは長径1.2m、短径0.8m、深さ0.1mを測る。埋土下層からは弥生土器甕片、壷片が出土した。

ＳＫ02　ＳＫ01の南側で検出した平面が楕円形の浅い土坑である。大きさは長径0.9m、短径0.5m、深さ0.1mを測る。埋土からは弥生土器片が若干量出土した。

ＳＫ03　発掘区の東半で検出した平面が楕円形の土坑で、東側はＳＫ11によって破壊されている。大きさは長径1.0m以上、短径0.9m、深さ0.15mを測る。埋土から弥生土器甕・壷片と人頭大の自然石が出土した。

ＳＡ04　発掘区の中央東寄りで検出した南北２間以上の掘立柱列である。柱間寸法は2.7m（９尺）等間である。柱列の主軸は国土方眼方位と一致する。



1. コンクリート
2. パラス
3. 黄色砂土（整地土）
4. 黒色土（耕土）
5. 黒灰色砂質土
6. 黄褐色土
7. 暗黄褐色砂質土（整地層）
8. 茶灰色細砂（自然流路）
9. 灰色粗砂（自然流路）
10. 茶灰色粘土（地山）
11. 暗茶褐色土
12. 灰色砂土
13. 茶灰色砂土（ＳＢ09柱穴）
14. 茶褐色土（ＳＢ09柱穴）

南壁土層図　1／50

ＳＢ05　発掘区の北西隅で検出した東西１間以上、南北１間以上の建物の南東隅である。柱間寸法は東西2.1m（７尺）、南北2.4m（８尺）である。建物の主軸は国土方眼方位と一致する。

ＳＢ06　ＳＢ05の北側で検出した東西２間の柱列で、建物の南東隅と考えられるが、建物の棟方向、規模等は明らかでない。柱間寸法は2.55m（8.5尺）等間である。東柱穴の柱抜取り穴からは軒平瓦6671Ｃや須恵器甕片、平瓦などが出土した。建物の主軸は国土方眼方位と一致する。重複関係からＳＢ05より新しいことがわかる。

ＳＢ07　発掘区中央で検出した桁行３間、梁行２間の南北棟建物である。東西柱間中央に柱筋を揃えて小柱穴２がある。この柱穴は床束と考えられる。柱間寸法は桁行1.5m（５尺）等間、梁行1.8m（６尺）等間である。主軸は国土方眼方位と一致する。

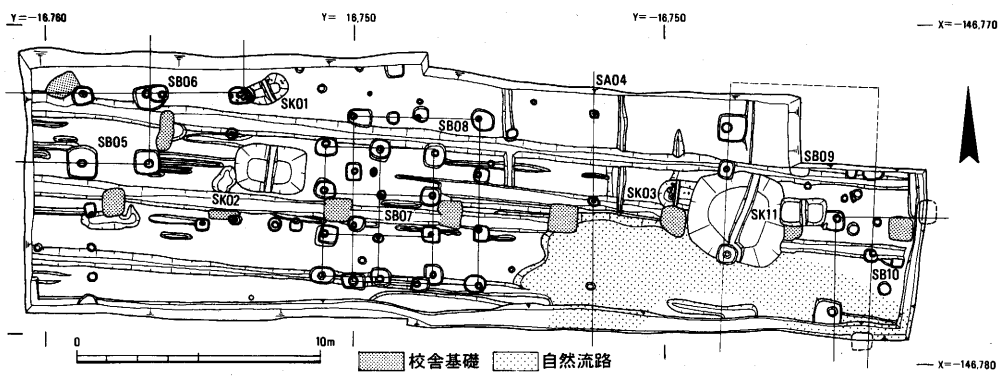
ＳＢ08　ＳＢ07と同位置で検出した桁行３間、梁行２間の南北棟建物である。柱間寸法は桁行1.8m（６尺）等間、梁行2.1m（７尺）等間である。主軸は国土方眼方位と一致する。重複関係からＳＢ07より新しいことがわかる。

ＳＢ09　ＳＡ04の東辺で検出した、桁行３間以上、梁行は推定２間の南北棟建物と考えられる。柱間寸法は桁行3.0m（10尺）等間で、梁行は柱間２間で復元すると2.4m（８尺）となる。建物の主軸は国土方眼方位北で東へやや振れる。

ＳＢ10　発掘区の南東隅で検出した東西１間以上、南北１関以上の建物の北西隅である。柱間寸法は東西、南北共に3.0m（10尺）である。建物の主軸は国土方眼方位と一致する。

ＳＫ11　ＳＫ03の東側で検出した平面がほぼ円形の土坑である。大きさは径約3.2m、深さ1.0mを測る。埋土は上層から黄灰褐色土、褐灰色粘質土、灰色粘土となり、褐灰色粘土からは奈良時代中頃の土器が出土した。重複関係からＳＢ09より古いことがわかる。

上述した遺構の他に、中近世の土坑２基、東西溝３条がある。土坑はいずれも平面が隅丸長方形を呈する。溝は2.4mの間隔で並行する３条の素掘り溝である。



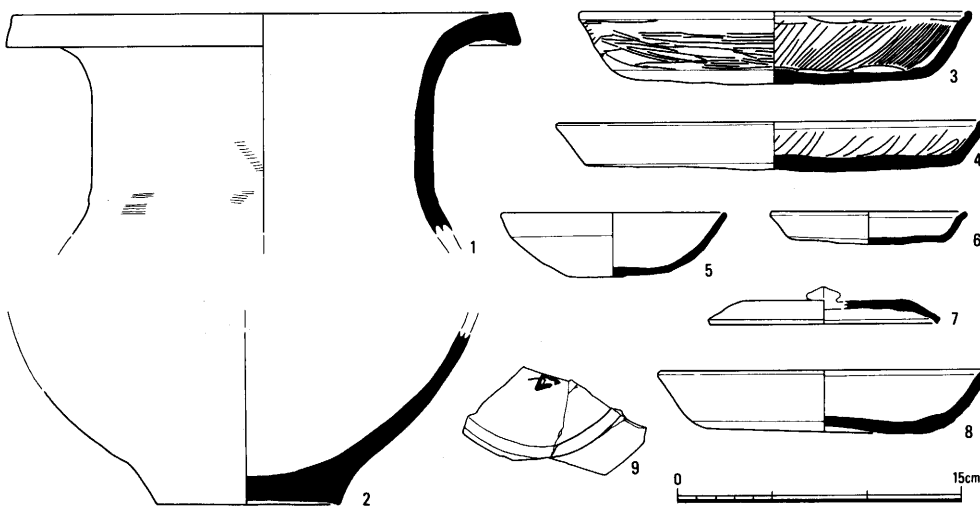
遺　構　平　面　図　1／250

出土遺物　今回の調査で出土したものには、弥生土器、サヌカイト剝片、軒平瓦、平瓦、丸瓦、土師器、須恵器、墨書土器などがある。

弥生土器　ＳＫ01・02・03から出土しており、いずれも破片である。１は広口壷の口縁部から頸部にかけてが残るもので、頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は平坦面となり上下に肥厚している。土器の表面は磨滅が著しいため調整は不明であるが、頸部外面の一部には櫛描直線文と考えられる痕跡が残る。色調は灰白色を呈し、胎土中に白色砂粒を含んでいる。２は壷の底部で、色調、胎土は１と同じである。１・２はＳＫ03から出土しており、同一個体の可能性がある。ＳＫ03からは底部中央を穿孔した甕片も出土している。

ＳＫ11出土土器　土師器には杯Ａ（３）、皿Ａ（４）、皿Ｃ（６）、高杯、甕Ｃなどがあり、須恵器には杯Ａ（７）、杯Ｂ、杯Ｂ蓋（８）、甕などがある。３は底部外面をへら削りし、口縁部外面をへら磨きする b_1 手法で、底部内面には螺旋状暗文、口縁部内面には斜放射状と連弧状の暗文を施す。４は口縁部外面にはよこなで、底部外面には無調整の a_0 手法で、底部内面には螺旋状暗文、口縁部内面には斜放射状暗文を施す。６は小型の皿で口縁部は強くよこなでされ、口縁端部は外反する。口縁部及び底部内面はよこなで、底部外面は無調整の a_0 手法である。

その他の遺物　軒平瓦、土師器椀Ｃ（５）、墨書土器（９）がある。軒平瓦は興福寺式（6671Ｃ）のものでＳＢ06の柱穴から出土した。５はＳＢ08の柱穴から出土したもので底部外面をへら削り、口縁部外面と内面をよこなでする b_0 手法である。９は須恵器杯Ｂの底部外面に墨書が一字残るものだが、判読できない。ＳＢ03の柱穴から出土。（篠原豊一）



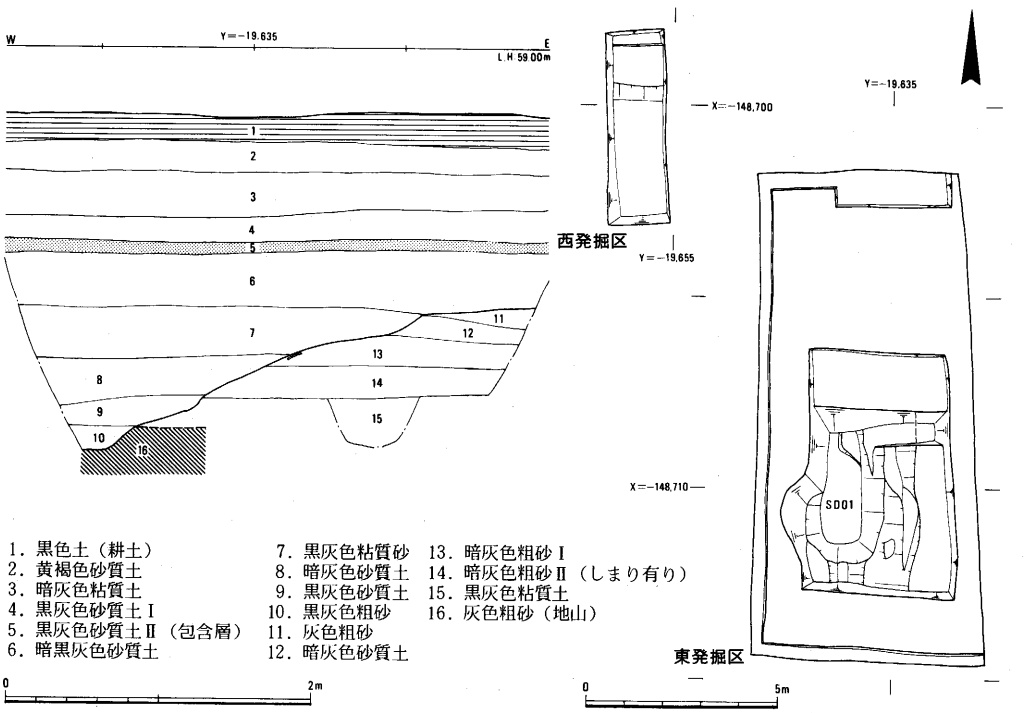
ＳＫ03・11出土土器　1／4

10．平城京西二坊大路の調査　第109次

この調査は、吉田恒夫氏届出の共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では右京八条三坊一坪に隣接する西二坊大路に推定される。調査は両側溝の検出を目的として、東西発掘区を設定して行なった。

西発掘区　西側溝推定地に東西1.4m、南北5.0mの発掘区を設定して調査を行なったが、西側溝は確認することができなかった。土層は上層から耕土、床土、暗灰色粘質土、黒灰色砂質土となり、地表下1 0mで青灰色粘土の地山となる。黒灰色砂質土は18～19世紀の遺物包含層で瓦器の大甕片、摺鉢片などが敷きつめられたように堆積していた。

東発掘区　東側溝推定地に東西６m、南北13mの発掘区を設定した。土層は地表から1.0mまでは西発掘区と同様であったが、その下層は暗灰色砂質土層であった。この層は東側溝の埋土と考えられたため、南半をさらに掘り下げたところ、この層は南北に流れる自然流路ＳＤ01であることが判明した。流路幅は不明であるが、深さは0.8mを測る。流路は重複して２条あり、埋土は共に、上層が黒灰色の砂層、下層が黒色の粘質土層となる。埋土からは12世紀後半の瓦器椀片、土師器皿片などが出土した。　（篠原豊一）



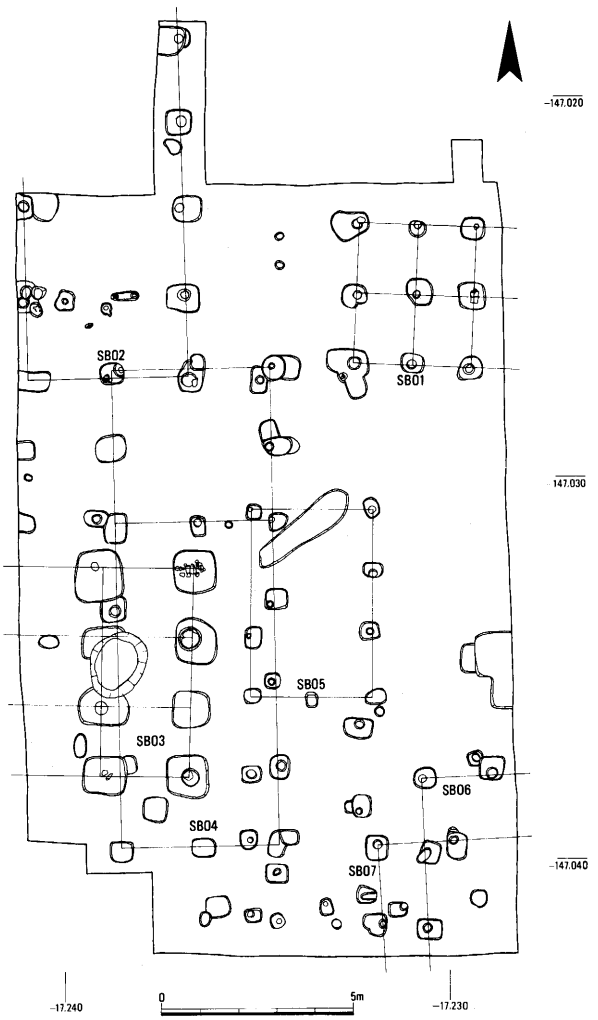
1．黒色土（耕土）
2．黄褐色砂質土
3．暗灰色粘質土
4．黒灰色砂質土Ⅰ
5．黒灰色砂質土Ⅱ（包含層）
6．暗黒灰色砂質土
7．黒灰色粘質砂
8．暗灰色砂質土
9．黒灰色砂質土
10．黒灰色粗砂
11．灰色粗砂
12．暗灰色砂質土
13．暗灰色粗砂Ⅰ
14．暗灰色粗砂Ⅱ（しまり有り）
15．黒灰色粘質土
16．灰色粗砂（地山）

遺構平面図　1／200・北壁土層図　1／50

11. 平城京左京四条三坊十二坪の調査　第110次

本調査は、奈良市三条町407・629－3において実施した共同住宅建設に伴う事前発掘調査である。発掘区内の層序は、旧耕土、黄灰色粘土、茶褐色砂質土であり、茶褐色砂質土上面で遺構を検出した。検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物7棟と土坑数基で、出土遺物は、遺構面が後世の削平を受けているためもあり、その量は少ない。

ＳＢ01　東西2間（3m）以上、南北2間（3.6m）の総柱建物。発掘区東側へ続く可能性がある。東列中央柱穴に礎板が残存。西列北柱穴掘形底から軒平瓦（平城宮6666Ａ型式2点・6666Ｎ型式1点）、西列南柱穴から軒平瓦（6666Ａ型式3点・6685Ａ型式1点）東列南柱穴から軒丸瓦（6314Ｃｂ型式1点）、軒平瓦（6685Ａ型式1点）がそれぞれ出土した。礎板として使用したものと考えられる。



遺構平面図　1／200

ＳＢ02　桁行4間（9m）以上、梁行2間（4.2m）の南北棟。柱間は、桁行2.25m、梁行 2.10mの等間。3柱穴に柱根が残存した。

ＳＢ03　東西1間（2.4m）以上、南北3間（5.4m）の総柱建物。発掘区西側へ続く。南北の柱間は、1.8m等間。3柱穴に柱根が残存した。ＳＢ04よりも新しい。

ＳＢ04　桁行6間（12.6m）、梁行2間（4.2m）の南北棟。柱間は、いずれも 2.1mの等間。北から2間めの柱筋に間仕切の柱穴。

ＳＢ05　桁行3間（4.95m）、梁行2間（3.35m）の南北棟。柱間は、いずれも1.65m等間である。

その他、ＳＢ06・07の建物があるが、部分的な検出で、規模等は明らかでない。　（森下恵介）

12. 平城京左京六条二坊十坪の調査　第111次

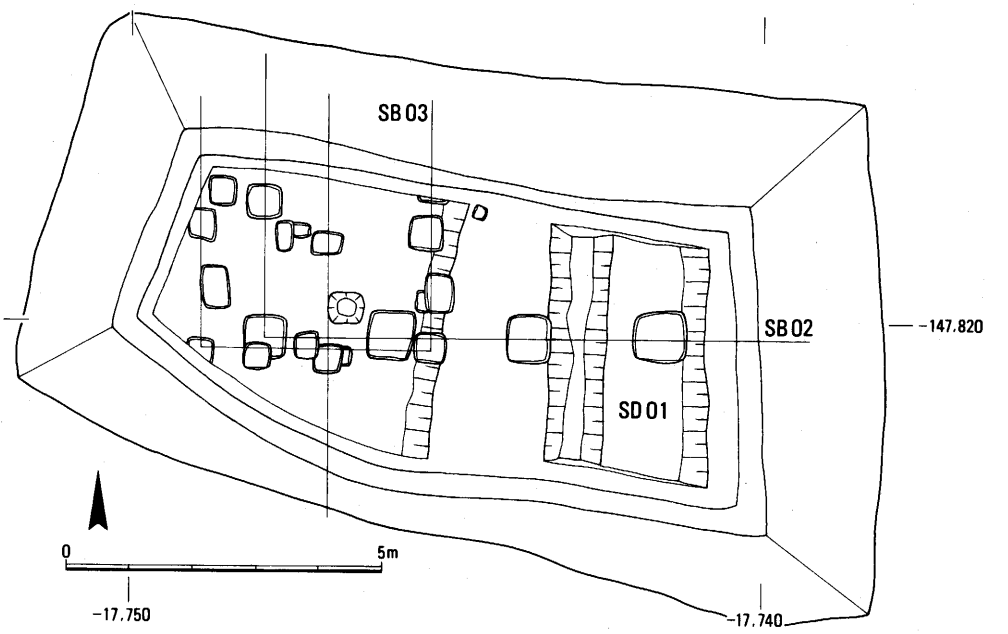
Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市大安寺西２丁目281番地において、奈良市埋蔵文化財調査センターの収蔵庫建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では左京六条二坊十坪の西半部中央にあたるが、既造成地で遺構面まで3.6mもの深さがあるのに加え、既存建物が間近に隣接した状態にあった。このため実質的な発掘範囲は約46㎡にとどまった。調査期間は昭和61年５月13日から同年５月28日までの16日間である。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の土層は、1.5～2.2mの造成客土の下、灰色系の粘土の堆積４層があり、地表下3.6mで茶褐色粘土の地山となる。この地山上面で、素掘り溝１条、掘立柱建物２棟を検出した。ＳＤ01は南北方向の素掘り溝。幅2.4～2.6mで、溝底は東岸から西1.5～1.7mの間は0.2mほどの深まりで、その西で段がつき、西側が0.4～0.6mと深い。溝内には灰褐色粘土が堆積し、奈良時代中頃の土器、瓦が出土した。ＳＢ02は桁行３間（6.3m）以上、梁行１間（2.1m）以上の東西棟建物。桁行柱間は2.1m等間である。重複関係からＳＤ01よりは新しいことがわかる。ＳＢ03は桁行１間（1.8m）以上、梁行２間（3.6m）の南北棟建物。梁行柱間は1.8m等間である。

（中井　公）

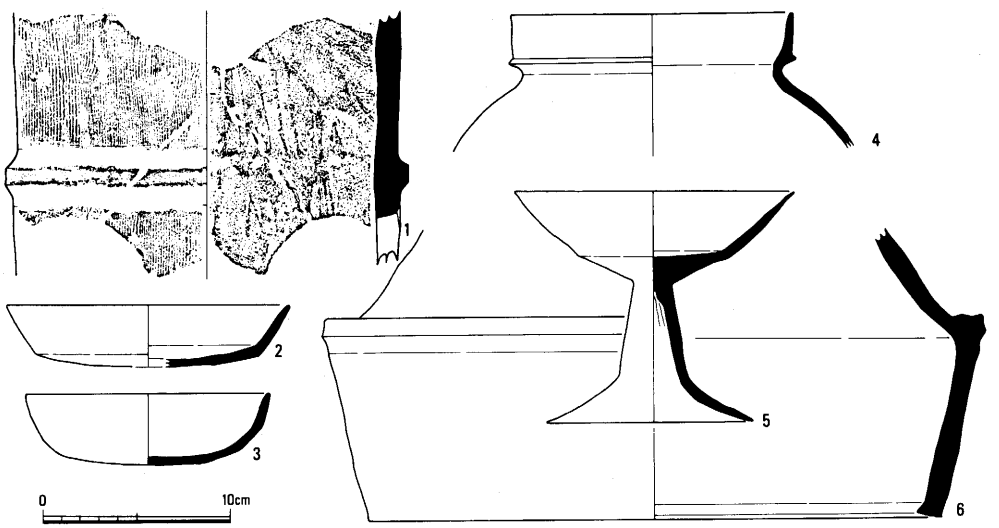


遺　構　平　面　図

13. 平城京一条条間路の調査　第114次

奈良市西大寺栄町2341番地で行なった中畑忠夫氏届出のビル建設に伴う調査である。当該地は京の条坊復原では右京一条条間路と右京一条二坊十一坪北縁部に相当するかと思われた。調査は東西５m、南北15mの北発掘区と東西1.5m、南北2.5mの南発掘区を設定した。調査期間は昭和61年６月５日～同月13日である。

北発掘区では、地表下約90cmの黄色粘土あるいは茶褐色砂層上面で柱穴、土坑、杭列、素掘り溝を検出した。柱穴は小さなものが多く、検出数から幾度かの建替えがあったことはわかるが建物としてはまとまらない。柱穴、土坑ともに奈良時代末から平安時代の遺物が出土しており、この時期の遺構と思われる。杭列、素掘り溝はその後の水田耕作にともなうものである。遺物のうち土坑出土のものを図示した。１は円筒埴輪、２・３は土師器杯、椀である。南発掘区は層序が北発掘区と異なり、全体に粘土と砂が互層に堆積していた。全体が自然流路の一部にあたっている可能性が高い。出土遺物には土師器、須恵器、埴輪、砥石がある。時期は古墳時代から奈良時代におよぶが、主体は布留式段階のものである。このうち土師器二重口縁壷（４）、同高杯（５）、埴輪（６）を図示した。北発掘区の遺構には奈良時代末以前に遡るものがないことから、条間路路面に相当しているものと考えられるが、側溝を検出していないので道路幅員などは不明である。さらに奈良時代末以降は路面に小建物が建てられることになる。また、古墳時代の遺物、特に埴輪の存在は調査地付近に古墳などの遺跡の存在を想定させる。　（森下浩行）

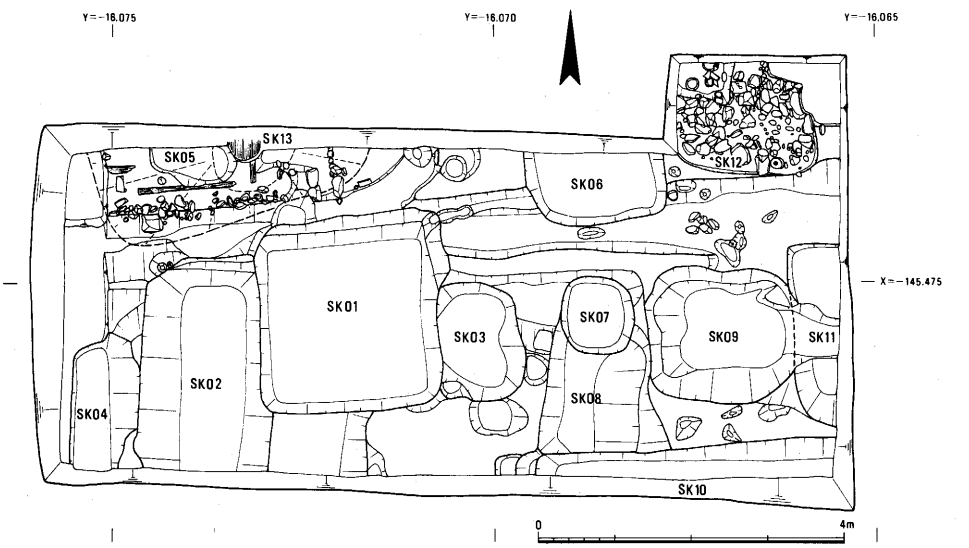


出　土　遺　物　1／4

14．　平城京左京(外京)三条五坊十三坪の調査　第117次

本調査は、奈良市が計画した西之阪共同浴場建設に伴なう事前の発掘調査である。調査地は、国鉄奈良駅の北東約250mの位置にあたり、平城京の条坊復元では左京三条五坊十三坪の西辺に推定される。調査は建物予定地に東西11m、南北５mの発掘区を設定して行なった。土層堆積状態は地表から灰色砂の整地土、黒色土、淡黒灰色土、暗茶褐色土、明黄灰色土となり、地表下0.8～0.9mで淡緑色粘土の地山となる。遺構は淡黒灰色土上面（第２面）と地山上面（第１面）で検出した。

検出した遺構には、土坑14基があるが、いずれの土坑も18世紀以降のものである。土坑は発掘区内全面に分布している。ＳＫ01は発掘区中央で検出した方形の土坑。一辺2.4m、深さ1.4mを測る。土坑の底は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上る。埋土上層からは18世紀以降の陶磁器片や獣骨などが出土した。ＳＫ05は発掘区の北西隅で検出した平面が不整形な土坑で、東西3.6m、南北1.2m以上、深さ0.6mを測る。埋土上層から桶底板、砥石などともに自然石が出土した。同時期の遺構にＳＫ02・04・08・09・10がある。これらの遺構は第１面で検出した。ＳＫ07は円形の土坑で径1.0m、深さ0.7mを測る。埋土からは19世紀以降の陶磁器片が出土した。ＳＫ12は発掘区の北東隅で検出した浅い円形土坑で、埋土から多量の自然石と五輪塔の空風輪１点が埋められていた。ＳＫ13は発掘区北辺で検出した土坑で、その中央に径40cmの桶を据える。桶は底板と側板の一部が残る。同時期の遺構にＳＫ03・06・09・11がある。これらの遺構は第２面で検出した。　（篠原豊一）



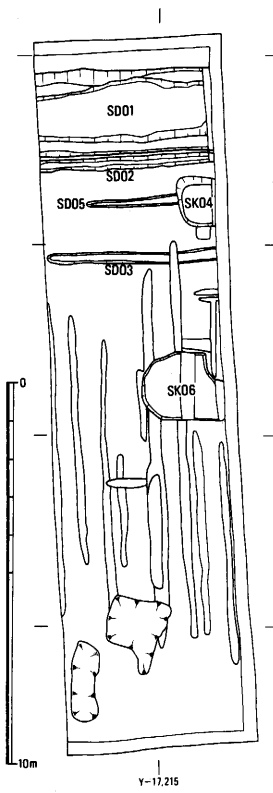
遺　構　平　面　図　1／100

15.　平城京左京九条三坊十一・十二坪の調査　第122次

本調査は、奈良市東九条町において計画された、奈良市都市計画街路西九条佐保線の拡幅整備に伴なう事前発掘調査である。当該地は、平城京条坊復元では左京九条三坊十二坪の北辺に位置し、十一坪と十二坪を画する坪境小路の存在が想定された。このため、調査地北辺に東西５m、南北18m（面積90㎡）の発掘区を設定し、調査を行なった。調査期間は、昭和61年11月25日から12月９日にかけてである。

発掘区内の基本的堆積層序は、耕土、床土の下、灰色粘質砂、淡灰茶色粘質砂、灰茶褐色粘質砂の薄い堆積があり、地表下約40cmで地山の茶褐色砂に至る。発掘区南部では、灰茶褐色粘質砂の下に茶色粘質砂の遺物包含層があり、この上面から切り込む柱穴がみられる。検出した遺構には、溝、柱穴、土坑がある。

ＳＤ01　発掘区北部で検出した東西方向の素掘り溝である。幅2.6m、検出面からの深さ40～50cmを測る。南北両肩とも一段のテラス状の平坦部をもち、溝中央へなだらかに落ちる。坪境小路南側溝に相当するものであろう。溝内埋土から奈良時代後半の土器類が出土。



遺構平面図　1／200

ＳＤ02　ＳＤ01の南肩に接してこれに平行する東西方向の素掘り溝。幅30cm、検出面からの深さ10cm程度を測る。出土遺物はなく、時期は不明。

ＳＤ03　ＳＤ01の南側でこれに平行する東西方向の素掘り溝。幅約30cm、検出面からの深さ約５cmを測る。ＳＤ01との心々間距離は、3.8mである。溝の北側約30cm離れ、ＳＫ04に重複する柱穴１個を検出。重複関係からＳＫ04より古いことがわかる。築地添え柱痕跡であろうか。

ＳＫ04　ＳＤ02の南側で検出した一辺約90cmの方形土坑。出土遺物はなく、時期不明。

ＳＤ05　ＳＫ04に一部重複する溝。幅約20cmを測る。

ＳＫ06　発掘区中央東寄りで検出した一辺約２mの方形を呈する土坑。検出面からの深さ約40～50cmを測る。

以上、各遺構について概略を記した。最後にＳＤ01の溝心座標値を記し今後の調査参考資料とする。（立石堅志）

	Ｘ　値	Ｙ　値	
ＳＤ01心	－149,606.500	－17,216.000	

16. 平城京左京四条一坊十五坪の調査　第108次

本調査は、奈良市四条大路二丁目869－4において行なった住宅建設に伴う事前調査である。調査地は、平城京左京四条一坊十五坪の東辺に位置し、東一坊大路の確認を目的として調査を実施した。調査地の大部分は、旧建物の基礎および、解体時の掘削によって撹乱されていたが、奈良時代の南北溝1条（幅約2m、深さ約30cm）を検出することができた。この溝は、位置関係から、今回の調査地の北隣接地で、昭和60年に奈良県教育委員会が検出した溝につづくものと考えられるが、東一坊坊間路の西側溝とするには、西に位置しすぎている。溝心の座標値は、X＝－146799.791、Y＝－18069.466である。　（森下恵介）

17. 平城京西三坊坊間路の調査　第112次

奈良市青野町42－1において行なった共同住宅建設に伴う事前調査である。調査地は、平城京右京二条三坊の七坪・十坪間の坪境に位置する。調査の結果は、条坊関係の遺構は検出できず、南北方向の谷状の旧地形を確認したにとどめる。谷状になった地形の底に堆積する灰色砂層には、奈良時代後半の土器が含まれており、従来の右京域での調査例とともに、平城京右京においては、条坊の施行にあたり、自然地形の制約を大きくうけたものと考えられる。　（森下恵介）

18. 平城京左京七条一坊九坪の調査　第123次

奈良市柏木町383番地他において行った住宅建設に伴う事前調査である。発掘区の層序は、造成土（約2m）の下、旧耕土、淡黄灰色粘土、茶褐色粘質土となっており、茶褐色粘質土層上面で、奈良時代の掘立柱穴1を検出した。柱穴埋土から軒丸瓦（平城宮6225A型式）1点と塼2点が出土した。　（森下恵介）

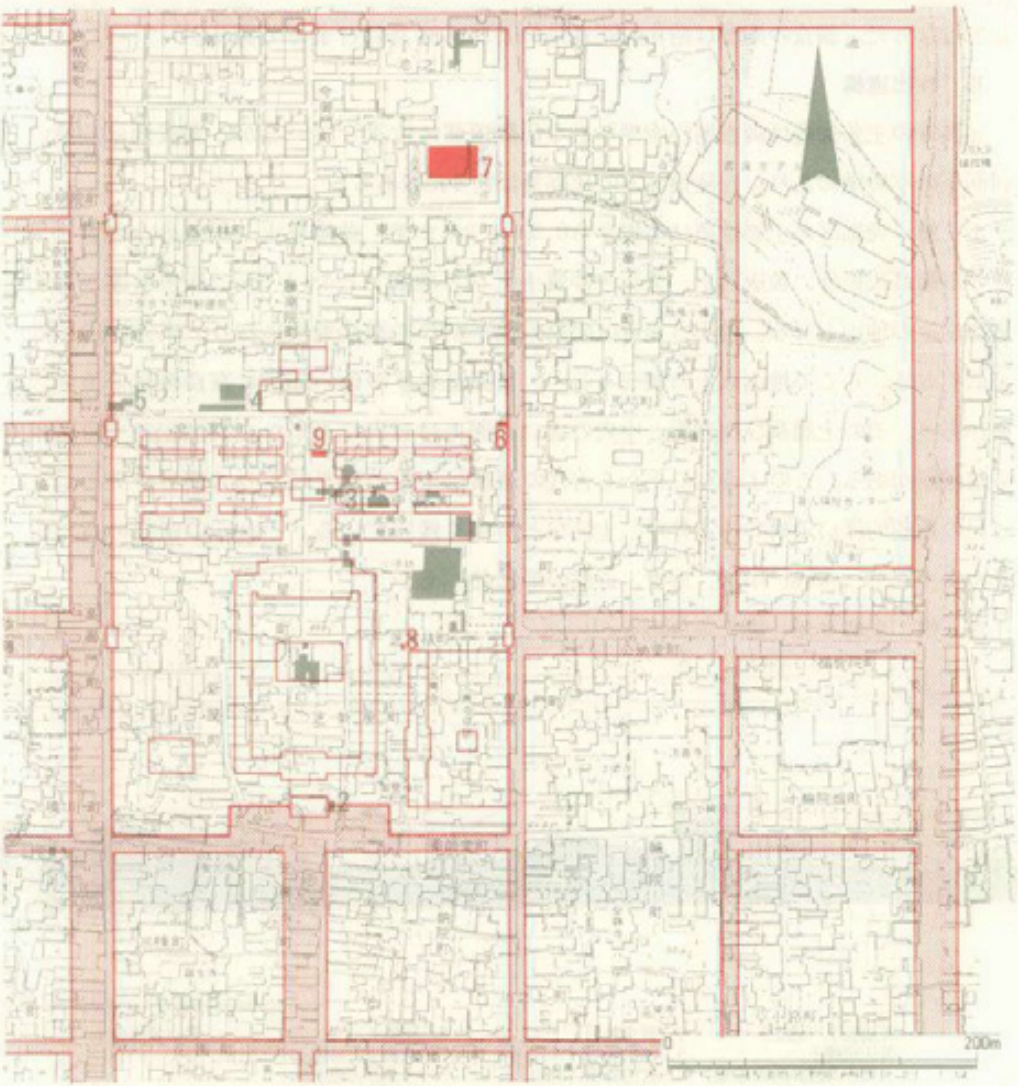
19. 平城京朱雀大路の調査　第124次

奈良市柏木町190－1において住宅建設に伴う事前調査として行った。調査地は、朱雀大路の六条の地点で、水田の耕土下すぐに地山の黄白色粘土となる。この上面で、下つ道東側溝と考えられる南北溝（幅約4m、深さ30cm）1条を検出した。削平が著しいが、溝心の座標値は、X＝－147915.000、Y＝－18564.013である。　（森下恵介）

II. 寺院の調査

1. 元興寺旧境内（第６～９次）の調査

昭和61年度の元興寺旧境内の発掘調査は、個人住宅、あるいは公共施設の建設に伴って、４件実施した。調査地点は下の位置図に示した。第６次調査地は東面築地に、第７次調査地は旧境内北辺に、第８次調査地は東廻廊に、第９次調査地は鐘楼の北にそれぞれ推定されている。第８・９次調査は小面積の発掘のため、十分な成果は得られなかった。しかし、第６次調査では東面の築地の痕跡がみとめられ、第７次調査では数多くの遺構が検出され、この地域を解明する上で、貴重な資料を得た。



発掘区位置図（数字は次数番号を表わす）

第７次の調査

Ⅰ　はじめに

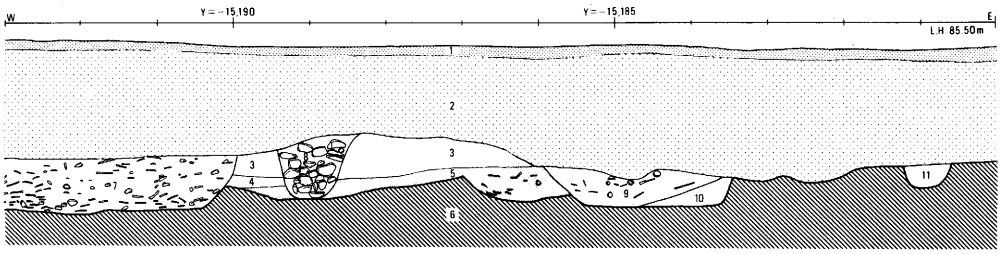
調査地は、奈良市東寺林町32番地他で、旧奈良市役所があった所である。この場所は、奈良時代には元興寺旧境内の北東隅に位置し、蔵院か修理所に推定される。15世紀後半には興福寺の塔頭である光林院となったことが文献でわかる。その後、江戸時代に柳生藩の南都屋敷がおかれ、明治時代にはいり奈良町役場となり、現在に至る。昭和51年に市役所が移転してからは、社会教育施設として使用されていた。今回の調査は、この建物が古くなったため取り壊し、その跡地に地域文化の核となる図書館、市民ホールなどを備えた複合施設を建設するための事前発掘調査である。調査は東西27m、南北20mの発掘区を設定して行なった。調査の期間は昭和61年６月９日から８月11日までである。

Ⅱ　検出遺構

元興寺の主要伽藍は調査地の南側にある丘陵頂部に位置しているが、調査地は丘陵の北斜面下の平坦地にあり、丘陵頂部との比高差は約４m程ある。

土　層　発掘区の土層堆積は地表から0.9～1.2mまで、黄褐色土、灰色砂土の客土で、その下層は灰色砂、黄灰色土、黄灰色砂質土となり地表下1.4～1.5mで灰色砂礫か、明黄褐色粘土の地山となる。地山は発掘区中央の北半がやや微高地状になり、東西南辺に向って低くなる。ここで地山直上の層をみると、発掘区東半の低い部分に奈良時代の遺物包含層があり、その上層及び南西部と中央の広い範囲には12世紀後半から13世紀前半にかけての整地層がある。このようなことから古代の遺構は中世の削平により大部分が失われ、中近世の比較的深い遺構である井戸、土坑などが良く残っている。これらの遺構のうち主なものについて、古代、中世、近世、近代の順に述べる。

古　代　土坑６基、溝１条がある。



1．黄褐色土（盛土）
2．黄灰色礫土（旧庁舎解体時の整地）
3．灰色土
4．暗黄色土
5．黒色炭層（ＳＫ04埋土）
6．灰色砂礫（地山）
7．褐灰色土
8．灰色土
9．淡黄灰色砂質土（ＳＤ16埋土）
10．暗黄褐色土（ＳＥ15埋土）
11．淡灰色土

南壁土層図　１／100

ＳＫ01～05　発掘区の北半中央にある地山徴高地西斜面で検出した土坑である。土坑はいずれも平面が不整形で、近接しあっているためその境は明確ではないがいずれも浅い窪地となっている。いずれの埋土も炭化物混りの黒色土で瓦塼と共に８世紀の土器が出土している。瓦塼類の中には溶着した平瓦片やスサ混りの粘土と瓦片を交互に積み重ねた窯体片なども出土しており、この付近に瓦生産の施設があったことが想定される。これらの土坑は瓦生産施設からでた排棄物を投棄したものであろう。

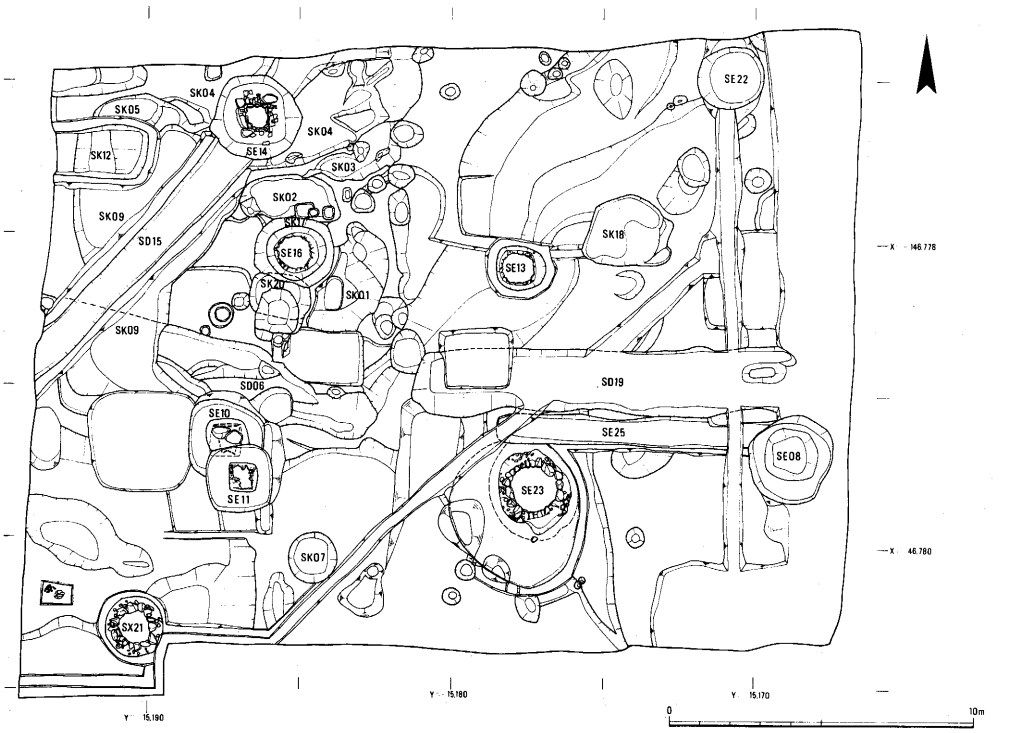
ＳＤ06　発掘区中央で検出した東で南へ斜行する東西方向の素掘り溝である。溝は幅2.2m、深さ0.6mを測る。溝の南岸は12世紀後半～13世紀前半にかけての整地や、後世の土坑によって大部分が削平されている。埋土からは、８世紀から10世紀の土器と共に軒瓦が多く出土した。

ＳＫ07　発掘区南辺中央西寄りで検出した円形の土坑で、径1.7m、深さ0.8mを測る。底は平坦で、壁面はほぼ垂直である。埋土から11世紀後半の土器が出土した。

中　世　溝１条、井戸６基、土坑10基がある。

ＳＥ08　発掘区南辺の中央で検出した井戸で、井戸枠は抜き取られ残存しない。掘形は径約2.8mの円形で、深さ3.4mを測る。埋土から木器と12世紀初頭の土器が出土した。

ＳＫ09　発掘区の北西で検出した瓦溜め土坑である。平面は楕円形で、東西4.8m、南北



遺構平面図　1／250

9.6m、深さ0.4mを測り、底は平坦面である。この土坑からは８世紀～12世紀前半の土器と共に、軒瓦、窯体片、溶着した瓦などが出土しており、重複しているＳＫ01～05、ＳＤ06の遺物が混入したものであろう。他に小土坑４基がある。いずれも12世紀後半の土器が出土した。また、発掘区の南西隅では、12世紀後半の土師器皿が18枚折重なって出土した。掘形の痕跡はなく、整地の際に埋められたものであろう。その性格は不明である。

ＳＥ10　ＳＫ07の西側で検出した縦板組横桟どめの井戸である。掘形は一辺2.4mの隅丸方形で深さは４mである。井戸枠は内法0.8mで縦板組井戸枠を上下２段に構築する。二段とも一辺に４～５枚の縦板をあて、その内側を枘組した横桟で支える。横桟は上段が一段、下段が三段遺存している。井戸底には径45cmの曲物を据え水溜とする。埋土からは12世紀後半から13世紀初頭の土器が出土した。

ＳＥ11　ＳＥ11の南側で検出した縦板組横桟どめの井戸である。掘形は一辺2.2mの隅丸方形で、深さ3.4mを測る。井戸枠は内法0.9mで、一辺に３～４枚の縦板をあてがい、その内側から枘組した横桟で支える。横桟は２段残る。井戸底には曲物を３段に据え水溜とする。埋土から13世紀中頃の土器が出土した。重複関係からＳＥ10より新しい。

ＳＫ12　発掘区北西隅で検出した隅丸長方形の土坑で、発掘区西へ延びる。長辺3.2m以上、短辺1.6m、深さ0.4～0.6mを測る。埋土から13世紀中頃の土器が出土した。

ＳＥ13　発掘区中央東寄りで検出した円筒形自然石積みの井戸である。掘形は径1.6mの円形で深さ1.85mを測る。井戸枠は内径1.0m、高さ1.4mが残り、20cm大の自然石を12～13段積み上げる。埋土は井戸枠埋土が黒灰色粘質土で、その上部には黒灰色砂土が堆積する。上部の埋土からは13世紀後半の土師器皿、瓦器椀などが多量に出土した。

ＳＥ14　発掘区北辺西寄りで検出した下段が円筒形自然石積み、上段が方形瓦積みの井戸である。掘形は径2.8mの円形で深さ4.0mを測る。井戸枠は井戸底から高さ2.4m分が残る。下段は内径0.7～0.8mで高さ1.7mを測る。20～30cm大の石を14～16段に積み上げる。上段は内法0.7m、高さ0.7mを測る。上面の四隅には平坦面を上面とした人頭大の自然石を据えるが南西隅の石を欠く。井戸底に井籠組の水溜を据える。側板は一辺60cm、幅30cm、厚さ３cmを測る。埋土から15世紀初頭の土器が出土した。

ＳＤ15　発掘区北西で検出した北で東へ斜行する浅い素掘り溝である。溝の幅は1.2m、深さ0.1mで長さ14m分を検出した。埋土から15世紀の土器が出土した。重複関係からＳＥ14より新しいことがわかる。

ＳＥ16　ＳＥ15の南側で検出した円筒形自然石積みの井戸である。掘形は径2.4mの円形で、深さ3.5mを測る。井戸枠は20～50cm大の石を15～18段積み上げたもので、高さ2.9m分が残存する。井戸枠内から15世紀後半の土器が出土した。

ＳＫ17　ＳＥ16と同位置で検出した平面が楕円形の土坑である。長径2.4m、短径2.0m、

深さ0.6mを測る。埋土から16世紀の土器が出土した。

これらの他に小土坑３基があるがいずれも13世紀初頭の土器が出土した。

近　世　検出した遺構は、井戸１基、溝１条、土坑４基、円形石組がある。

ＳＫ18　ＳＥ14の東側で検出した楕円形の土坑である。長径2.4m、短径2.0m、深さ0.５ｍを測る。埋土から18世紀の土器が出土した。

ＳＤ19　発掘区の東半中央で検出した東西溝である。幅2.0m、深さ0.5mで長さ12.2m分を検出した。溝の壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底は平坦面となる。埋土は上層が黄灰色砂で遺物を包含しない。下層は黒灰色粘質土で18世紀後半の土器が出土した。

ＳＫ20　ＳＥ17の南測で検出した楕円形の土坑である。長径2.0m、短径1.2m、深さ0.５ｍを測る。埋土から19世紀の土器が出土した。

ＳＸ21　発掘区の南西隅で検出した円筒形自然石積みの石組である。掘形は径2.0mの円形で深さ0.5mを測る。石組は内径1.0mで、人頭大の石を２段積み上げる。埋土から19世紀の土器が出土した。その性格は不明だが湧水層まで達しておらず井戸にはならない。

ＳＥ22　発掘区の北東隅で検出した円筒形自然石積みの井戸である。掘形は径2.0mの円形で深さ3.0mを測る。井戸枠の石積みはほとんど残存しておらず、井戸底に人頭大の石が１段残る。埋土から遺物は出土しなかったが、層序からみて近世の井戸であろう。

他に土坑３基があるがいずれも19世紀の土器が出土している。

近　代　溝１条と井戸１基がある。

ＳＥ23　ＳＤ19の南側で検出した円筒形自然石積みの井戸である。掘形は径4.3mの円形で深さは３m以上ある。井戸側は内径1.6mで、高さ2.8m以上を測るが、危険なため完掘できなかった。埋土から焼土とともに旧町役場のものとみられるレンガが出土した。

ＳＤ24　ＳＤ19とＳＥ23の間で検出した東西溝である。溝は幅1.0m、深さ0.1mで長さ9.4m分を検出した。溝の内面は５cmの厚さで灰色粘土を塗り固め、水もれを防いでいる。底は東から西へやや傾斜していることや、ＳＥ23の前面で途切れることなどから、ＳＥ23に貯水するための導水路とも考えられる。

遺構	軒丸瓦	軒　平　瓦	その他	遺構	軒　丸　瓦	軒　平　瓦	そ の 他
SD06	3	26・27・28		SE13		28	
SD15	3	27・28		SE16		7	
SE08	3	32		SK02		26	
SE11		7・28・29	熨斗瓦	SK07	3		
SE14	20・41	28・33～36 43～50・53・54	熨斗瓦	SK09	2・3・6 21・24・25	7・12・13・16 26・27・28・31	58・鬼瓦・面戸瓦・熨斗瓦

主要遺構軒瓦一覧表（瓦の番号は軒瓦の図版番号と一致する）

Ⅱ　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、瓦塼、土器、木器、金属製品、石製品、ガラス製品などで、遺物整理箱870箱ある。いずれも井戸や土坑から出土したものであるが、その出土量の８割以上を占めているのが、瓦塼である。ここでは古代と中世のものを中心に、瓦塼、土器、木器について記述する。

1．瓦　塼

丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、文字瓦、鬼瓦、熨斗瓦、面戸瓦、塼が整理箱で730箱出土している。このうち、丸瓦、平瓦がほとんどを占めるが未整理の状況で、ここでは軒丸瓦、軒平瓦を中心に記しておきたい。

軒丸瓦　総数127点出土している。このうち、奈良時代以前のものは79点である。１は素弁10弁蓮華文軒丸瓦で１点出土。飛鳥寺からの搬入品と見られる。２～６は複弁８弁蓮華文軒丸瓦である。２・３は平城宮6201Ａ型式と同笵で、合わせて72点出土している。２は周縁に線鋸歯文がめぐるのに対して、３では周縁をナデているために線鋸歯文が認められない。４は平城宮6282Fc型式と同笵で１点出土。５・６はいわゆる東大寺式に属するもので、５は３点、６は１点出土。いずれも新型式である。

平安時代に製作されたと見られる蓮華文軒丸瓦は36点出土している。これらは単弁のもの（21）と複弁のもの（19・20・22～25）とに区別でき、さらに複弁のものはそれが６弁のもの（19・25）と８弁のもの（20・22～24）とに区別し得る。21は単弁６弁で子葉のまわりを２重に輪郭線がめぐるもの。５点出土。単弁のものではこの他に21と同型式で笵が異なるもの１点、子葉のまわりを３重に輪郭線がめぐるもの１点が出土している。複弁６弁のものでは、19が７点、25が６点出土している。複弁８弁のものについては、間弁を有するもの（22～24）と有さないもの（20）とに区別することができる。間弁を有するものの中には、外区に珠文帯を有するもの（22・24）と有さないもの（23）とがある。22は彫りが深く凹凸が大きいのに対して、24は彫りが浅く平面的である。24の瓦当裏面には布目が残っている。23は間弁が周縁とくっついてしまっている。20・22・23はそれぞれ１点ずつ、24は２点、この他に複弁が確認できるもの２点が出土している。

巴文軒丸瓦は総数12点出土しているが、同笵のものはない。37～42はその一部である。内区と外区とを区切る圏線があるもの（38・40～42）とないもの（37・39）にまず区別され、さらにそれぞれにおいて巴の尾が他の巴と接するものと接しないもの、外区の珠文の疎密、外区と周縁とを区切る圏線の有無等によって区別することが可能である。

軒平瓦　総数154点出土している。このうち、奈良時代のものは30点あり、７～17の均正唐草文軒平瓦と18の重郭文軒平瓦がある。７はいわゆる大官大寺式で、平城宮6661型式に属する。出土した８点はすべて同笵品であるが、顎の形態によって段顎のもとの曲線顎

のものとに区別できる。曲線顎のものは笵の彫り直しで線が太くなっており、中には唐草の第3単位を削り落としているものも見られる。8は平城宮6671A型式と、9は平城宮6716C型式と同笵である。それぞれ1点出土している。10～17はいわゆる東大寺式のもので、10は平城宮6732F型式と、11は平城宮6732V型式と同笵である。13の中には溶着品が見られ、ごく近いところでこれが焼成されていたものと思われる。10・14・15・16・17はそれぞれ1点ずつ、11は2点、12は5点、13は7点出土している。18は1点出土。

平安時代以降のものは124点で、均正唐草文軒平瓦（26～31・33～36・48～54）、偏行唐草文軒平瓦（32・44～46）、連珠文軒平瓦（43）に区別できる。

均正唐草文軒平瓦には外区に珠文を有するもの（26～29・31・33～36）と有さないもの（30・48～54）とがある。珠文を有するものの中で、26～28・34～36はそれぞれ同一型式に属するが笵が異なる。前者の型式は総点数83点のうち、26が最も多く38点、27が16点、28が18点、不明が11点である。後者の型式は、34・35・36がそれぞれ1点ずつ出土。珠文を有するものでこれ以外の内訳は、29が2点、31が1点、33が2点である。珠文を有さないものの内訳は、30が1点、48が2点、49が1点、50が2点、51～54がそれぞれ1点ずつである。47については、きわめて変則的な文様で、均正唐草文が著しく退化したものかとも思われるが判然としない。2点出土している。

偏行唐草文軒平瓦においても、外区が珠文を有するもの（32）と有さないもの（44～46）とが認められ、出土点数の内訳は、32が1点、44が1点、45が1点、46が3点である。

連珠文軒平瓦は43のみで、2点出土している。

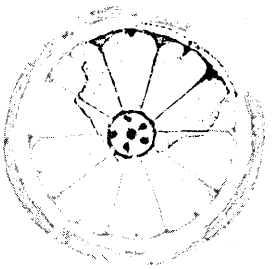
これらの軒平瓦のうち、43・46・48・50・53・54にはみな凸面側、顎のつけ根付近に朱の付着が認められる。

文字瓦　55は熨斗瓦で、幅16.2cm、厚さ4.6cmをはかる。凹面に2行にわたって「□□月□　／　□鳧□」とヘラガキされている。56・57は「興福寺」銘のタタキ目が凸面に残るもの。58は凹面に「東」の文字が左右逆に陽型となって残っているもの。おそらく成形台に陰刻されていた文字が写ったものであろう。この他、28の軒平瓦には凸面の狭端部隅近くに「物阝」とヘラガキされているもの1点がある。

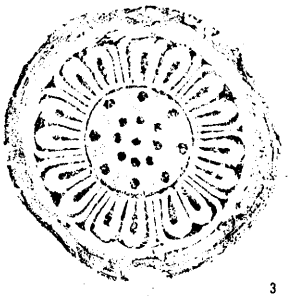
鬼瓦　平安時代のものが3片出土している。同一個体であるかは不明。したがって、全体的な構成もわからないが、周縁部分の破片には径3.5cm程の大きな珠文がめぐっている。厚さは3.5cmをはかる。

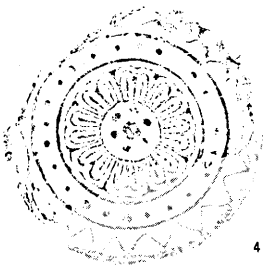
熨斗瓦　出土した27点はいわゆる半熨斗で、このうち全体のわかるものが3点ある。ほぼ同じ大きさで、その中のひとつの計測値を示すと、長辺の長さ37.0cm、短辺の長さ12.0cm、幅2.2cmである。

この他、面戸瓦3点、塼数点が出土しているが、全体のわかるものはない。

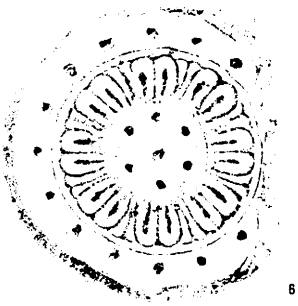

1

2

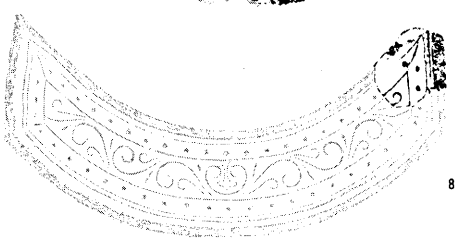

3


4

5


6

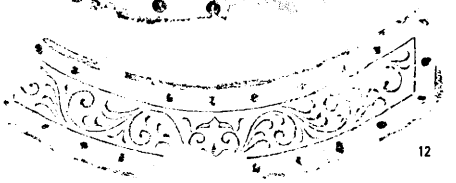
7


8

9

10

11

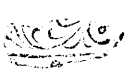

12

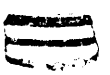
13

15

14

16


17


18

軒　　瓦　2／5

19

20

21

22

23

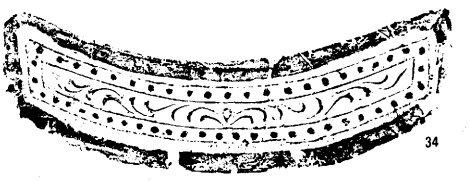
24

25

26

33

27


34

28

29

30

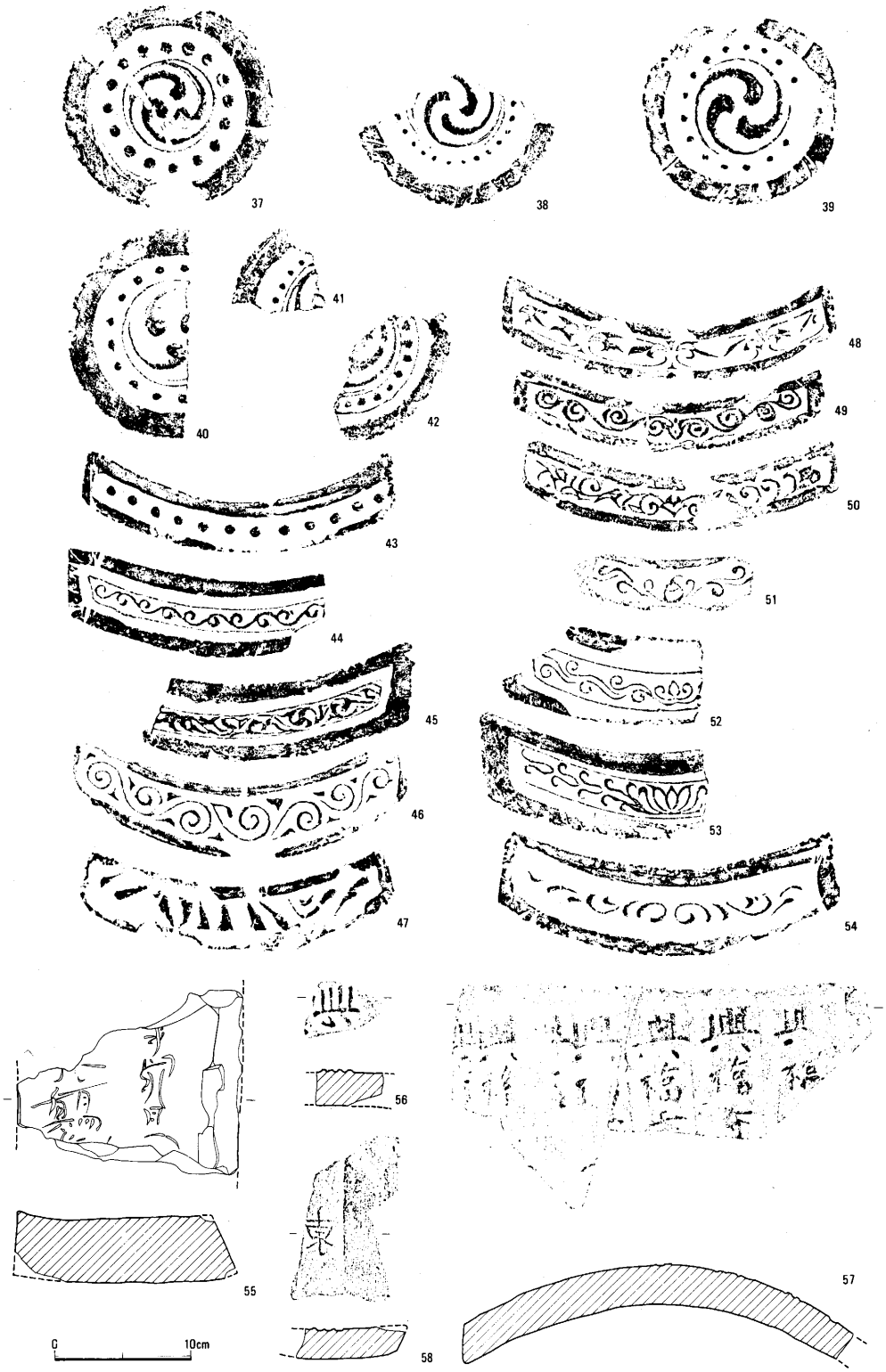
35

31

32

36

軒　瓦　2／5



軒瓦・文字瓦　2／5

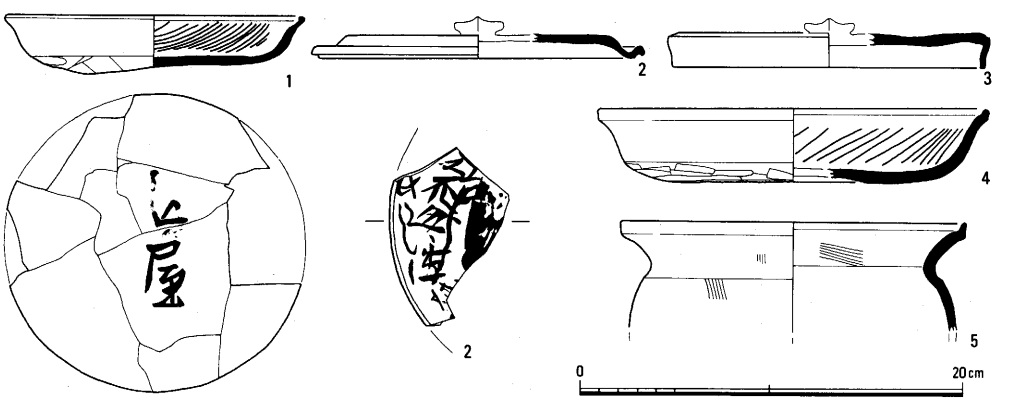
2. 土　器

今回の調査では、奈良時代から江戸時代にかけての土器が多量に出土したが、調査地が、中近世の奈良町の中心地であったことから、中近世の土器がその大部分を占め、奈良時代の土器は少ない。また、遺構の重複も著しく、遺構内から出土した遺物にも時期の異なったものが混在する例が多い。ここでは、遺構から出土した土器のうち、量的にも多く、時期的にまとまりをもつものを中心に紹介する。

ＳＫ01・03・04出土土器（１～５）　土師器杯（１・４）・甕（５）、須恵器杯Ｂ蓋（２）・壷Ａ蓋（３）などがある。土師器杯はいずれも、底部だけをへら削りするｂ手法で調整する。内面に一段の斜放射状暗文を施す。１の底部外面には、「□□屋」の墨書がある。２は転用硯として使用されたもので、内面に墨痕と習書らしい墨書があるが、判読できない。１がＳＫ03、２・３がＳＫ01、４・５がＳＫ04から出土したもので、いずれも奈良時代のものである。

ＳＫ07出土土器（６～13）　土師器皿（６～10）、瓦器皿（11）・椀（12・13）がある。土師器皿には、口径10cm前後の小皿（６～８）と口径16cm前後の大皿（９・10）とがある。土師器皿は、いずれもが内面をなで、口縁部をよこなでで調整するもので、底部外面には調整がみられない。６は、口縁端部を屈曲させるもので、いわゆる「て」字状口縁の残存形態を呈する。瓦器皿は磨滅が著しいが、内面底部にジグザグ状のへラ磨きがみられる。瓦器椀は、内面をナデ、口縁部をヨコナデで仕上げ、12は外面を４分割、13は３分割の横方向のへラ磨きを行う。内面は、口縁部を連続した圏線状のへラ磨きを密に行い、底部に、13はジグザグ状、12は４回転の螺線状のへラ磨きを施す。時期は、11世紀後半と考えられる。

ＳＥ08出土土器（14～33）　土師器皿（14～22・23・25）・高杯（24）・羽釜（26）、瓦器皿（27～29）・椀（30～32）、須恵器鉢（33）の他、少片であるが、青磁椀、白磁椀



ＳＫ01・03・04出土土器　1／4

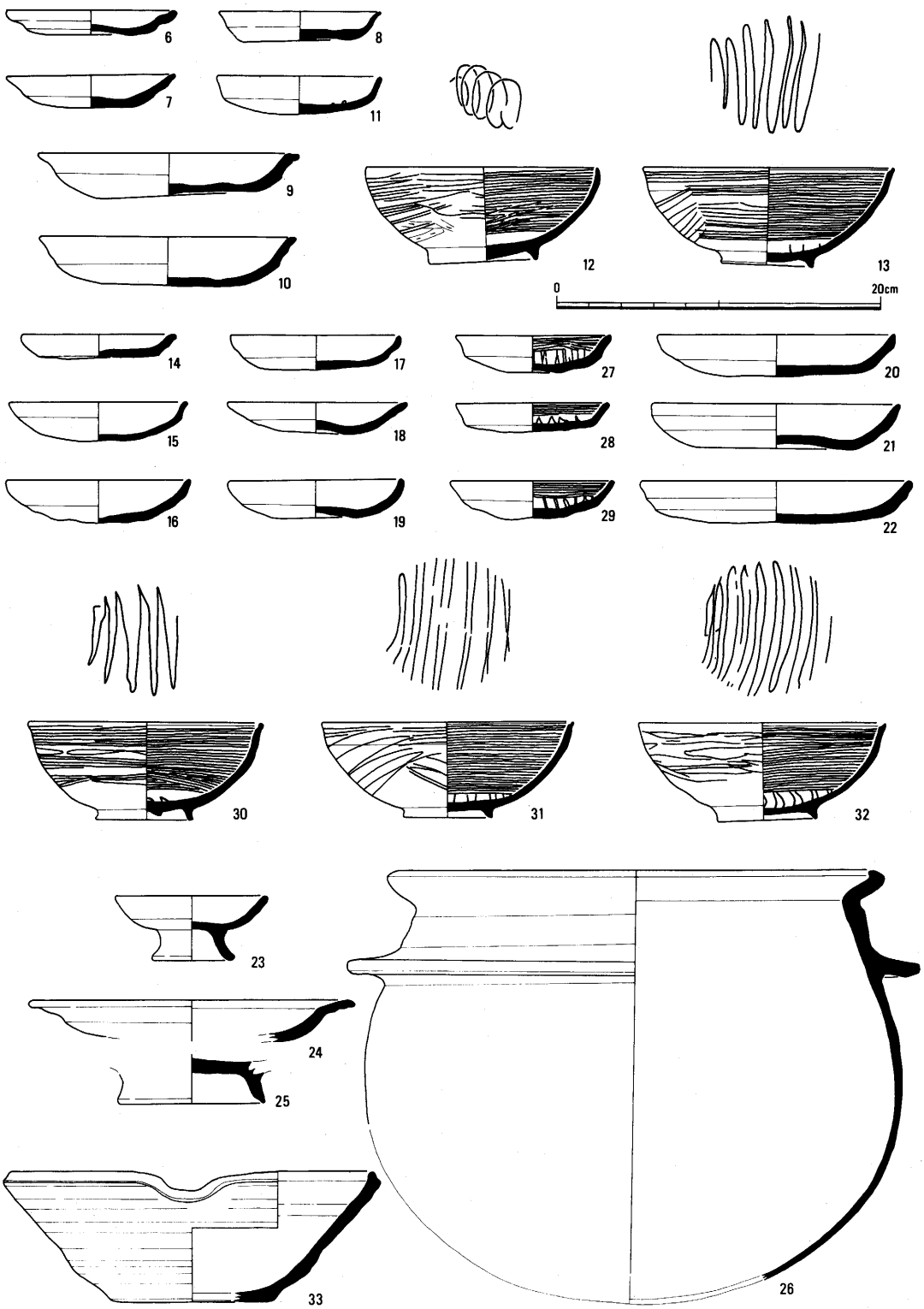
・壷などもある。土師器皿には、小皿（14～19）、大皿（20～22）と台付皿（23・25）があり、調整手法はＳＫ07出土のものと共通するが、口縁部が内彎ぎみのものが多い。瓦器皿は、内面をナデ、外面は口縁部のみヨコナデで調整する。口縁部内面は、横方向に密にヘラ磨きし、底部内面には、ジグザグ状のヘラ磨きを施す。瓦器椀の法量は、ＳＫ07出土のものと変わらないが、口縁部外面のヘラ磨きが、ＳＫ07出土のものより、省略されたものが多い。須恵器鉢は、東播系の製品である。ＳＫ07出土土器よりも新しく、11世紀末～12世紀初頭に時期が求められる。

ＳＥ11出土土器（48～56）　土師器皿（48～51）・羽釜（52・53）、瓦器椀（53・56）がある。土師器皿の口径は、小皿、大皿ともＳＥ13出土のものよりやや大きい。また、瓦器椀の口径も、ＳＥ13出土のものよりも大きく、口縁部内面のヘラ磨きもやや密である。ＳＥ13出土土器よりやや古く、13世紀中頃にその時期が求められる。

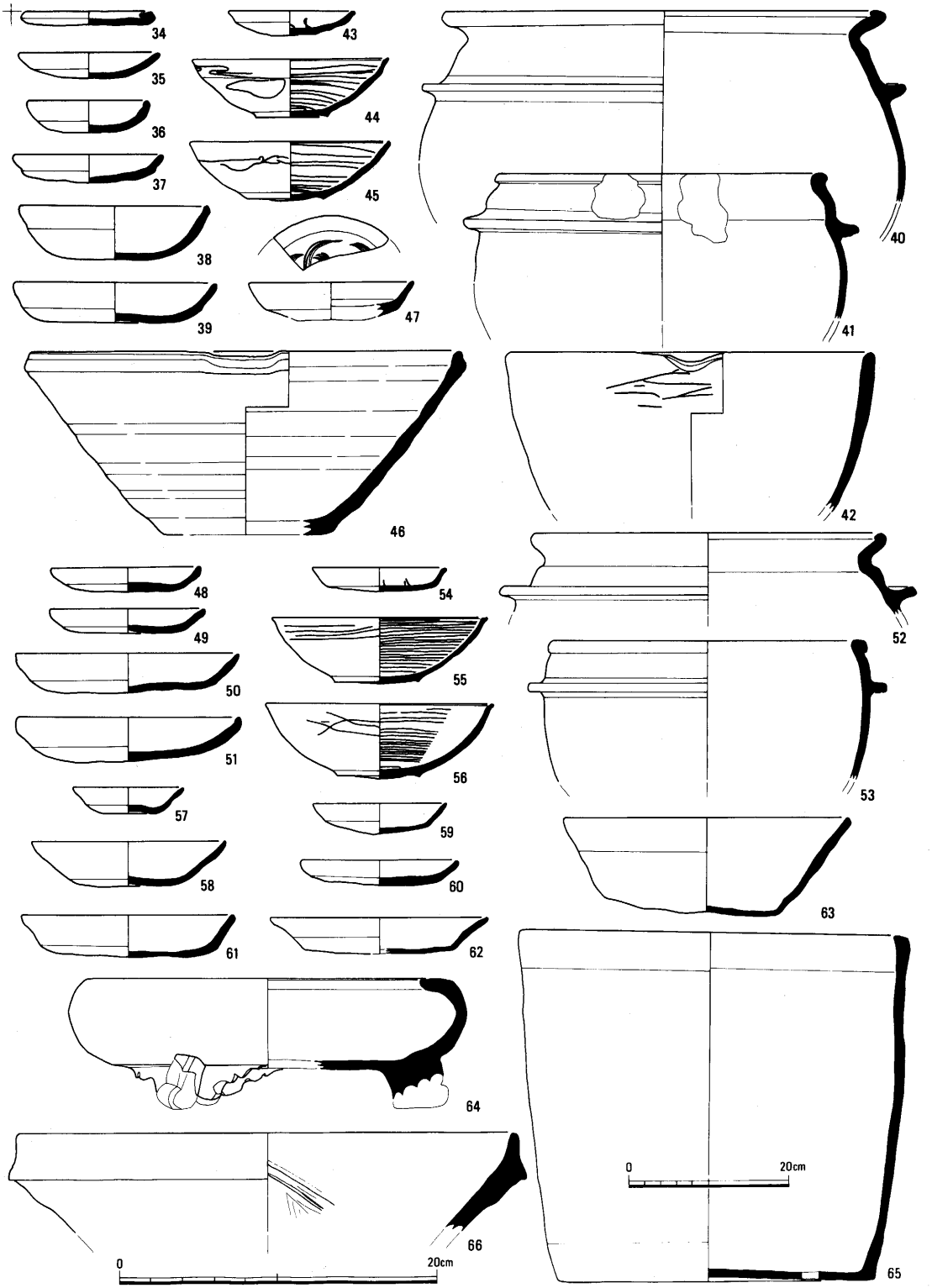
ＳＥ13出土土器（34～47）　土師器皿（34～39）・羽釜（40・41）、土師器鉢（42）、瓦器皿（43）・椀（44・45）、須恵器鉢（46）、青磁皿（47）、白磁椀などがある。土師器皿には、口縁部を内側に折り曲げた器高の低いコースター状の皿（34）があり、小皿が８～９cm、大皿が12～13cmと口径が小さい。また、小皿、大皿のいずれにも、器高が高く、深い形態をもつもの（36・38）がある。瓦器皿も口径が８cm前後と小さく、口縁部内面のヘラ磨きは省略されている。底部内面には、３回程度のジグザグ状のヘラ磨きが施される。瓦器椀は、口径12.5cm前後のもので、高台も断面三角形状の低いものである。口縁部外面のヘラ磨きの省略は著しく、上半のみを横方向に不規則に磨く。内面のヘラ磨きも粗く、間隔が広い。底部内面には、２回転程度の重なった螺線状のヘラ磨きを施す。土師器羽釜には、ＳＥ08出土のものと同じく、口縁部を外反させ、端部を内側へ折り曲げるもの（40）以外にも、内彎ぎみの頸部をもち、口縁部を外側へ折り曲げ肥厚させるもの（41）がある。須恵器鉢は東播系、青磁皿は中国龍泉窯系の製品である。時期は13世紀後半と考えられる。

ＳＥ14出土土器（57・58）　土師器皿だけを図示したが、須恵器鉢、瓦器火鉢、陶器甕などが出土している。土師器皿は、胎土が精良で、色調が淡灰褐色を呈するいわゆる「白土器」である。須恵器鉢は、高台をもつ東海系の製品。瓦器火鉢は，輪花につくり、口縁部外面に菊花状のスタンプを印す。いわゆる「奈良火鉢」である。時期は、14世紀末～15世紀初頭と考えられる。

ＳＥ16出土土器（59～66）　土師器皿（59～62）、瓦器椀（63）・火鉢（64）・甕（65）陶器擂鉢（66）などがある。土師器皿のうち60・61は他と異なり、混入と考えられる。瓦器椀は、11世紀～14世紀の瓦器椀の系統から離れた特異なものである。陶器擂鉢は備前の製品であろう。時期は、15世紀後半と考えられる。



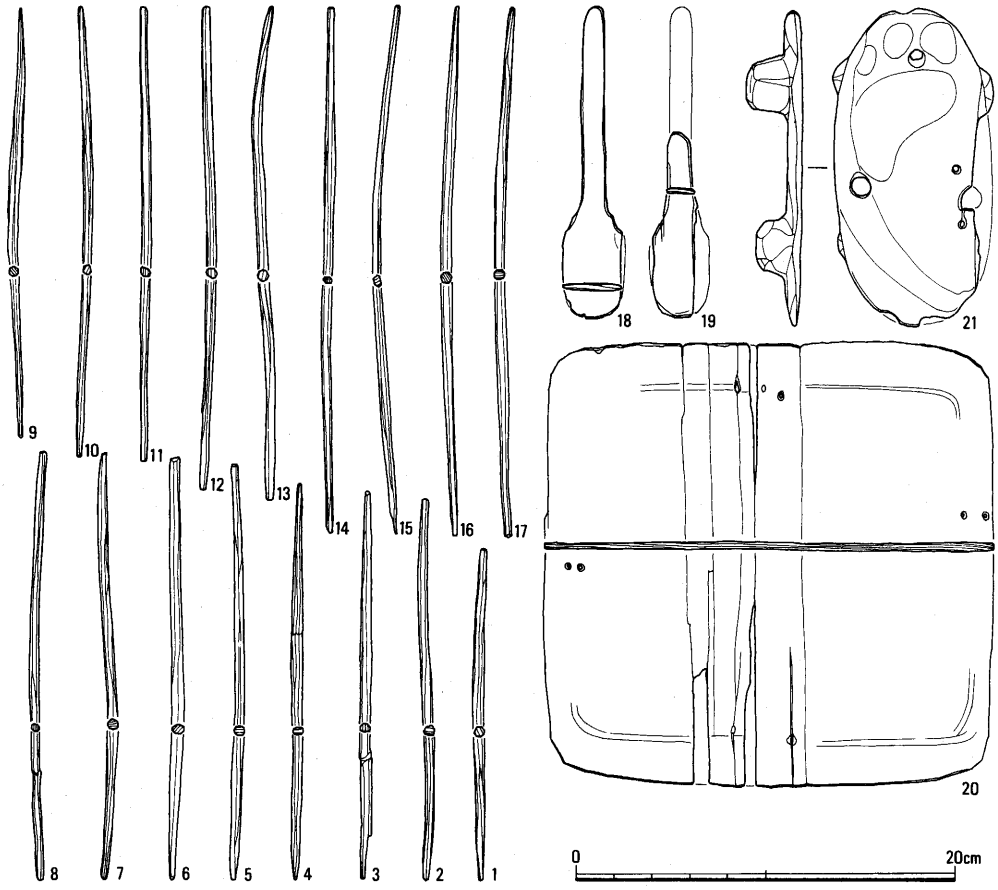
ＳＫ07・ＳＥ08出土土器　1／4



S E11・13・14・16出土土器　1／4

3. 木　器

ＳＥ08の最下層から土器と共に多量の箸、匙、方形曲物、下駄などが出土している。箸（１～17）は完形で94本あり、断片を含めると総数1124片となる。細長い棒状のもので、側面をていねいに削り上下両端はやや細くなる。長さは最長28.7cm、最短17.5cmでばらつきがあるが、径は約0.5cmである。断片がほとんどであることからおそらく折られて投棄されたものであろう。匙（18・19）は身の先端が半円形になるもので、19は身と柄の一部を欠くがほぼ同じ大きさのものであろう。18は長さ16.4cm、身幅3.2cm、柄幅1.2cm、厚さ0.4cmを測る。方形曲物（20）は底板である。大きさは一辺23.6cm、厚さ0.4cmを測る。平面は隅丸方形で縁部から内側２cmのところに側板をあてがった痕跡が残る。各辺の側板痕跡中央に側板を綴合せるための結合孔がある。この他に同様な底板が２点あり、一辺が20.5cmと21.5cmのものがある。側板は10点あるがいずれも細片である。下駄（21）は連歯のもので、平面形は楕円形で歯の断面は逆台形を呈する。前壷が中央にあり、左後壷には補修用の小孔が残る。足形痕跡から右足用とわかる。他に２点ある。



ＳＥ08出土木器　1／4

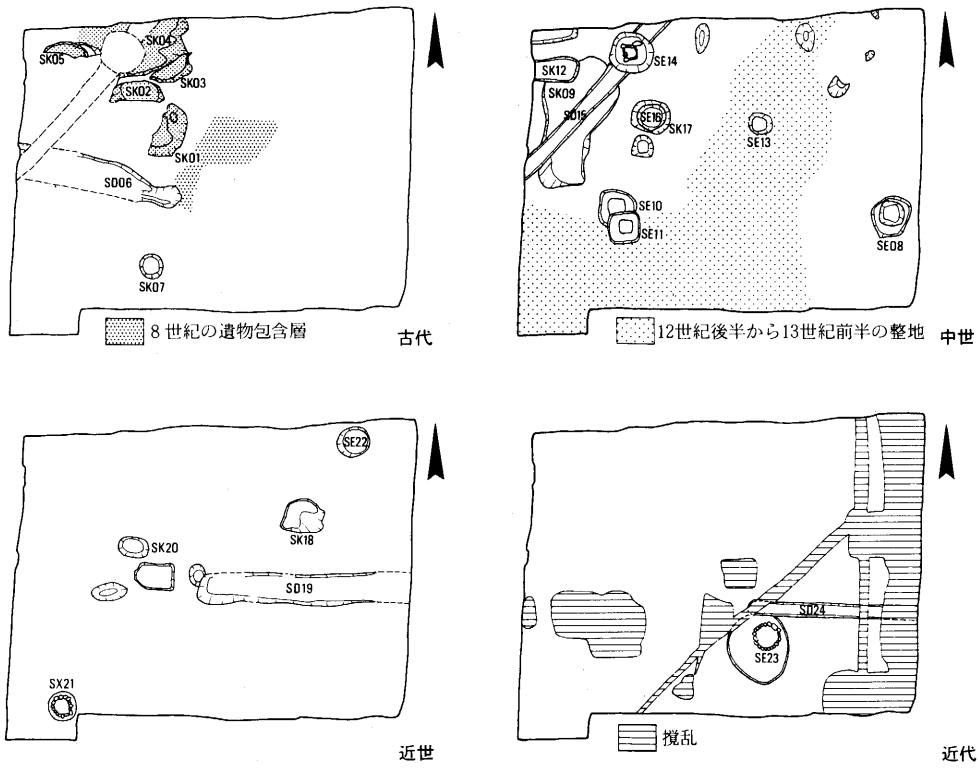
V　まとめ

以上の調査によって、明らかになった新知見について考えてみることにする。

1. 奈良時代のこの地は蔵院か修理所に推定されるが、これらに関連する遺構は何も検出されなかった。しかし、溝ＳＤ06や土坑ＳＫ09からは元興寺に使用されたと考えられる瓦塼類が多量に出土しており、この地域に建物があったとも考えられよう。また、土坑ＳＫ01～05・09からは溶着した瓦や窯体片などが多く出土している。この窯体片の中には平瓦とスサ混りの粘土を交互に重ねた分焔柱と考えられる破片もあり、このことはこの周辺にロストル式の平窯が存在したことを示唆している。なお、付近には興福寺関係の瓦窯跡が数箇所で知られており、これら瓦窯跡と出土遺物との関連が注目されよう。

2. 12世紀初頭になると井戸ＳＥ08・11などがみられることや、日用雑器などの遺物も多く出土するようになることから、この時期に寺域から興福寺の支配する郷へかわっていったと想定される。また、12世紀後半から13世紀前半にかけて、この地域に大規模な土地利用の変遷がみられるが、それがどう意味をもつものかは明らかにできなかった。この変遷は奈良町の成立を考える上で貴重な一資料となろう。（篠原豊一・森下恵介・鐘方正樹）

1）掘池春峰「造東大寺司瓦屋と興福寺瓦窯址」『日本歴史』197 1964年　2）奈良市教育委員会『奈良町（Ⅰ）』1983年



主要遺構の配置変遷図

第６次の調査

Ⅰ　はじめに

この調査は、奈良市鵲町30番地在住の田中正夫氏届出の住宅新築工事にかかわる事前発掘調査である。届出地は鵲町30番地の１・４、中院町２番地の３、届出面積は151㎡である。この地は元興寺旧境内のうち主要伽藍地域の東縁中央にあたる。西面中門の想定地に対峙する位置であるが、これまでの伽藍配置の復原研究ではこの地の東には東西小路がのびておらず、したがって東面中門もひらいていなかったとされており、その存否の確認を調査の主目的とした。

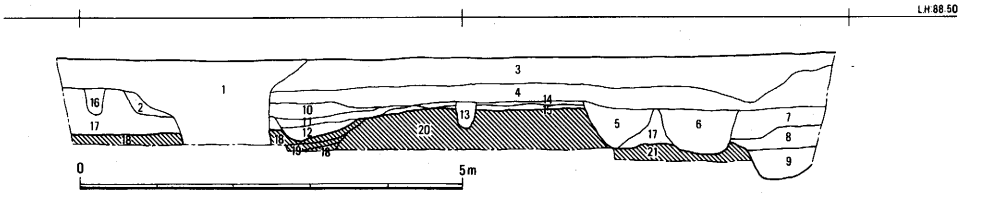
調査は昭和61年５月７日に開始し、同年５月17日に終了した。発掘面積は50㎡である。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の層序は場所によって著しく異なる。ここでは北壁の土層図を示し、それによって説明を加えておく。まず現地表面から35cmほどは暗茶色土層（３）がある。この層には建物取り壊し時の廃棄物と19世紀頃の遺物が混在している。ついで厚さ20cmほどの暗茶色土層（４）がある。この土層の上面で第１回目の遺構検出を行ない13世紀前半から19世紀初頭の遺構を検出した。さらに発掘区の西端には黄灰色粘質土（17）が残る。この土層は奈良時代の整地層かと考えられ、南壁ではこれに対応する６層に分かれる整地層が観察できる。５～８・17は13世紀頃の土坑の埋土である。14・15は後述する築地塀ＳＡ01の築成土かと考えられる。11・12はその雨落ち溝ＳＤ03の埋土、９は東七坊坊間路西側溝ＳＤ02の埋土である。地山は発掘区西端では黄褐色土、ＳＡ01下ではしまりのよい青灰色砂質土、東端では黄灰色砂質土となる。第２回の遺構検出は地山面まで掘り下げて行なった。

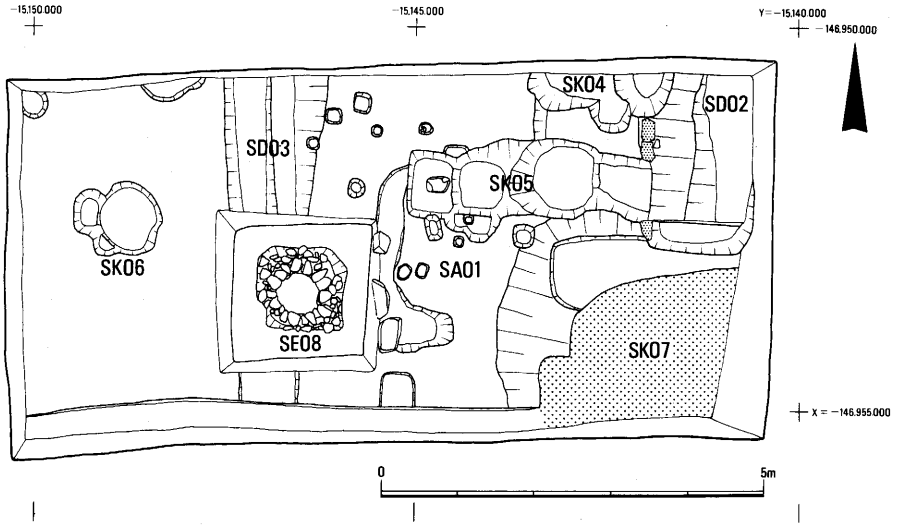
奈良時代の遺構　溝２条と築地塀１条がある。

ＳＤ02　南北方向の素掘り溝。東七坊坊間路の西側溝にあたる。土坑や井戸に破壊されており一部を検出したのみであるが、幅1.6m以上、深さ0.5m以上ある。肩部にそって平瓦が並べられており（平面図中アミ部）、これが溝の肩を示し肩崩れをふせいでいるのかも



1．現代井戸埋土　6．黄茶色粘質土　11．青味がかった黄灰色砂　16．暗茶色粘質土　21．黄灰色砂質土
2．現代井戸埋土　7．暗灰色土　12．黄灰色砂　17．黄灰色粘質土
3．暗茶色土　8．暗茶色土　13．黄褐色砂質土　18．黄褐色土
4．暗茶色土　9．暗灰色粘土　14．黄灰色砂質土　19．黒色粘土
5．茶黒色粘質土　10．青味がかった黄灰色砂　15．紫灰色砂質土　20．青灰色砂質土

北壁土層図　1／100



遺構平面図　1／100

しれない。直上に土坑が重複していたので、溝の埋土は暗灰色粘土層が残っているだけであり、出土遺物も奈良時代の土器片がごく少量あるのみである。東肩を検出してないので溝幅がわからず、したがって溝心も不明であるが、今ここでは溝最深部の座標値を記しておくとX＝－146950.63　Y＝－15140.95となる。

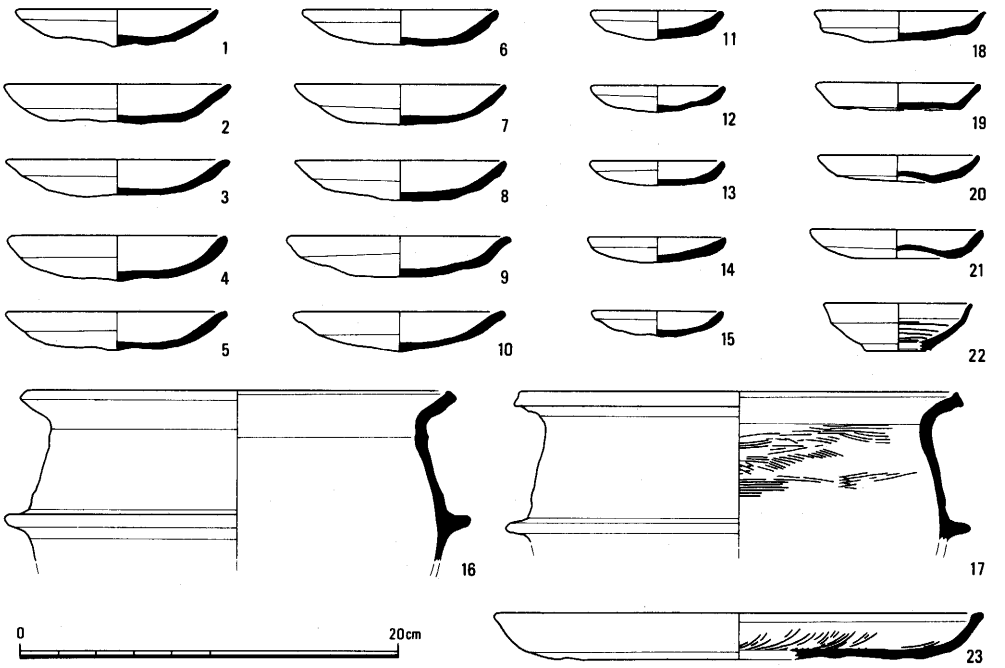
ＳＡ01・ＳＤ03　ＳＡ01はＳＤ02の西に沿う南北方向の築地塀。元興寺主要地域の東辺を画する塀である。地山を削り出して造った基底（東西幅3.2m以上）の上に２層の築地築成土（14・15）が残る。寄柱穴は検出していない。築成土は東西幅2.65m分が残るが、一部が土坑に破壊されていることと築地崩壊土との区別がつかないことから、築地本体の基底幅は不明。ＳＤ03は南北方向の素掘り溝。築地塀ＳＡ01の西雨落溝である。残りのよい部分で幅1.08m、深さ0.3mある。築地塀、雨落溝ともに化粧の痕跡は検出できなかった。なお、ＳＤ02とＳＤ03との心心間距離は6.08mある。

平安時代以降の遺構　井戸、土坑、柱穴がある。以下に主要なものを記す。

ＳＫ04　発掘区北壁にかけて検出した土坑。幅0.90～1.05m、深さ0.55mほどの土坑が３基ほぼ同位置に重複しており、一括してＳＫ04とする。全体に出土遺物は少ないが、ひとつの土坑から13世紀前半の土器が出土している。埋土の状態からみて他のふたつの土坑もほぼ同時期のものであろう。

ＳＫ05　発掘区中央で検出した土坑群を一括してＳＫ05とする。土坑の平面形には方形のものと不整形なものがあり、幅0.75～1.20m、深さ13.6～43.3mほどの土坑５基が一部重複しながら東西にならぶ。出土遺物がなく、その時期や性格は不明であるが、いずれの土坑も同質の土で埋っている。

ＳＫ06　発掘区西半部で検出した土坑群を一括してＳＫ06とする。径0.60～0.95m、深



出　土　土　器　1／4

さ20.0mほどの平面円形土坑３基が重複している。いずれの埋土からも19世紀の土器が出土した。

ＳＥ07　発掘区南東隅で検出した井戸。掘形は東西2.40m以上、南北1.95m以上ある。井戸底まで完掘できなかったので深さは不明だが、井戸枠は残っておらず、人為的に埋め立てられている。埋土上面には18世紀後半から19世紀初頭の土師器皿が正位で置きならべられており、中には２枚重ねの土師器皿もあった。他には貝殻、魚の鱗が出土した。具体的な内容は明らかではないが、井戸を廃棄するにあたっての祭祀の痕跡かと考えられる。

ＳＥ08　発掘区中央で検出した石組みの井戸。一辺1.2mほどの隅丸方形の掘形の中に人頭大の自然石を平面円形に積み上げ井戸枠とする。井戸枠の内法は0.53m前後、４段（45cm）から７段（61cm）分が残る。出土遺物がないので時期は不明だが、層位的には江戸時代の井戸である可能性が高い。

Ⅲ　出土遺物

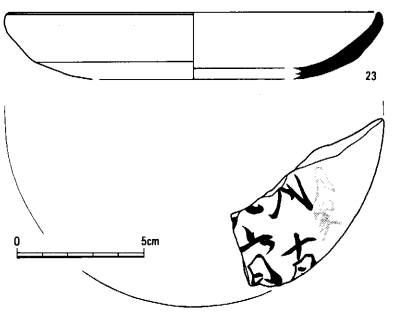
今回の調査で出土した遺物は土器が大半で、他に瓦、銭貨と貝殻などの自然遺物がある。全体の量は遺物整理箱10箱ほどである。時期的には奈良時代から江戸時代のものがある。以下、まとまりのよいＳＤ03とＳＥ07、ＳＫ09（上層遺構）出土土器について記す。

ＳＤ03出土土器（23）　土師器皿Ａ１点のみが出土した。底部外面は成形時の凹凸を残し、口縁部外面はよこなでする。a_0 手法である。内面には螺旋暗文と斜放射暗文をほどこす。口縁部は内側に肥厚する。胎土はごくわずかの砂粒を含み、色調は淡褐色である。

ＳＥ07出土土器（１～17）　土師器皿・羽釜、陶器椀がある。土師器皿には口径10.4～11.8cm、器高1.9～2.0cmの大皿（１～10）と口径7.0～7.4cm、器高1.4cm前後の小皿（11～15）がある。いずれも内面と口縁部外面をよこなでする。胎土は緻密、色調は乳白色である。大皿の大半は灯火用に使用され煤が付着している。土師器羽釜（16・17）はいずれも口縁部を外反させるもので、16は内外面ともによこなで調整、17は内面をハケ目調整の後、口縁部内面と外面をよこなでしている。色調は淡褐色。外面には煤が付着している。18世紀後半の製品であろう。

ＳＫ09出土土器（18～22）　土師器皿、瓦器椀、東播系須恵器鉢がある。土師器皿には細片のみで図示できないが口径10.5cm前後になると思われる大皿と、口径8.6～9.2cm、器高1.5cm前後の小皿がある。小皿には胎土が赤色系のもの（19・20）と白色系のもの（18・21）がある。いずれも内面と口縁部外面をよこなでする。瓦器椀にも細片で図示できないが比較的大型のものと、口径7.8cm、器高2.6cmに復原できる小型のもの（22）がある。22は内面と口縁部外面をよこなでし、内面に粗い渦巻状の磨きをほどこす。いずれも13世紀後半の製品であろう。

墨書土器（10）　上層で検出した土坑埋土から出土した土師器皿１点がある。底部外面に墨書があり□□／□十月／□六月　と判読できる。この土坑からは他に少量の土師器皿、瓦器皿、焼締陶器片が出土しており、これらからみて墨書のある土師器皿は13世紀前後の製品かと思われる。



墨書土器　1／3

Ⅳ　まとめ

以下、今回の調査成果をまとめておく。元興寺の伽藍については「元興寺堂舎損色検録帳」に詳細な記録があり、これにより長元８年（1035）における堂舎の規模と損壊状況がわかる。この検録帳には四面大垣や諸門についても記載されるが、とくに東面中門についてのみ記述を欠いている。このことから、東面中門を除いた伽藍復原が考えられており、調査の主眼もその点の確認においた。仮りに、東面中門が存在しその規模を他の東面門や西面諸門と同じく瓦葺三間の八脚門であるとすれば、これまでの伽藍復原の成果からみて今回の発掘区にその一部がかかってもおかしくはない。ところが、今回の調査では門遺構は検出できず、東面築地塀の存在と位置を確認した。したがって、この成果のみからみれば東面中門は存在しなかったことも推測でき、検録帳の欠を逆に裏づけることになる。

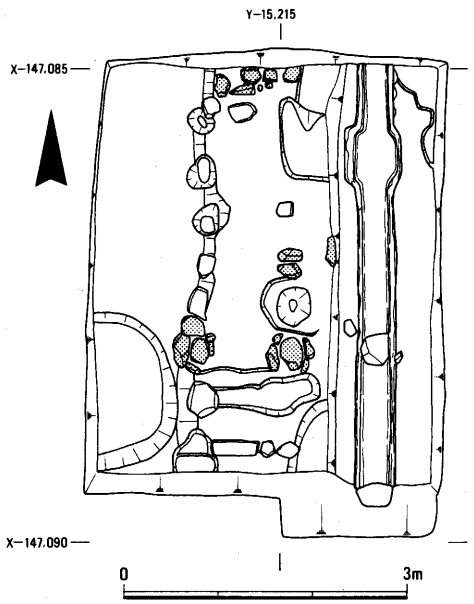
なお、重複関係から築地塀ＳＡ01よりも新しい土坑ＳＫ04からの出土遺物が13世紀前半のものであることから、遅くともこの頃までにＳＡ01は倒壊したと考えられる。

（西崎卓哉）

第８次の調査

本調査は、奈良市芝突抜町６番地において実施した藤原照次氏届出の個人住宅建設に伴なう事前発掘調査である。当該地は元興寺旧境内東回廊の推定箇所に相当する。このため敷地全幅に及ぶ発掘区（面積18㎡）を設定し、調査を実施した。調査期間は、昭和61年12月15日から同月24日にかけてである。

発掘区内の基本堆積土層は、表土以下、黒灰色焼土層、黒褐色焼土層、淡黄灰色粘質土、暗灰色粘質土、黄褐色砂礫、茶灰色粘質土の複雑な堆積層がみられ、その下に15～30cm程度の赤褐色焼土層が堆積し地山の黄褐色砂礫層に至る。ここでは、明確な遺構面２面を確認した。第１面は地山上面。発掘区中央で黒灰色粘土を築き固めた建物基壇の西南部分を検出。西辺、南辺に約25cm大の上面が平坦な石を据え、縁石とする。この基壇上面を覆う様に発掘区全面に赤褐色焼土層が堆積し、焼土中から18～19世紀代の遺物が出土。おそらくは安政６年（1859）の突抜町の大火に比定してよかろう。この焼土上面を茶灰色粘質土で整地し、約30cm大の礎石を据え置く(図中アミ表示)。第２面である。大火直後に焼土をならし、復旧作業が行なわれたものであろうか。この上層に更に薄い焼土層がみられる。以後にも何回かの火災、整地を繰り返し現在に至っているものであろう。元興寺東回廊に関する遺構については、何ら確認できなかった。（立石堅志）



遺構平面図　1／160

第９次の調査

本調査は、奈良市中新屋町25・26番地において実施した田中宏一氏届出の個人住宅建築に伴なうものである。当該地は、元興寺鐘楼推定地北側に相当する。発掘区は27㎡の範囲を設定した。調査期間は、昭和62年２月９日から24日にかけてである。

発掘区内では、表土以下複雑な堆積土層が続き、地表下約１ｍで地山の黄褐色砂礫層に至る。検出遺構には12世紀後半から近代にわたる井戸２基、土坑等がある。発掘区西側では12世紀後半～14世紀中葉にかけての土坑数基の重複がみられる。このことから、12世紀後半代にはこの周辺の堂宇は廃絶していた可能性も考えられよう。（立石堅志）

2. 史跡大安寺旧境内（第25～28次）の調査

史跡大安寺旧境内では、現状変更申請に伴って４件の発掘調査を実施した。第25次調査は賤院推定地で、第26・27次調査は食堂・大衆院推定地で行った調査だが、いずれも発掘面積が狭く、直接大安寺と結びつく遺構は検出することができなかった。第28次調査は西僧房（西中房南列）推定地の南西部で、六条大路と東三坊大路との交差部に近いところで実施した。調査当初は、調査地が伽藍外周の築地塀と僧房との間の空間地と推定されているから、寺院関係の顕著な遺構は存在しないであろうと予想されたが、これに反し、礎石建の南北棟建物などが検出されている。また、これらの遺構に数度の重複があることが知られ、伽藍に改修があったことが確認できた。

第28次の調査

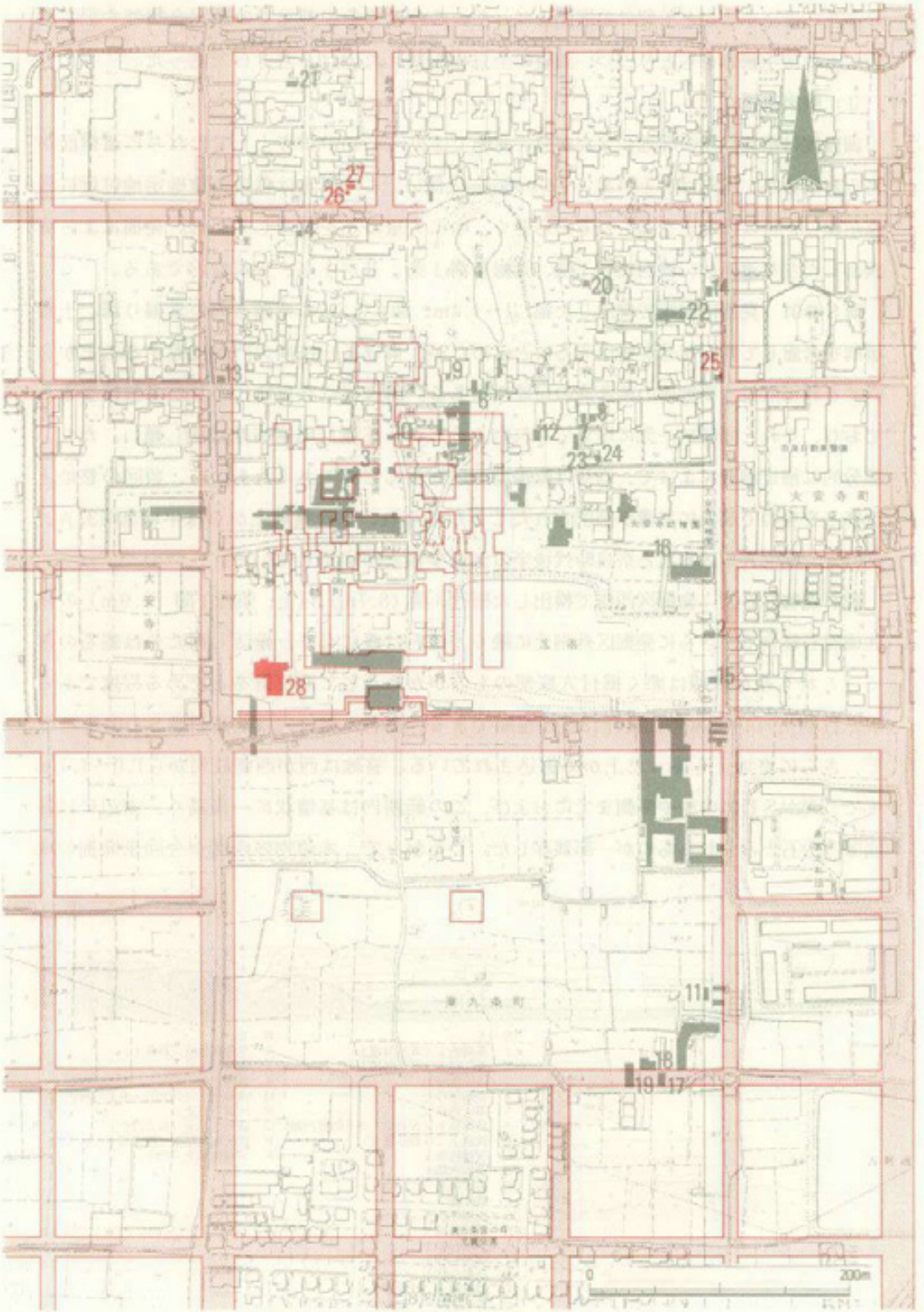
Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市大安寺町1303番地の４において、大安寺貫主・河野清晃提出の現状変更申請（大安寺本堂および東門の増改築）に対処すべく実施した発掘調査である。

大安寺では老朽化に加え手狭となった本堂の改築をかねてからの懸案としていたが、史跡指定地内にある実状では困難を伴った問題であった。その一方で、奈良市は指定地内の保存整備を図るべく土地公有化を進めており、整備計画の具体案策定を急務としている。かかる状況ゆえ、本堂の改築計画もひとり大安寺のみの問題にとどまらず、整備計画全体の枠組の中でこれをいかに解決し、整合性のとれた整備を進めてゆくのかが市にとっても重要課題なのである。というのも、現在の大安寺本堂は明治以降の移建であるが、従来の発掘成果にもとづく伽藍復原研究では、中門から西にのびる回廊に僧房（西太房南列）が接続するとみられる位置を占めている。したがって、主要伽藍を復原的に表示する類の整備方法を考慮するとなれば、本堂の移建をも含めた善後策の協議は将来必至であった。

申請は当初、現本堂の背面（西側）に増改築を加える計画であったが、これは地下遺構への影響が避けられぬと判断された。そのため関係者協議の上、本堂自体の移転をも考慮して、計画地を僧房（西中房南列）推定地外の南西部に変更した場合を想定しての検討を試みることになった。当該地が前述の伽藍復原による限りでは、南大門から西へのびる伽藍外周の築地塀と僧房との間の空間地と考えられているからである。申請への最終判断は、この部分に計画地が変更し得る余地があるか否かを発掘調査によって見極めるまで留保されることになった。

調査は、昭和61年７月16日に約400㎡の発掘区を設定して開始したが、この間礎石建物



発掘区位置図（数字は次数番号を表わす）

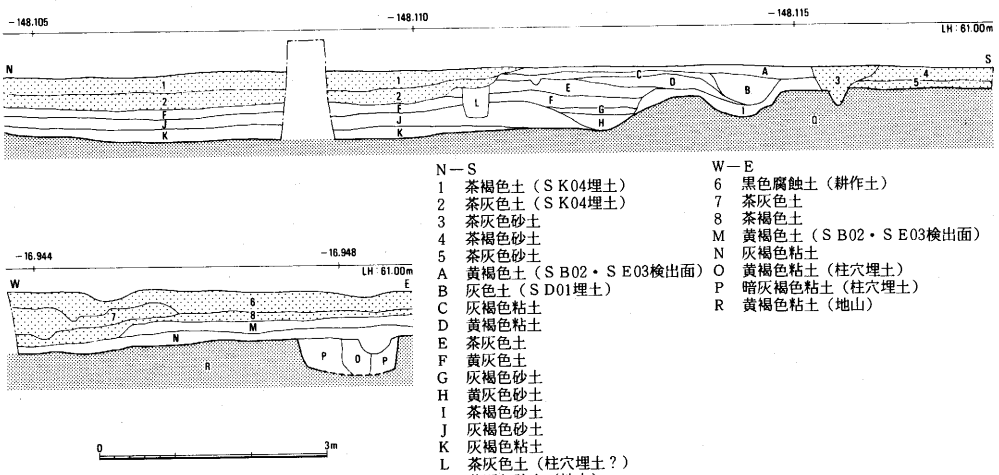
の存在を確認するなど予想外の展開となった。このため急拠地元での説明会開催や記者発表などの諸手続きをもとりつつ、調査の全日程を終えたのは９月３日であった。

Ⅱ　検出遺構

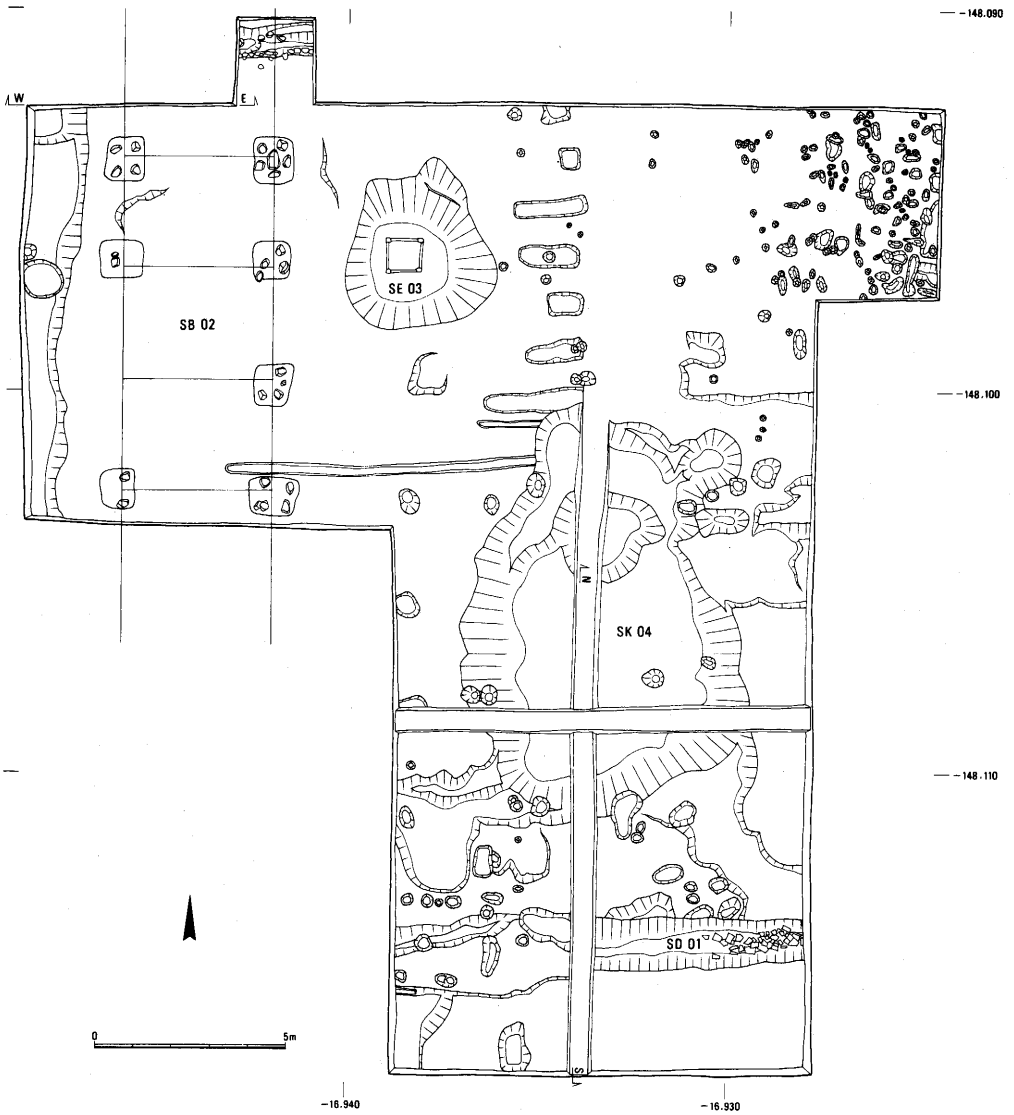
調査地は南北二筆の畑地にまたがり、北側では20～30cmの耕作土下でただちに遺構面があらわれるが、南側は客土があって60～80cmと深い。この客土は戦後金堂推定地付近に民家が建った折の削平土を盛ったものらしく、中に大量の瓦を包含していた。発掘によって検出した主な遺構は、礎石建物１棟、素掘り溝１条、井戸１基、土坑などである。

溝ＳＤ01　発掘区南端で検出した幅1.1～1.4m、深さ0.3mの東西方向の素掘り溝。上層遺構を考慮して約６ｍ分を検出するにとどめたが、東延長上に南大門が位置することからみてこれに取付く築地塀の雨落溝の可能性がある。溝底には奈良時代の瓦が多数投棄されており、これと同時に一気に埋立てられたようだが、正確な廃絶時期は決し難い。ただ、部分的な補足調査によって、当初は直接地山に掘込んだ溝であったものを、数回の整地と改修とを重ねて最後に本溝が掘削されたことが知られ、この整地土からは平城宮6137Ａ、6661Ａ、6664Ａ型式軒瓦と奈良時代後半の土器少量とが出土している。

礎石建物ＳＢ02　発掘区西端で検出した桁行３間（8.7m）以上、梁行１間（3.9m）の南北棟礎石建物で、さらに発掘区外南北に続く。礎石は既になく、確認し得たのは根石のみで、これも残存状態は悪く据付穴底部のものがかろうじて原位置をとどめる程度であるが、柱間桁行10尺等間、梁行13尺に復原できる。礎石の据付穴は前述の溝ＳＤ01を埋立て、さらに整地土を盛った上から掘込まれている。整地は西が西側柱列から1.0～1.7ｍまで、南がＳＤ01のやや南側までにおよび、この範囲内は基壇状に一段高く、南辺には基底部の沿石とみられるものが一部残存した。したがって、本建物の南端が今回未発掘の南



堆積土層図　1／100（土層図の位置Ｎ－Ｓ・Ｗ－Ｅは遺構平面図に対応）



遺構平面図　1／200

側約12m（柱間４間分に相当）の範囲内で収まることは確実で、あるいは壇の南辺に沿って廊状に折曲っていた可能性も考慮できるが、この点は発掘区南半の残存状態が悪く判然としない。本建物の存続期間については、同じ整地土から掘込まれた後述の井戸ＳＥ03が10世紀前半の構築とみられることから、ひとまずはこの時期を下限とする年代幅の中で考えておきたい。なお、発掘区北壁際の一部で整地土を掘下げ補足調査を実施したが、本建物の下層には直接地山を掘込んだ掘立柱遺構が存在する事実を確認している。

井戸ＳＥ03　礎石建物ＳＢ02の東側で検出した東西4.0m、南北4.5mの平面不整形の掘形をもつ井戸で、検出面からの深さ2.5mまでを確認した。掘形は前述のとおりＳＢ02検出面と同じ整地土を掘込んでいる。井戸枠は四隅に立てた角柱に横桟を枘留めして側板を支持

する構造で、側板には上部に竪板を、下部に横板を使用する。組上がりの内法寸法は一辺約90cmである。枠内からは平城宮6138Ｊ、6272Ｂ、6284Ｄ、6717Ａ型式軒瓦と10世紀前半の土器が、枠上部の埋土からは同6091Ａ、6138Ｃ、6664Ａ、6712Ａ・Ｂ、6716Ｃ、7251Ａおよび10世紀後半の土器が出土しており、この時期には埋没していたものと思われる。

土坑ＳＫ04　発掘区中央南寄りで検出した東西7.9m、南北10.9m、深さ0.5mの平面不整形の土坑。多量の瓦（平城宮6091Ａ、6137Ａ、6138Ｃ・Ｅ・Ｊ、6304Ｄ、6661Ｂ、6712Ａ・Ｂ、6717Ａ、7251Ａ型式軒瓦および重弧文軒瓦を含む）と、12世紀後半の土器が出土しており、この時期に廃瓦を投棄する目的で掘削されたものと解される。

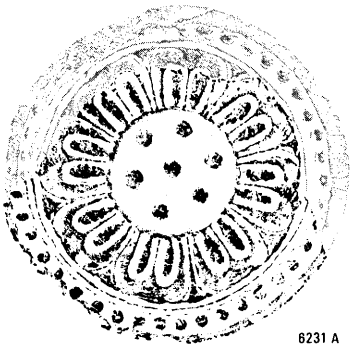
Ⅲ　出土遺物

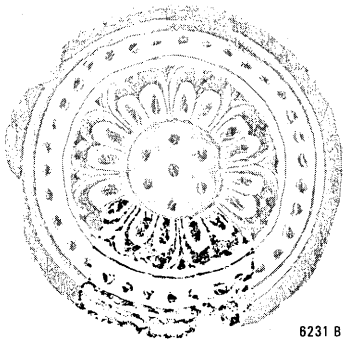
出土遺物は瓦類がほとんどで整理箱約510箱を数えるが、前述の客土と土坑ＳＫ04出土のものが大半を占める。ほかには、これらとともに土器約50箱が出土している。

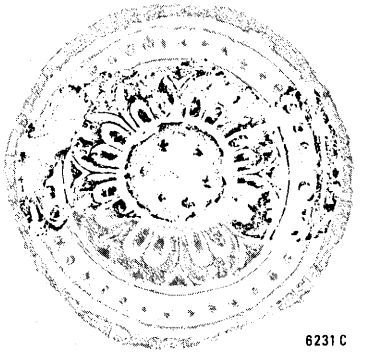
瓦　類　大多数を占める丸瓦・平瓦は未整理なので、ひととおり整理のついた軒瓦などについて報告する。軒瓦は総数316点で、奈良時代のもの295点と平安時代以降のもの21点とがある。このうち奈良時代のものは、細片のため型式の同定が困難な49点を除いて、８型式12種108点の軒丸瓦と、９型式12種138点の軒平瓦とに分類できる。型種と点数の内訳は下記のとおりであるが、軒丸瓦6231Ｃ、6272Ｂ、6308Ｄ、軒平瓦6663Ａを除くと、これまでにも大安寺の調査で同笵品の出土が知られているものばかりである[1)]。最も多量に出土したのはいわゆる大安寺式（軒丸瓦6091Ａ、6137Ａ、6138Ｃ・Ｅ・Ｊ、軒平瓦6690Ａ、6712Ａ・Ｂ、6716Ｃ・Ｄ、6717Ａ）で型式を同定し得たものの約６割を占める。残りは平城宮系のもの（軒丸瓦6284Ｄ、6304Ｄ、6308Ｄ、軒平瓦6663Ａ、6664Ａ、6682Ｃ）と、いわゆる大官大寺式（軒丸瓦6231Ａ・Ｂ・Ｃ、軒平瓦6661Ａ・Ｂ）とがほぼ半数ずつを占める。大安寺式が多数を占めるかかる傾向は、従来の調査結果と共通するところである。なお、大安寺では初出の軒瓦のうち軒丸瓦6272Ｂについては、右京九条一坊十二坪の九条大路沿いの地域で6644型式軒平瓦との組合わせが知られている[2)]が、大安寺でもこれまでに6644Ｃの出土があり、これとの関連で注意をひく。

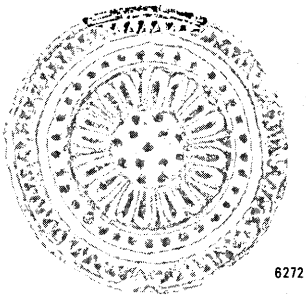
軒丸瓦	6091Ｂ（６点）	6137Ａ（18点）	6138Ｃ（19点）	6138Ｅ（13点）
	6138Ｊ（10点）	6231Ａ（16点）	6231Ｂ（１点）	6231Ｃ（２点）
	6272Ｂ（１点）	6284Ｄ（３点）	6304Ｄ（18点）	6308Ｄ（１点）
軒平瓦	重弧文（８点）	6661Ａ（４点）	6661Ｂ（19点）	6663Ａ（１点）
	6664Ａ（22点）	6682Ｃ（１点）	6690Ａ（２点）	6712Ａ（40点）
	6712Ｂ（８点）	6716Ｃ（９点）	6716Ｄ（１点）	6717Ａ（23点）

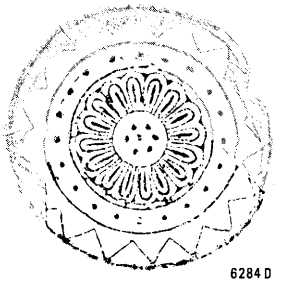
軒瓦のほかには鬼瓦の断片４点が出土しているが、いずれも毛利光俊彦氏分類[3)]の南都七大寺Ⅳ式Ａに比定できる。うち２点が井戸ＳＥ03から、１点が土坑ＳＫ04から出土した。

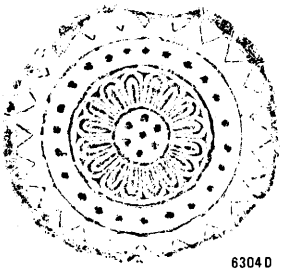

6231 A

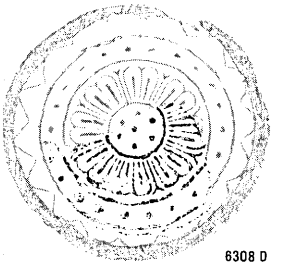

6231 B

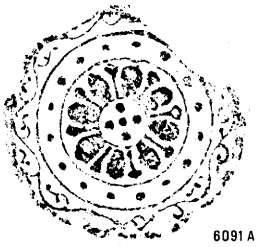

6231 C

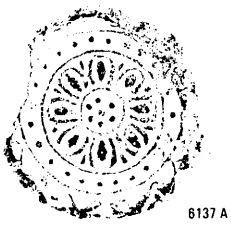

6272 A

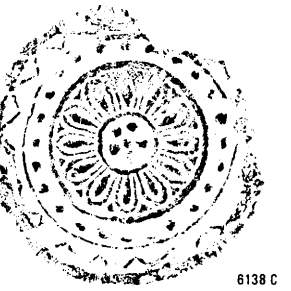

6284 D

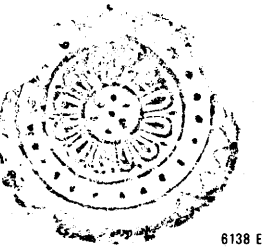

6304 D

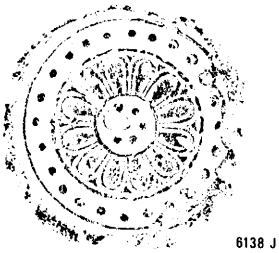

6308 D

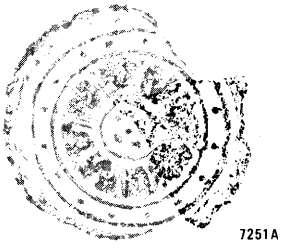

6091 A

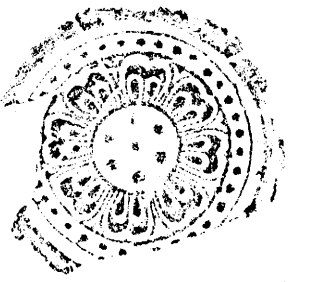

6137 A


6138 C

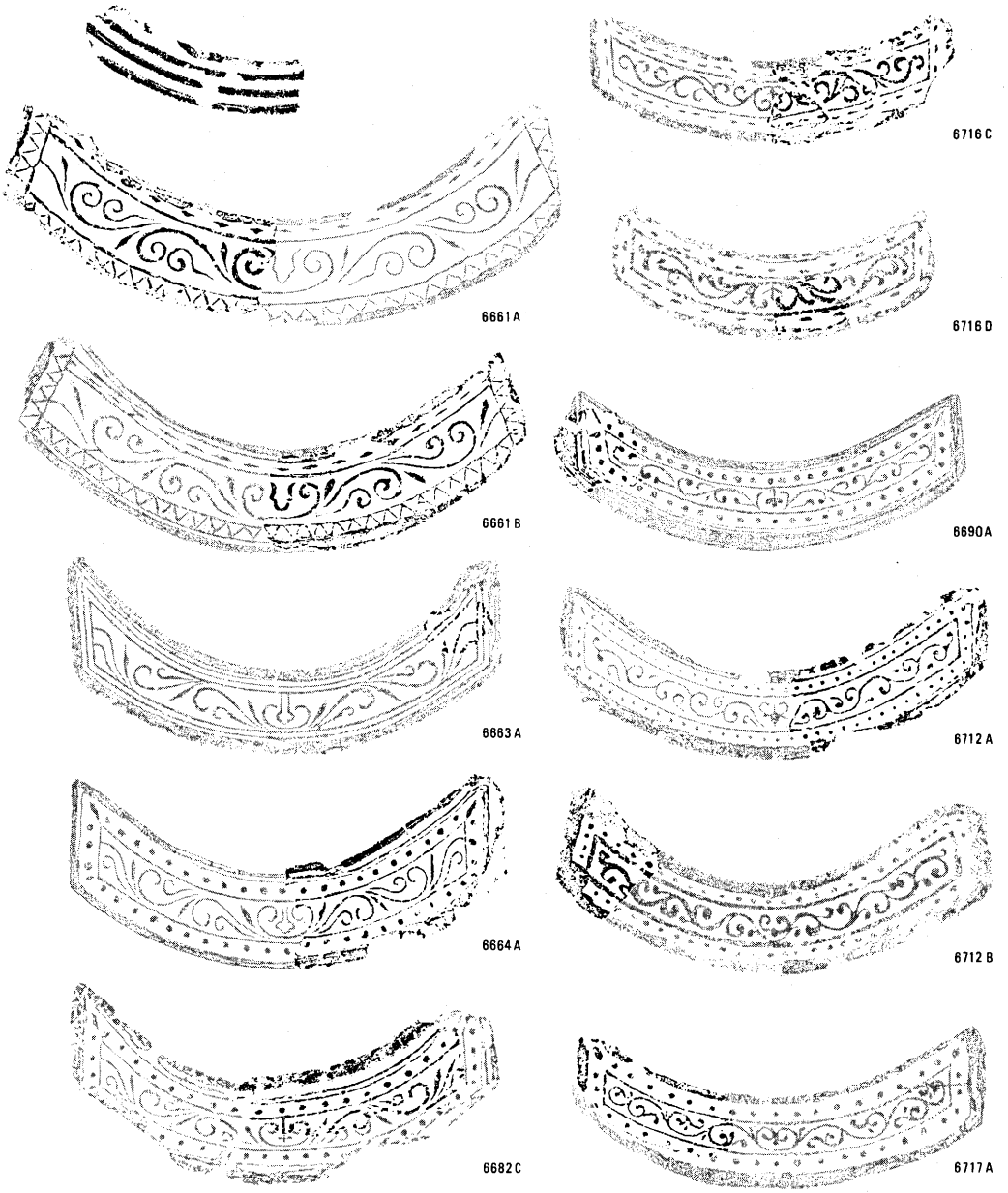

6138 E


6138 J


7251 A



軒　丸　瓦　1／5

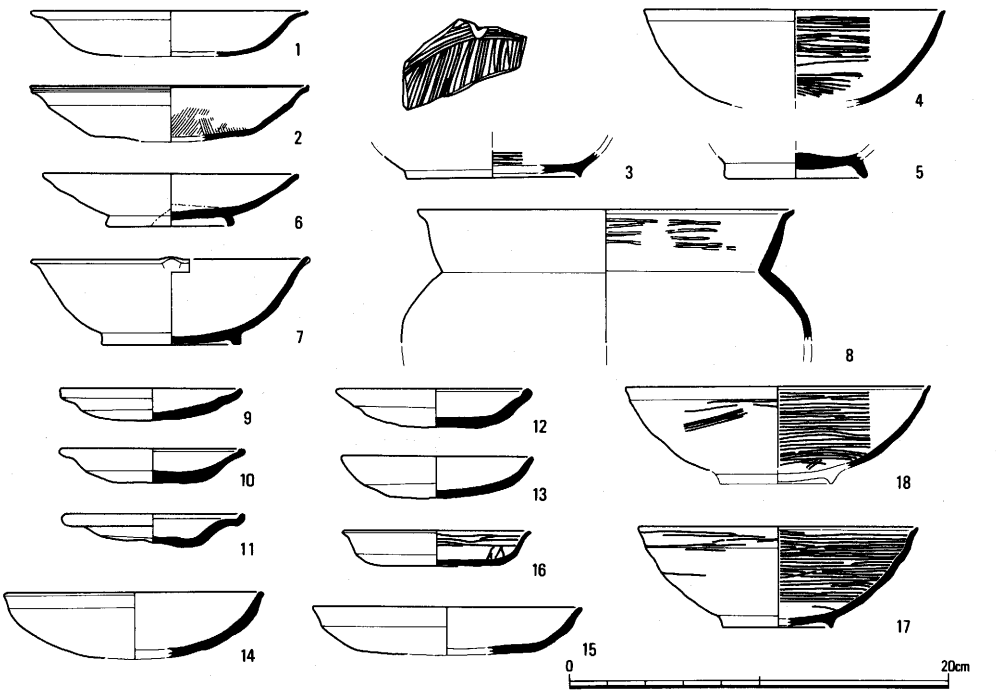


軒　平　瓦　1／5

また、未整理ではあるが、平瓦のなかにはいわゆる凸面布目瓦が混在する。この手の平瓦は調査地西隣の左京六条三坊十三坪から大安寺所用瓦とともに出土した例[4]があり、恐らくは大官大寺周辺から大安寺創建に際して運ばれて利用されたものと解されたが、これで大安寺での使用が確実となった。

1）山本忠尚「大安寺の屋瓦」『大安寺史・史料』（大安寺1984年）および奈良市教育委員会の調査資料に基づいた。
2）奈良国立文化財研究所『平城京九条大路一県道城廻り線予定地発掘調査概報Ⅰ』1981年
3）毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦」奈良国立文化財研究所『研究論集Ⅵ』1980年
4）中井公「平城京に運ばれた凸面布目平瓦」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1985』1986年

井戸ＳＥ03出土土器（１～８）　土師器皿（１・２）、黒色土器Ａ類杯Ｂ（３）・Ａ類椀（４・５）・Ａ類甕（８）、灰釉陶器皿（６）・椀、緑釉陶器輪花椀（７）がある。このうち１・２・６・７及び灰釉陶器椀は、井戸枠内埋土から、他のものは、井戸上部埋土から出土した。土師器皿は、口径14.6cm、器高2.5～３cm程度のもの。口縁部上端を強くなでることにより外反させ、口縁端部を上方につまみあげる「て」字状口縁を呈する。１は赤褐色を呈し、胎土中に雲母片や細砂粒を多く含む。器壁は薄く、軟質である。２は灰白色を呈し、胎土は精緻である。器壁は１に比し、やや厚い。内面にハケ目を施し、その上を丁寧によこなでしている。また、外面口縁端部に沈線が一条巡る。黒色土器Ａ類杯Ｂは、平らな底部に低い高台を貼付けるもの。内面は底部を縦方向にへら磨きし、そののち体部を密にへら磨きする。黒色土器Ａ類椀（４）は内彎する半球状の体部を呈す。口縁部外面をよこなでし、やや外反気味におさめる。体部内面をハケ目で調整したのち、密なへら磨きを施す。５は、高さ約１cmのやや外方へ張るしっかりした高台をもつ。高台径7.4cm。灰釉陶器皿（６）は、やや内彎気味で大きく外方へ開く体部に高さ約５mmの断面三日月状の高台を貼り付けるもの。釉は漬けがけにより施釉される。猿投窯編年折戸53窯式のものに類似する。緑釉陶器輪花椀は、口径14.8cm、器高4.5cmをはかる。内彎する深い体部に断面方形の輪高台をもつ。口縁端部を外反させ、一部に指押さえによって輪花を表わす。高台は円盤状の底部をへら削りにより削り出し輪高台としたものである。高台成形後、へら



ＳＥ03・ＳＫ04出土土器　1／4

削り痕跡を丁寧になで消している。胎土は堅緻で、灰色を呈する。釉はハケ塗りにより施釉され、黄緑色の発色を示す。黒色土器A類甕は肩部から斜め上方に立ちあがる口縁部をもち、口縁端部をよこなでによって外反させる。内面口縁部には横方向のへら磨きが施される。以上の土器のうち、1～3・6・7に関してはそれぞれ10世紀前後、4・5に関しては10世紀後半の時期が考えられよう。

土坑ＳＫ04出土土器（9～18）　土師器皿（9～15）、瓦器皿（16）・椀（17・18）がある。土師器皿には口径9.5～10cm前後の小皿（9～13）と、口径13～14cmの大皿（14・15）がある。小皿には口縁部がいわゆる「て」字状を呈するもの（9～12）と、外反して端部をまるくおさめるもの（13）がみられる。9～11は精良な胎土からなり、12・13の胎土はやや砂粒を多く含むものである。また大皿には、器高2.5cm程度で平底を呈するもの（15）と、器高3.5cm程度のやや深く丸みを帯びた底部をもつもの（14）がみられる。瓦器皿は平らな底部と外反する口縁部からなり、口縁部内面に横方向のへら磨き、底部内面見込み部にジグザグ状のへら磨きを施す。瓦器椀（18）は、口径14.8cm、器高5.3cmをはかる。半球状の体部に断面三角形の比較的安定した高台を貼り付ける。体部外面下半に粘土板合わせ目痕跡がみられ、これに沿って剥離する部分がある。内面及び外面の口縁部上半にへら磨きを施すが、外面のへら磨きはきわめて粗い。内面見込み部には螺旋状の暗文が施されている。12世紀後半の時期のものである。

Ⅳ　まとめと課題

第28次調査の成果を要約すると、次の二点にまとめることができる。一点は、大安寺の遺構が数時期にわたって予想以上に複雑に重複している事実が判明したことである。こうした遺構の重複については、既に西中房北列の調査でも断片的に明らかになっており、この折の所見では建物規模や柱間寸法を異にした少なくとも前後2期の遺構が存在し、前期の建物には修復あるいは改築があった可能性も考慮されている。したがって、今後大安寺伽藍を解明してゆくにあたっては、各遺構の時期決定により厳密な注意を必要とするのは言うまでもなく、遺構相互の併存関係を十分に検討しなければなるまい。ただ、現状変更申請に伴う小規模な面積の調査だけではこうした作業がほとんど不可能であるから、史跡指定地公有化の進展と相俟って実施されるべき調査には、かかる意味からも期するところが大である。いま一点は、先の課題とも関係するが、従来の伽藍復原では主要建物が存在しないとみられていた寺域の南西隅で礎石建物を検出したことである。当然これの性格付けが課題となるが、西小子房を想定するのも一案であるし、あるいはまた本文中でも触れたとおり廊状の建物となる可能性も否定できない。同調査地内の未発掘部分の解明はまずもっての急務であるが、同時に南大門や中門など既に調査された主要遺構についても、これらの位置関係を端的に把握できるように同一の測量基準での再測を急ぐように努めたい。

（中井　公・立石堅志）

第25次の調査

本調査は、奈良市大安寺町988－3において実施した近藤正廣氏届出の店舗付住宅の建設に伴なう事前発掘調査である。当該地は、賤院推定地東辺にあたり、東西北門の存在が想定される位置にある。このため発掘区を調査地中央に東西3.6m、南北2.4m（面積8.64㎡）の範囲で設定し、調査を実施した。調査期間は、昭和61年5月19日から5月22日にかけてである。

発掘区内の基本的な堆積土層序は、地表下約60cmまでに及ぶ宅地造成土の下、暗灰色粘質土、近世遺物包含層である茶褐色粘質土と続き、地表下約90cmで地山の明黄灰色粘質土となる。検出した遺構は土坑数基で、そのほとんどが遺物包含層である茶褐色粘質土から掘り込まれる近世期のものである。他にその上層から掘り込まれる近代期の土坑があるが、奈良時代の遺構とみられるものはなかった。（立石堅志）

第26次の調査

本調査は、奈良市大安寺町1067－2において実施した武野　正氏届出の住宅増築工事に伴なう事前発掘調査である。当該地は食堂幷大衆院推定地北辺に位置し、左京六条四坊一坪の東南にあたる。発掘区は、届出地全面に南北2m、東西4m（面積8㎡）で設定した。調査期間は、昭和61年6月2日から翌3日にかけてである。

発掘区内の基本的な堆積土層は、黒褐色粘質土の表土下、茶褐色粘質土の遺物包含層が続き、地表下約30cmで黄褐色砂の地山となる。遺構は全て地山上面で検出し、溝4条、柱穴1がある。いずれも近世から近代の時期のものである。（立石堅志）

第27次の調査

本調査は、奈良市大安寺町1067の2において実施した大西逸男氏届出の個人住宅建築に伴なう事前発掘調査である。当該地は、食堂幷大衆院推定地の北辺に位置し、左京六条四坊一・八坪坪境小路西辺にあたる。発掘区は、調査地中庭に東西6m、南北2.4m（面積14.4㎡）で設定した。調査期間は、昭和61年6月2日から4日にかけてである。

発掘区内の基本的な堆積土層序は、暗茶褐色粘質土の表土下約40cmで黄褐色砂の地山となる。発掘区内で地山は西端から東に向かい徐々に下降する。西端から約2m程のところでテラス状の平坦面をつくり、同約4mで更に一段落ち、以東は平坦面となる。西端との地山の比高差は、1m程度である。この段差の最深部には近世遺物を含む黒褐色粘砂が堆積する。この上層には竹根と茶褐色粘質土を用いた整地が行なわれ、西端地山面との高さを揃えている。この整地は、近世期における造成作業であると考えられる。（立石堅志）

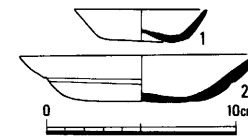
3. 史跡東大寺旧境内第７・８次調査

第７次の調査

奈良市雑司町47番地において実施した、田村国男氏申請の集会所建設に関する現状変更に伴う調査である。発掘区は東西２m、南北11m。調査期間は昭和61年５月19日から同月24日までである。

発掘区内の土層は、表土（黒灰色土）の下、黒色土あるいは茶灰色土とつづき、地表面下約50cmで遺構面の暗灰色土に至る。ただし、遺構検出はさらに一層下、黄茶色粘質土層上面で行い、柱穴、素掘り溝、土坑を検出した。いずれも中世以降のものかと思われる。柱穴は、小範囲の発掘であったため建物としてはまとまらないが、検出数と重複状況から頻繁な建替えがあったことはうかがえる。素掘り溝の中には南北方向のもののほか、北東一南西方向のものがあり、調査地付近にある時期こうした方位の地割があったことが想定できる。

出土遺物には土師器、須恵器、陶器、瓦がある。このうち土坑出土遺物の一部を図示した。ともに土師器皿で、１は口径12.5cmの大皿。２は口径6.9cmの小皿で、いわゆるへそ皿である。いずれも白色系の色調を呈し、14世紀頃のものと考えられる。



出土土器　1／4

（森下浩行）

第８次の調査

奈良市雑司町字中組118－１番地において実施した、川辺　弘氏申請の個人住宅新築に伴う現状変更に関わる事前調査である。調査は敷地中央に東西３m、南北10mの発掘区を設定し、実施した。調査期間は昭和61年５月19日から同月24日までである。

顕著な遺構はなく、地表下約70cm前後で粗砂を含む暗灰色砂礫層があらわれる。その下には拳大の小石を含む層があり、発掘区全面が河川堆積の状態を示している。これらの砂礫層には瓦器、土師器などが少量含まれる。土器の端面には摩滅がみられることから、上流より流れてきたと考えられる。なお砂礫層の上層から土師器小皿が出土し、それは16世紀以降のものと考えられる。

さて、この旧河道は恒常的なものであったと推察できるが、上面を確認するにとどめたため、深さは不明である。今日でも正倉院北方の谷より発掘区南側に流路があり、発掘区の流路はそれから継続すると考えられる。この調査は、流路の付け替えないし制御が中世末にあたると考えられることから、東大寺境内の土地利用の変遷を探る上での一資料となった。

（今尾文昭）

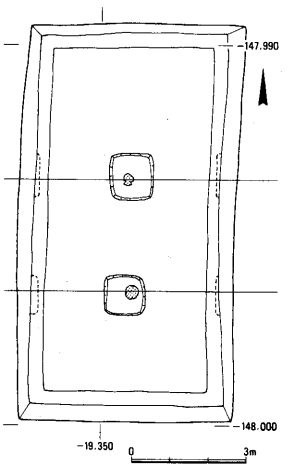
4. 薬師寺旧境内（第１・２次）の調査

第１次の調査

本調査は、新井康彦氏届出の住宅離れ改築に伴う事前の発掘調査である。調査地は東僧坊の東100mの位置にあたり、旧境内僧綱所推定地にあたる。調査は東西1.7m、南北4.5mの発掘区を設定して行なった。土層堆積状態は上層から客土、旧耕土、茶褐色砂質土、灰褐色砂質土、暗茶褐色粘質土となり、地表下1.5mで明黄色粘土の地山となる。暗茶褐色粘質土は奈良時代の遺物包含層である。検出した遺構には中近世の土取穴がある。この土取穴は茶褐色砂質土上面で検出したもので、発掘区外へ拡がるため全体は不明である。埋土からの出土遺物が少なく時期は確定できないが、層位からみて中近世のものであろう。また、奈良時代の包含層からは軒平瓦6641H、平瓦、須恵器、土師器などが出土している。薬師寺東僧坊での発掘調査の際にも、土取穴と考えられる同様な土坑が東辺で検出されており、これらが広範囲におよんでいたことが推察されよう。（篠原豊一）

第２次の調査

本調査は、奈良市西の京町字東堂院320―１・４番地において、吉岡康男・潔氏届出の住宅新築工事に伴って実施した。調査地は前述第１次の調査と同じく僧綱所推定地内で、同調査地南隣の畑地である。堆積土層は耕作土の下、灰色粘土、明灰色粘土（遺物包含の整地土）と続き、地表下約1.0mで青灰色粘砂の地山となる。検出した遺構は南北２個の柱穴で、これらは明灰色粘土の上面から掘込まれている。南北にはのびず、発掘区壁面においてそれぞれ東西に続くことを確認している。かかる配置から東西棟建物の廂部分に比定することが可能で、北柱穴が浅いことからみて北廂である公算が高かろう。両柱穴とも柱根が遺存しており、柱間は心々で 2.9m である。なお、南柱穴の底部には礎板のかわりに軒平瓦と平瓦とが敷きつめてあり、6641H、6663F、6721Hｂが各１点出土した。また、遺構に伴ったものではないが、軒丸瓦6276Aｂ（２点）・E（１点）、6307C（３点）、軒平瓦6641H（２点）・I（１点）、型式不明（１点）が出土している。発掘面積50㎡ほどの小範囲な調査ではあったが、僧綱所推定地内にもかなりの規模の建物が存在した事実が判明したことは貴重な成果であった。（中井　公）



遺構平面図　1／200

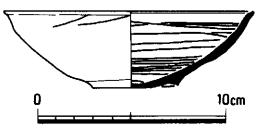
5. 西大寺旧境内（第１次）の調査

この調査は、奈良市西大寺芝町１丁目2525、2527～2530番地で行った、岡本勇治氏届出のアパート建設に関わる事前発掘調査である。この地は西大寺旧境内の最南端、境内の南辺を画する築地が想定され、また、一条南大路と西三坊大路の交差部かとも思われる地点であった。調査期間は昭和61年９月18日から同月25日まで、調査面積は80㎡である。

調査の結果、発掘区内では水田耕土を取除くと２m以上にわたって灰色系の粘土層が続き、この間に何層かの砂層がはいる状況であった。遺物も近世の陶磁器片が若干出土したが、それ以前の時期のものはなかった。以上の結果から、発掘区内では遺構は検出できないと判断し、発掘位置を記録し、層序を観察・記録するにとどめた。　（西崎卓哉）

6. 新薬師寺旧境内（第１次）の調査

この調査は、㈱スリーエム代表取締役・村田昌昭氏届出の住宅新築に伴う調査である。奈良市高畑町625番地の１において、南北20m、東西4.8mの発掘区を設け、昭和62年１月26日から同年２月６日まで行った。遺構は地表下約40cmの黄灰色土、茶灰色土上面で掘立柱建物、素掘り溝、土坑を検出した。掘立柱建物は桁行１間（2.15m）以上、梁間１間（1.85m）の小規模な東西棟建物。柱穴のひとつから完形の瓦器椀（13世紀後半）が出土。他のまとまらない柱穴のなかには信楽擂鉢（江戸時代）を出土したものがある。遺物包含層からは中世以降の土師器、須恵器、瓦が出土した。　（森下浩行）



出土土器　1／4

7. 菅原寺旧境内（第１次）の調査

この調査は、奈良市菅原町518番地他において行った、菅原神社社務所改築に関わる事前発掘調査である。調査地は現在の菅原寺の北東150m、菅原寺旧境内の一画に推定される地点である。調査は昭和62年２月26日に開始し、同年３月４日に終了した。発掘区は東西６m、南北16mである。発掘区内の層序は、水田耕土の下に約20cm厚さで灰色粘土（床土）があり、さらに10cmほどの灰色粘土まじりの灰色砂層がある。以下、１m以上の灰色系の砂層が続いており、この砂層をさらに掘り下げたが、激しい湧水のため壁面が崩壊し地山を確認するまでには至らなかった。遺物は、床土および灰色砂層から若干の近世土器が出土したのみである。　（西崎卓哉）

III. その他の調査

1. 佐保山遺跡群の調査

本調査は、奈良市奈良阪町字サツマ谷において実施した奈良北１号線（都市計画街路）の敷設に伴なう事前の発掘調査である。調査は昭和62年１月19日から２月18日にかけて実施した。調査地一帯は、「三井佐保山住宅地」建設に先がけて行なわれた橿原考古学研究所による試掘調査[註)]によって確認された遺跡群に含まれ、その後の調査を含めて古墳、瓦窯跡、奈良時代火葬墓群の存在が明らかにされている。発掘区は予定路線内にそって設定したが、便宜上、発掘区を南からA、B、C、D、E区と呼称し以下に記述する。

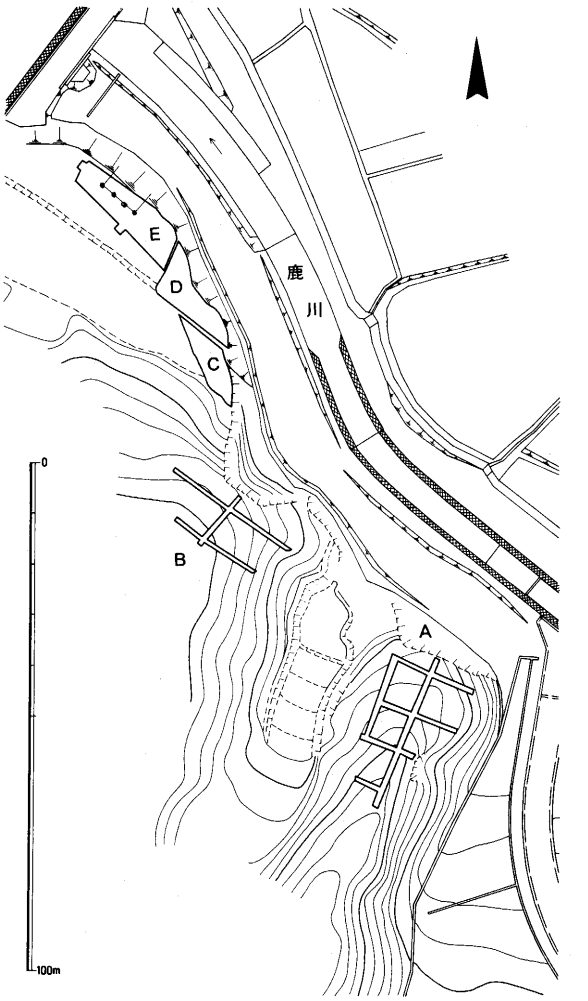
A区　表土を除去すると直ちに明黄褐色砂礫の地山となる。遺構は検出していない。瓦片２点が表土から出土した。

B区　A区と同様に表土下直ちに明黄褐色砂礫の地山となる。遺構は検出していない。須恵器甕片１点が表土から出土した。

C区　盛土（黄灰褐色土）で１段高い畑地を造成している。盛土の下は地山で、この面から発掘区中央で２つの土坑を検出した。平瓦、土師器が出土している。発掘区北寄りで先の試掘調査による発掘区（二次調査Ｄ地区第１トレンチ）を確認した。

D区　切土によってＣ区から１段低い畑地を造成しているため、地山はほぼ平坦面をなしている。顕著な遺構は認められない。

E区　耕作土の下に畑地を構築する際の盛土（黄灰褐色土）が主として東寄りにみられ、磁器がこれに混入していた。この下に包含層の黄灰色砂土が地山の上に堆積している。地山は若干東に向かって下がっているものの、ほぼＥ区全体にわたって

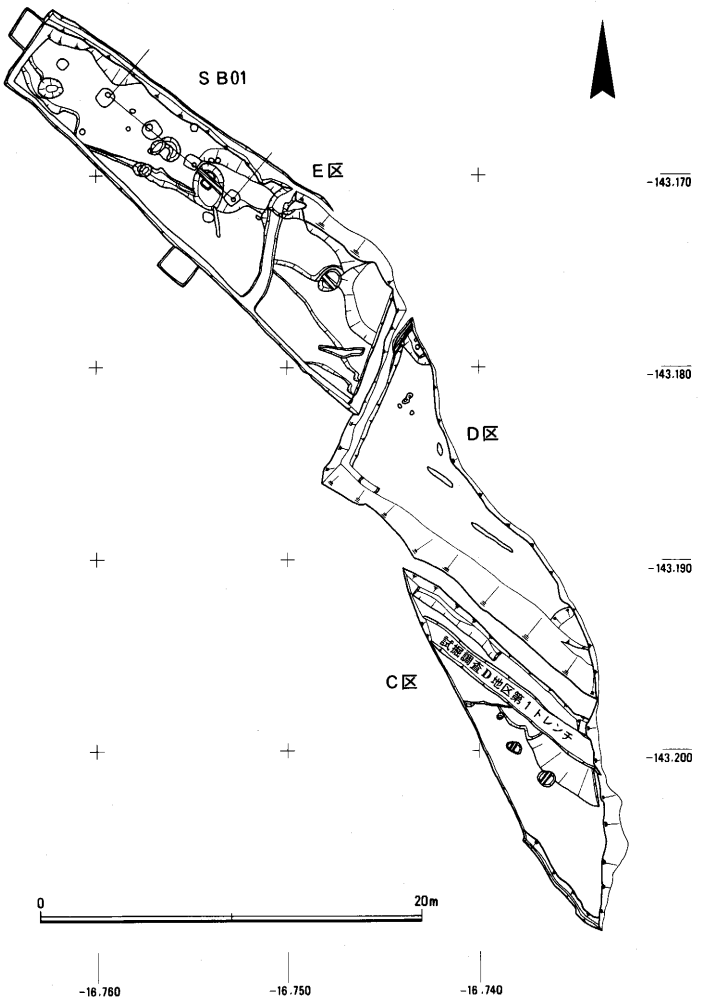


発掘区位置図　1／1500

平坦面をなしている。この北寄りで3間（8.4m）分の柱穴列を検出した。柱間は2.8m等間である。柱筋は国土方眼方位に対して北で西に約50°振れる。柱穴列西側からは柱穴を検出できず、東側は畑地造成による削世を受けていた。しかし、これを柵列と考えるのは地理的に困難であると思われ、掘立柱建物（ＳＢ01）を想定するのが妥当であると考えられる。そうした場合、柱穴列を梁行と考えるには地形的に無理があり、桁行と考えるべきであろう。建物遺構の大部分は畑地造成によって破壊されたものと推察される。包含層から出土した遺物から見て、ＳＢ01の時期は奈良時代よりも下がるものではない。

出土遺物には、瓦塼類、須恵器、土師器、磁器があり、総量は整理箱15箱である。瓦塼類には軒丸瓦片（型種不明）1点が含まれる。平瓦の中には、格子目タタキのものと縄目タタキのものがあり、前者は桶巻造りで溶着品を含む。須恵器、土師器は奈良時代に属するものである。磁器は近世の染付椀である。

発掘調査の成果としては、Ｅ区において掘立柱建物1棟を検出し得たことが挙げられる。Ｅ区は南西からの谷の開口部にあたり、その前面には鹿川が流れる。この谷の西尾根南斜面には瓦窯跡が確認されており、今回検出した建物はこの瓦窯跡との関連で把えることができよう。さらに、谷奥部からの堆積層に多くの遺物を包含していることから、そこに瓦窯跡以外の遺構の存在も考えられる。　　（鐘方正樹）



遺構平面図（Ｃ・Ｄ・Ｅ区）1／400

註）奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報　1978年度』1979年

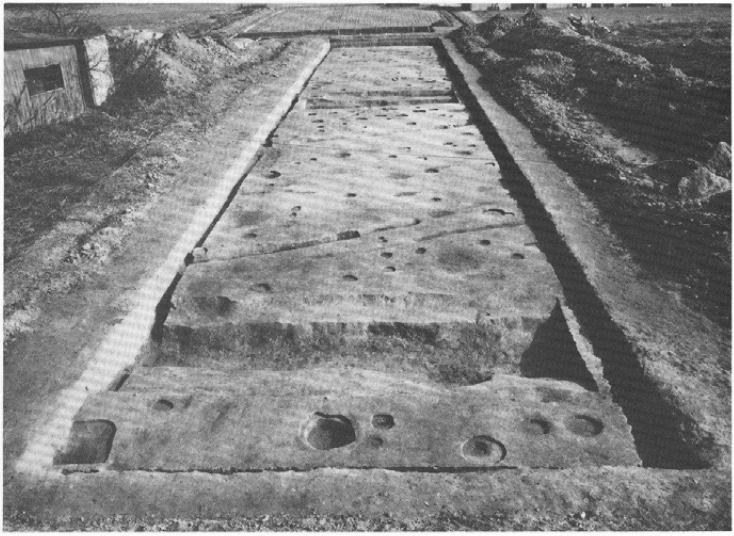
2. 平城京内のその他の調査

平城京内における建設工事、土木工事に先立ち、その規模の小さいもの、及び周辺の調査例によって遺構の存在する可能性の低いもの等について、奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所と合同で、緊急の発掘調査を実施した。本年度実施したのは、以下の23件である。遺構が検出されなかったもの、佐保川、秋篠川等の旧流路であったものなどが多いが、86年度—19では、奈良時代に削平されたと考えられる古墳の一部を検出した。墳丘部はほとんど削平され、発掘区西端で、その周濠の一部（幅３ｍ以上、深さ約１ｍ）を確認したにすぎないが、その形状から前方後円墳の後円部か、円墳の周濠とみられる。埋土からは、６世紀前半の形象埴輪、円筒埴輪が奈良時代の土器類とともに出土した。周辺には、これまでの調査で、円筒埴輪が出土した地点もあり、北西約300mに位置する開化天皇陵古墳（前方後円墳、全長約100m）を中心に数基の古墳が存在したものと推定され、従来知られなかった市街地の古墳時代の様相について新知見を加えることになった。

（森下恵介・今尾文昭）

番　号	遺　跡　名	所　在　地	契　期	調査日	概　　要	届　出　名
86年度—１	右京一条二坊七坪	二条町１丁目53-1	店舗、事務所建設	６月24日	旧流路（秋篠川？）	福井孝治・敏子
86年度—２	元興寺旧境内	西寺林町17	共同住宅建設	７月３日	中世土坑を検出	島　田　武　司
86年度—３	東六坊大路	餅飯殿町１	店舗建設	７月15日	中世土坑と奈良時代旧流路	㈱岩田呉服店
86年度—４	薬師寺旧境内	西の京町	住宅建設	７月30日	北門推定地、遺構は検出されず。	上　田　庄　治
86年度—５	左京九条二坊八・九坪	西九条町３丁目2-5	事務所建設	８月21日	柱穴１検出	増　田　潤　次
86年度—６	右京八条二坊一・二坪	七条東町168-3	共同住宅建設	９月19日	旧流路（秋篠川？）	㈱栗実住宅
86年度—７	右京八条二坊一坪	七条東町168-1	倉庫・店舗建設	９月24日	旧流路（秋篠川？）	㈱柿の葉ずし
86年度—８	左京二条六坊八・九坪	法蓮南２丁目	事務所建設	10月13日	旧流路	㈱モービル石油
86年度—９	右京三条二坊十一七坪	尼辻北町294	共同住宅建設	10月16日	遺構は検出されず。	東　中　正　義
86年度—10	興福寺旧境内	東向中町・中筋町	駅舎増築	10月22日	中世・近世の溝、土坑	㈱近畿日本鉄道
86年度—11	左京三条三坊十三坪	芝辻町４丁目１６	共同住宅建設	10月26日	旧流路（佐保川？）	㈱三幸開発
86年度—12	西大寺旧境内	西大寺芝町2522-4.5	分譲住宅	11月６日	遺構は検出されず。	㈱幸信土地開発
86年度—13	元興寺旧境内	高畑町1113-3	旅館増築	11月12日	遺構は検出されず。	㈱　飛　鳥　荘
86年度—14	左京五条五坊十五坪	西木辻町27 5・6	共同住宅建設	11月17日	遺構は検出されず。	㈱まると工業
86年度—15	左京七条四坊十六坪	東九条町1556 1	共同住宅建設	11月19日	遺構は検出されず。	㈱クボタハウス
86年度—16	右京三条一坊十一坪	三条大路４丁目512-1	店舗建設	12月１日	柱穴２、土坑、旧流路	㈱ナントホンダ販売
86年度—17	西大寺旧境内	西大寺国見町224の１	店舗建設	12月４日	遺構は検出されず。	㈱　近　鉄　観　光
86年度—18	左京四条六坊九坪	本子守町1 1	貸ビル建設	２月13日	遺構は検出されず。	井　上　信　子
86年度—19	左京四条六坊九坪	本子守町1 1	事務所建設	２月13日	中世土坑、井戸、古墳周濠	東邦生命相互会社
86年度—20	左京三条四坊一坪	芝辻町２丁目10-1・7	共同住宅建設	２月16日	旧流路（佐保川？）	田　村　俊　夫
86年度—21	左京三条五坊四坪	大宮町１丁目55-1	共同住宅建設	２月24日	溝１条検出	西　田　　昭
86年度—22	左京四条一坊六坪	四条大路２丁目51-1	共同住宅建設	２月26日	遺構は検出されず。	山　本　平　一
86年度—23	右京三条三坊五坪	宝来町94-1-95-1	共同住宅建設	３月２日	奈良時代井戸、柱穴１検出	阪　口　　宏

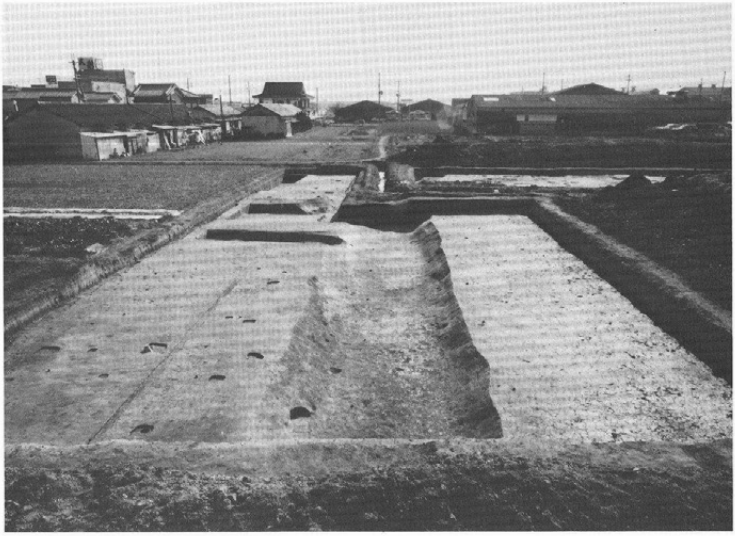
図　　版



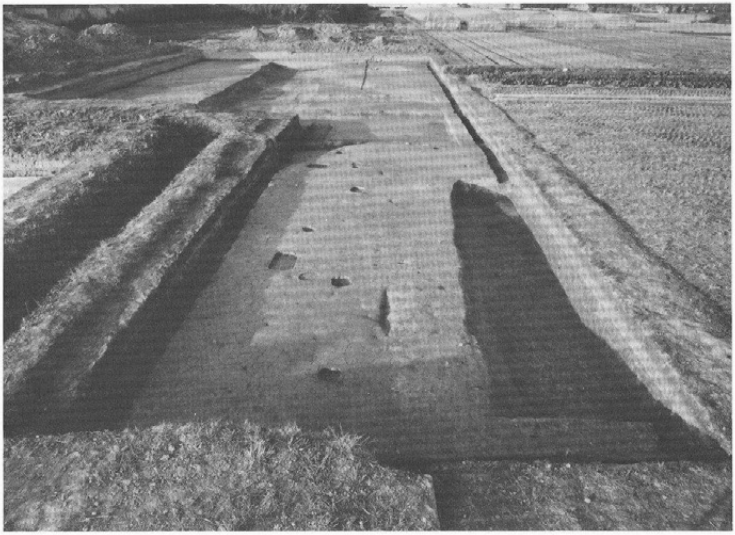
1．西発掘区全景（西から）

2．西発掘区全景（東から）

図版二　史跡平城京朱雀大路跡　第一一九次(2)

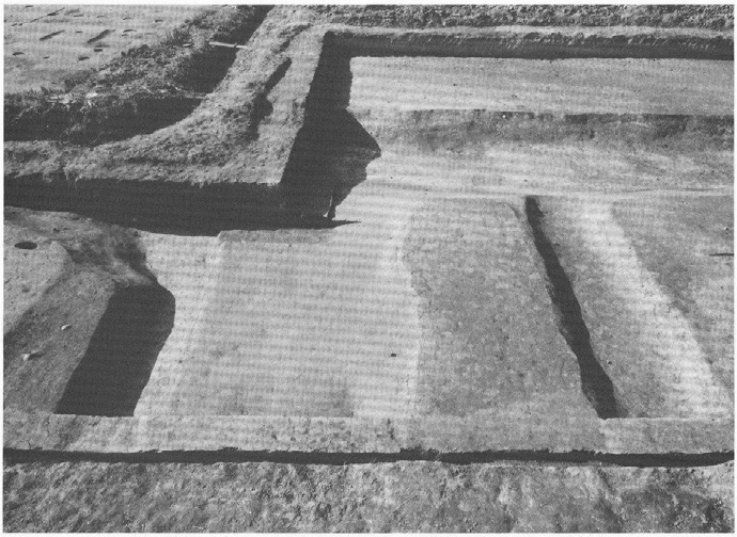


1．東発掘区全景（北から）

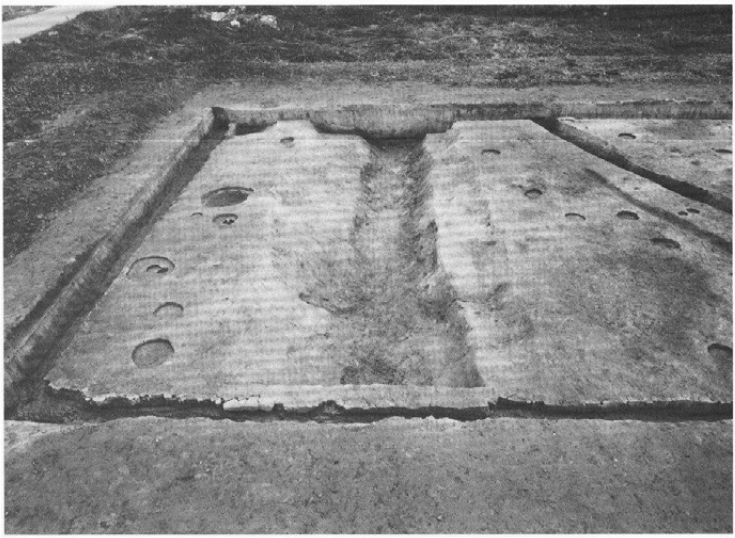


2．東発掘区全景（南から）

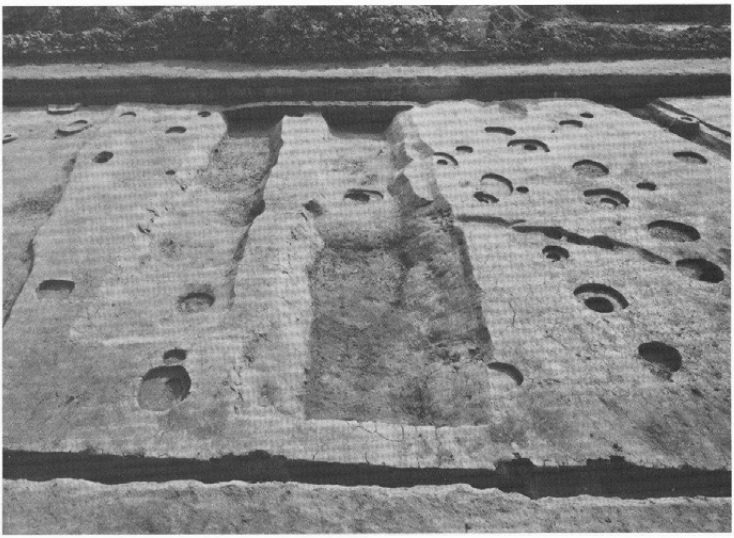
1．坪境小路（西から）



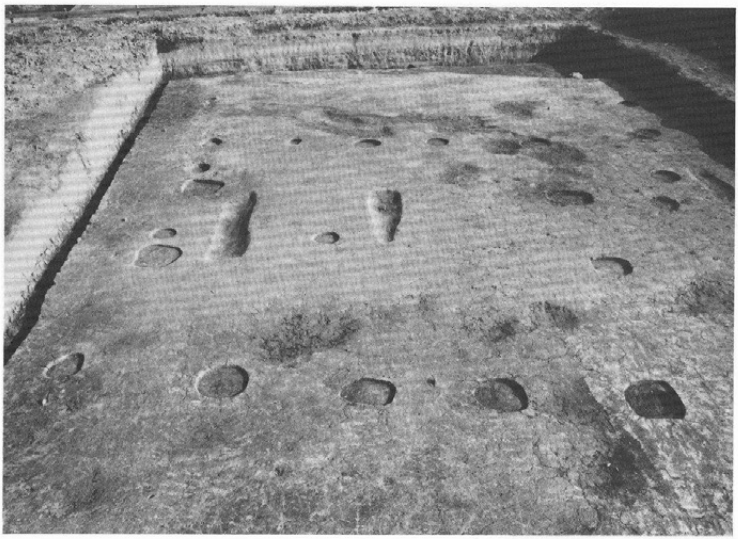
2．坪境小路（東から）



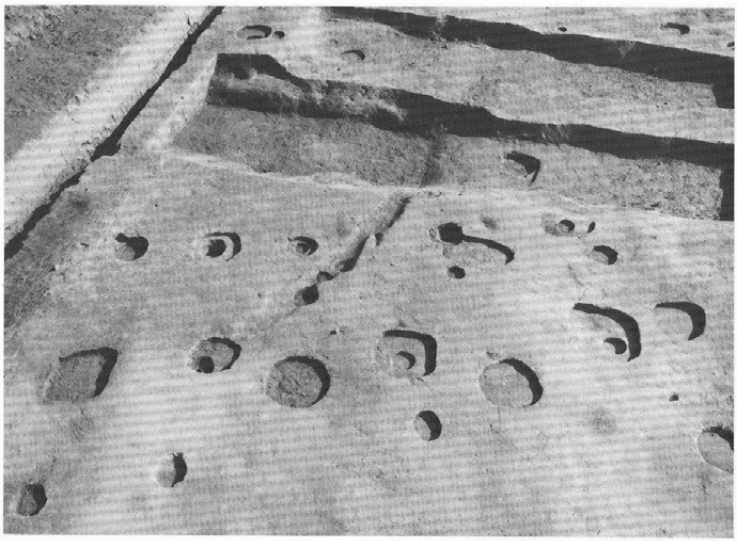
1．下つ道西側溝（南から）



2．下つ道東側溝（北から）



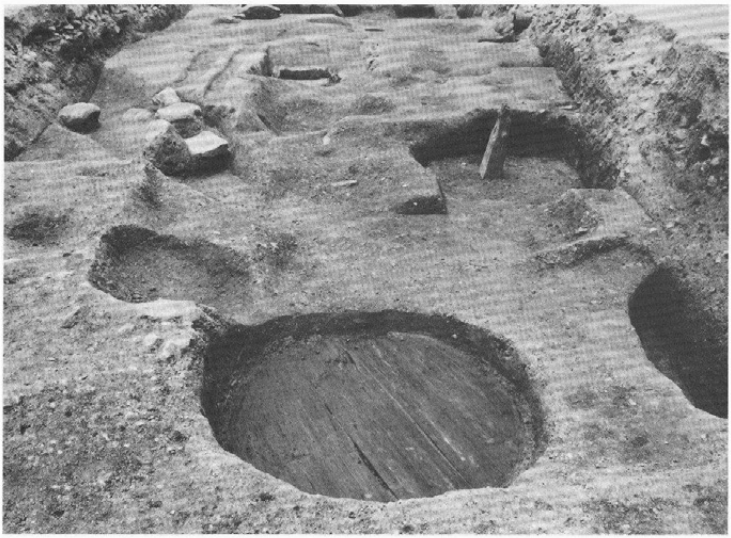
1．SB03（西から）



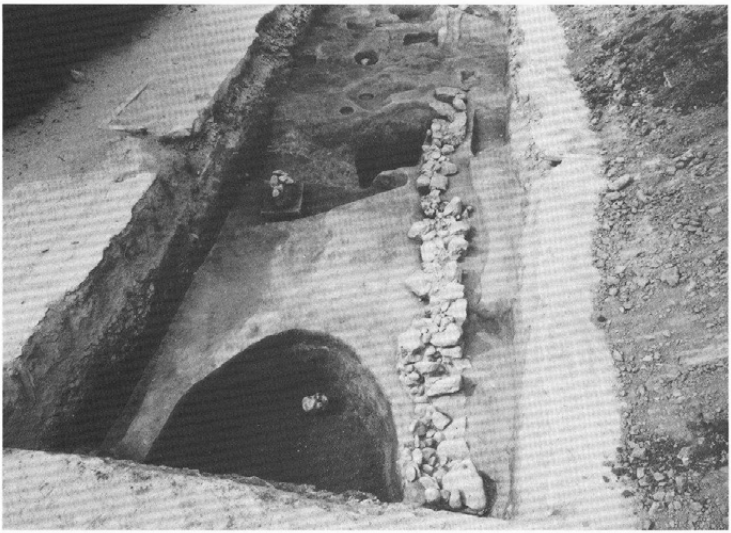
2．SB01・02（西から）

1.　発掘区全景（北から）

2.　発掘区全景（南から）



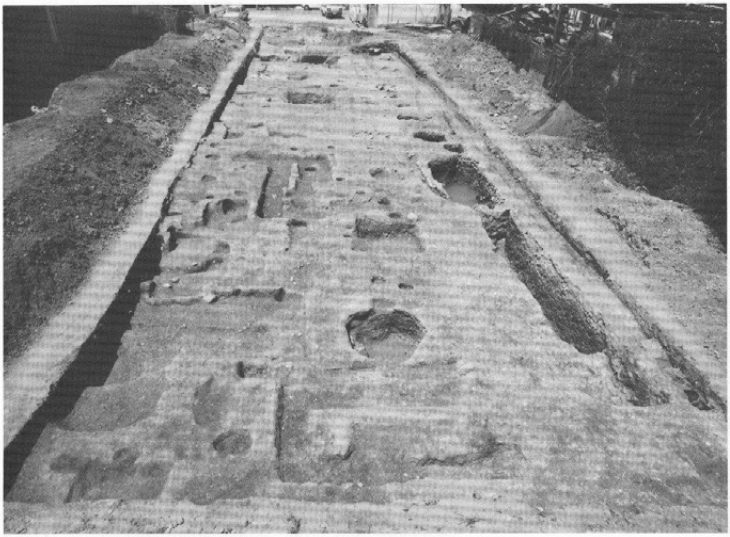
1. SK18（北から）



2. SE15・SF22（南から）

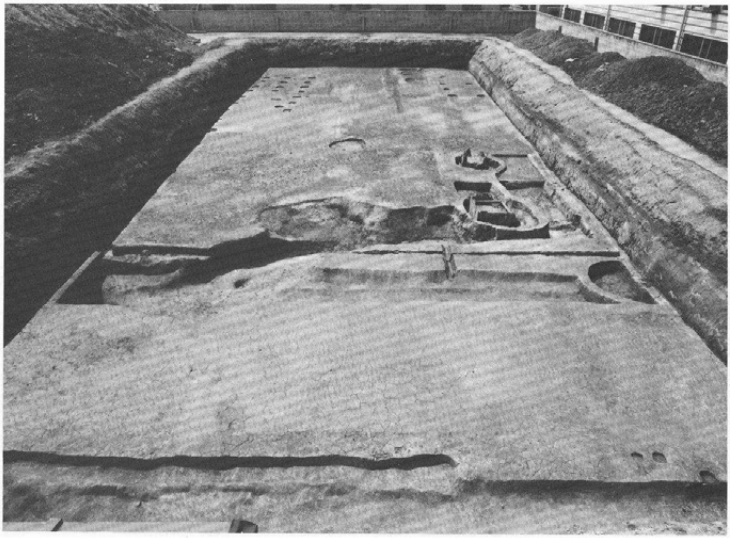
図版八　平城京左京（外京）五条七坊三坪　第一一五次

1.　発掘区全景（西から）

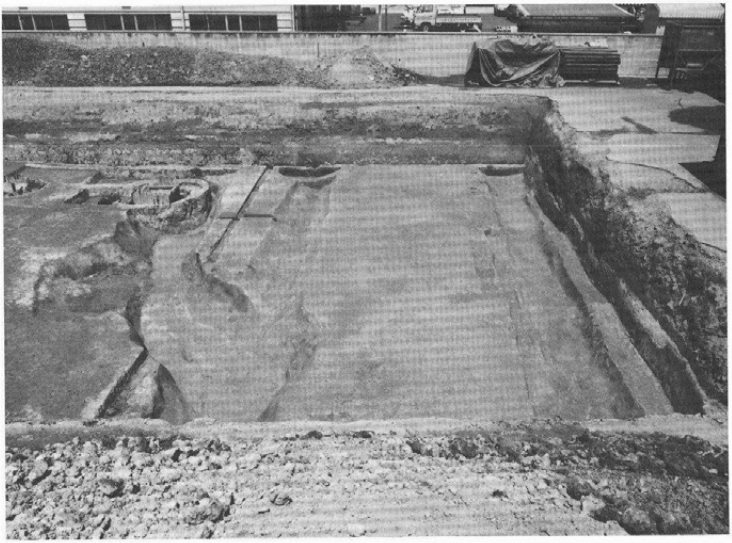


2.　発掘区全景（東から）

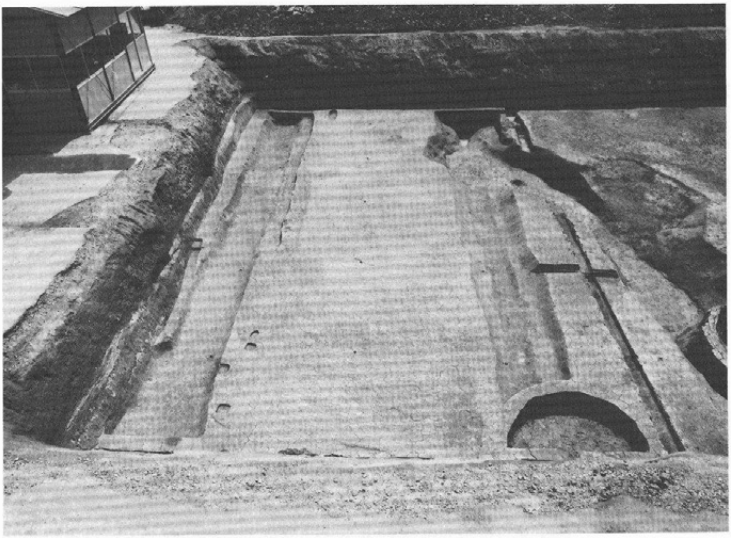
1.　発掘区全景（西から）



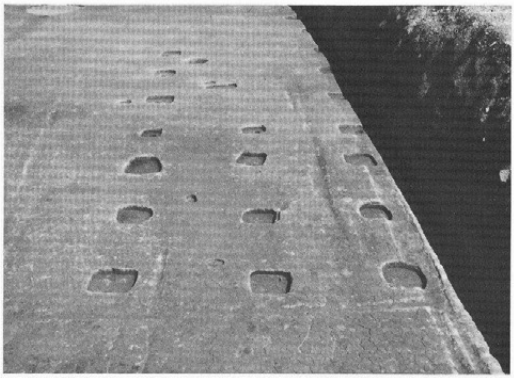
2.　発掘区全景（東から）



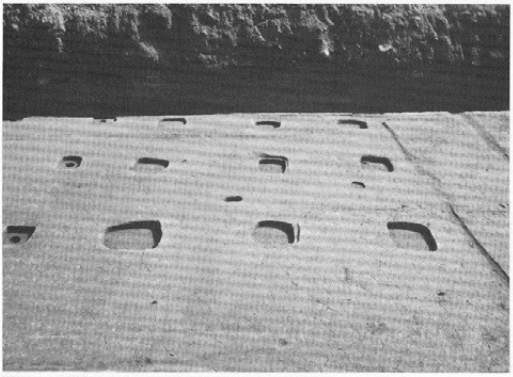
1.　SF01、SD02・03・04（南から）



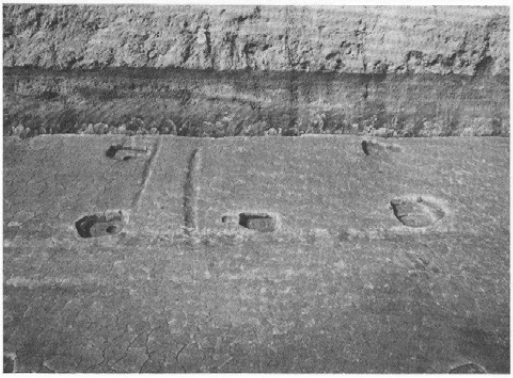
2.　SF01、SD02・03・04（北から）



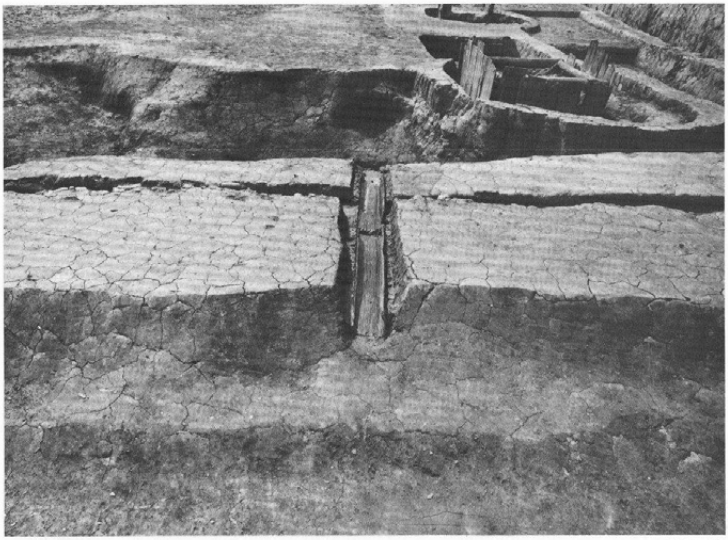
1. SB06・07（西から）



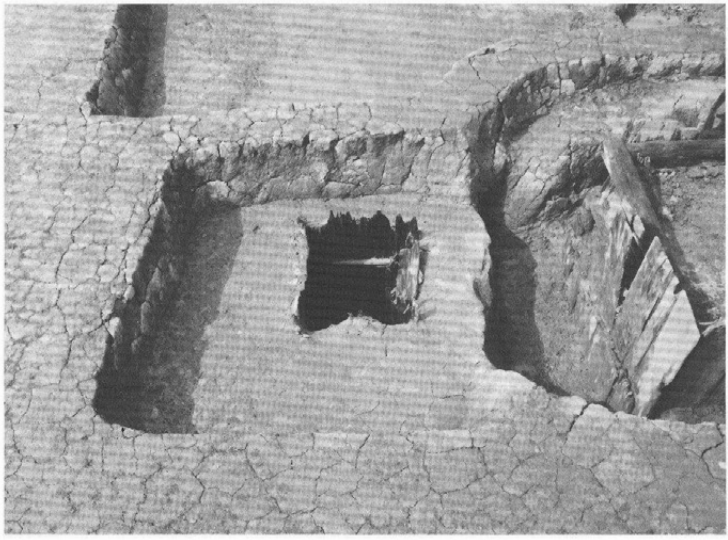
2. SB07（北から）



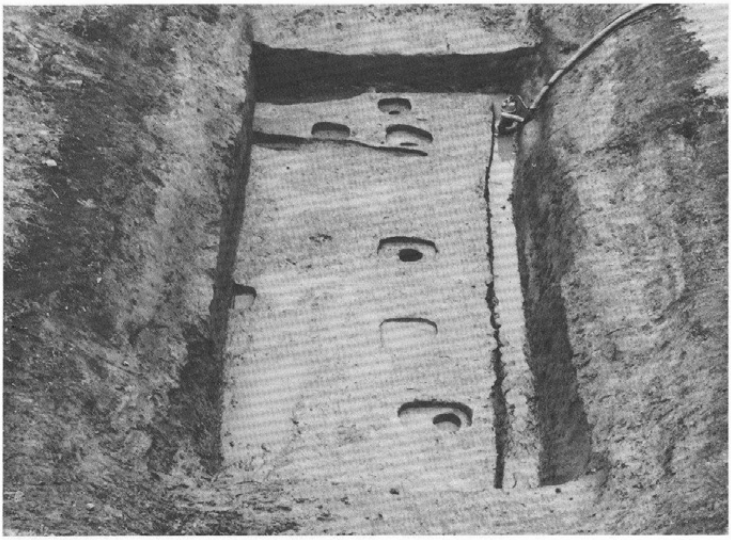
3. SB08（南から）



1．SX05（東から）



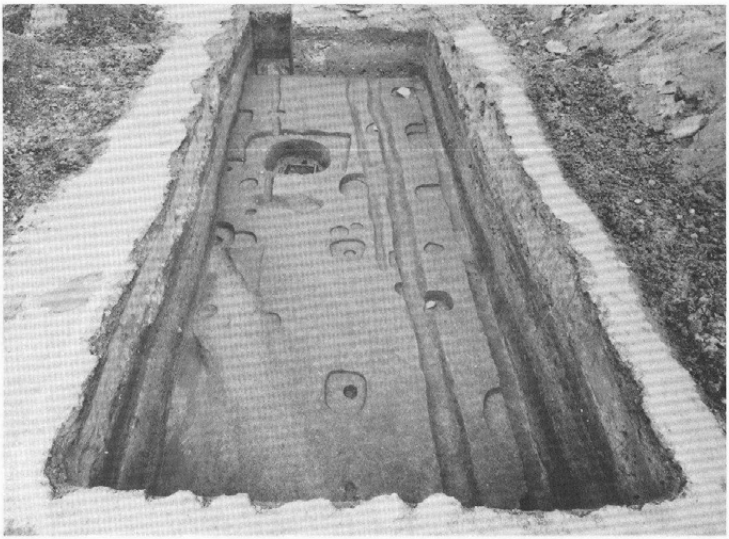
2．SE10（南から）



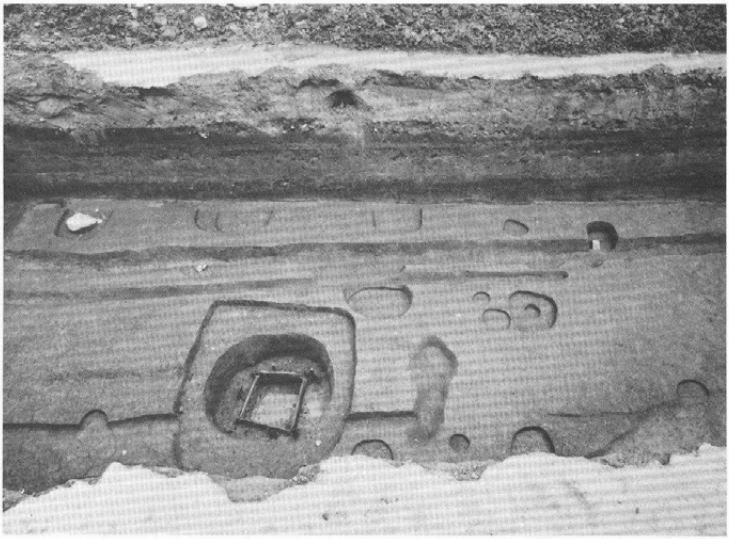
1．北発掘区全景（東から）

2．南発掘区全景（東から）

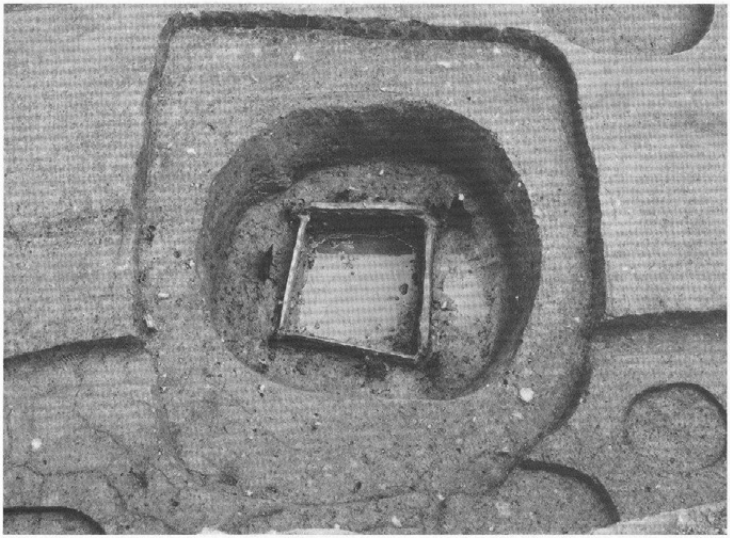
図版一四　平城京左京三条四坊一坪　第一一三次(1)



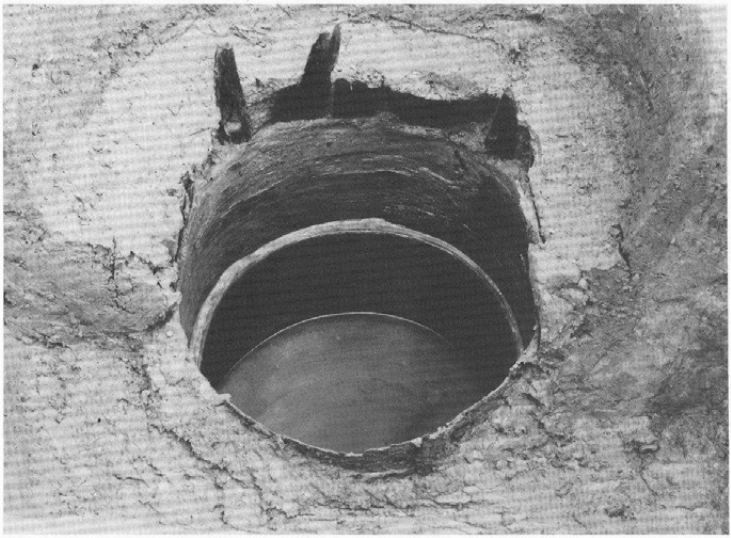
1．発掘区全景（西から）



2．発掘区全景（北から）

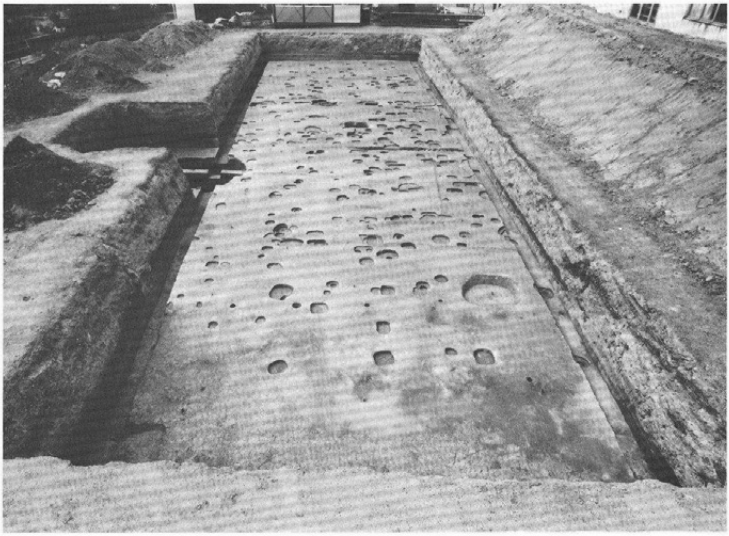


1．SE05（北から）



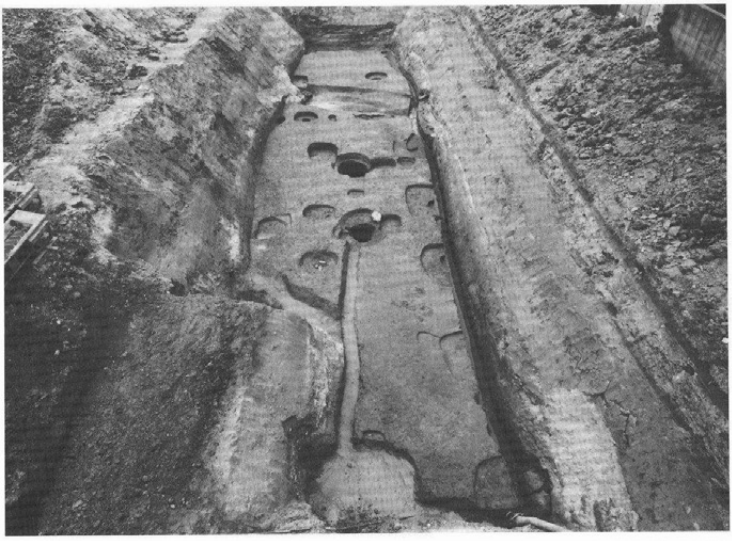
2．SE05曲物（南から）

1．調査地全景（北西から）



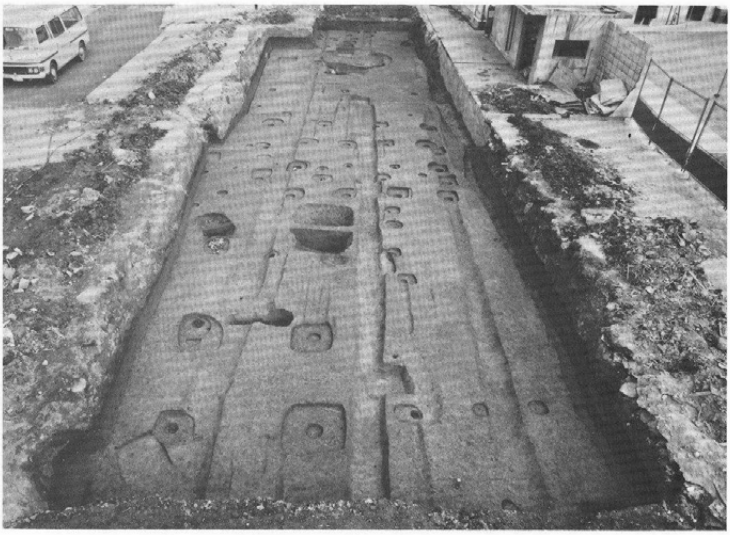
2．発掘区全景（東から）

1．発掘区全景（西から）



2．発掘区全景（東から）

図版一八　平城京左京四条四坊七坪　第一二一次(1)

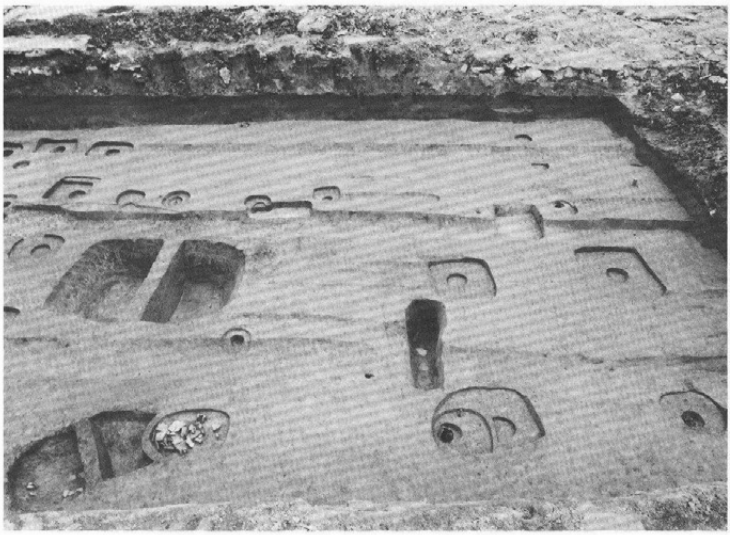


1.　発掘区全景（西から）

2.　発掘区全景（北から）

1.　SA04（南から）

2.　SB09・10、SK11（北から）



1.　SK01、SB05・06（北から）

2.　SB07・08（南から）

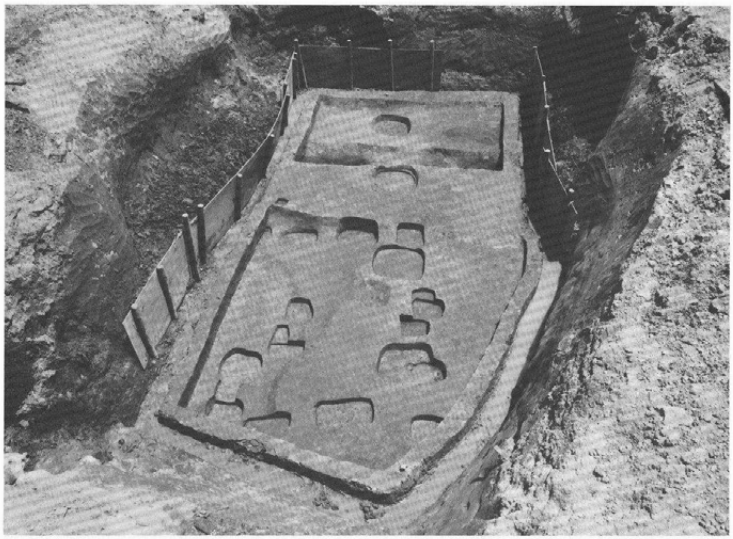
1．西発掘区全景（南から）

2．東発掘区全景（南から）

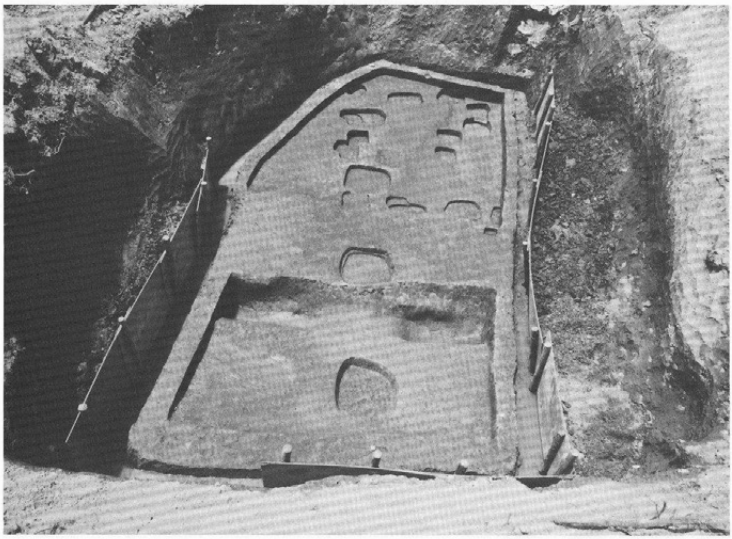
1．発掘区全景（南から）

2．発掘区全景（北から）

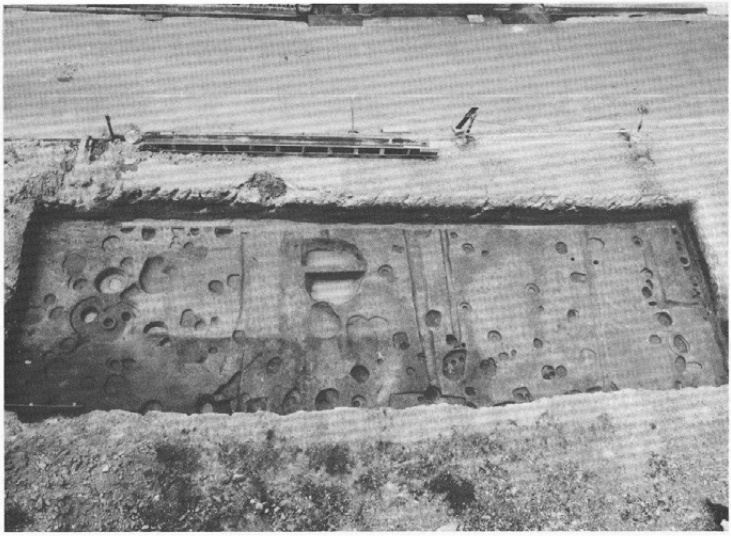
図版二三　平城京左京六条二坊十坪　第一一一次



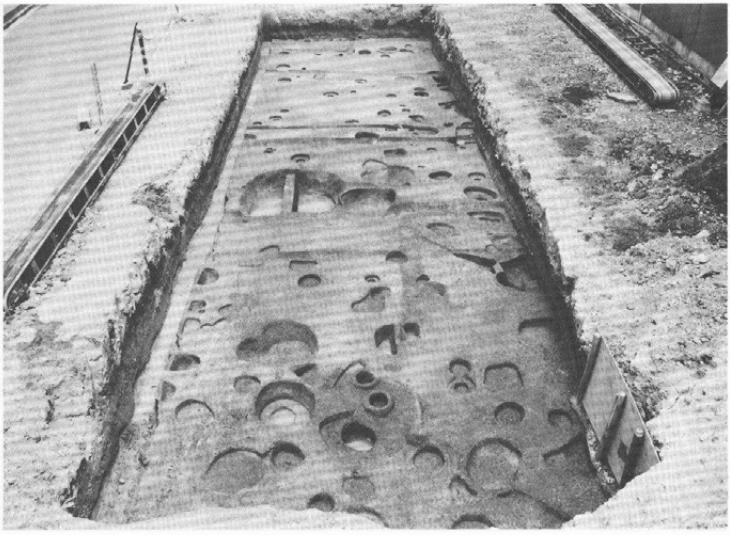
1.　発掘区全景（西から）



2.　発掘区全景（東から）

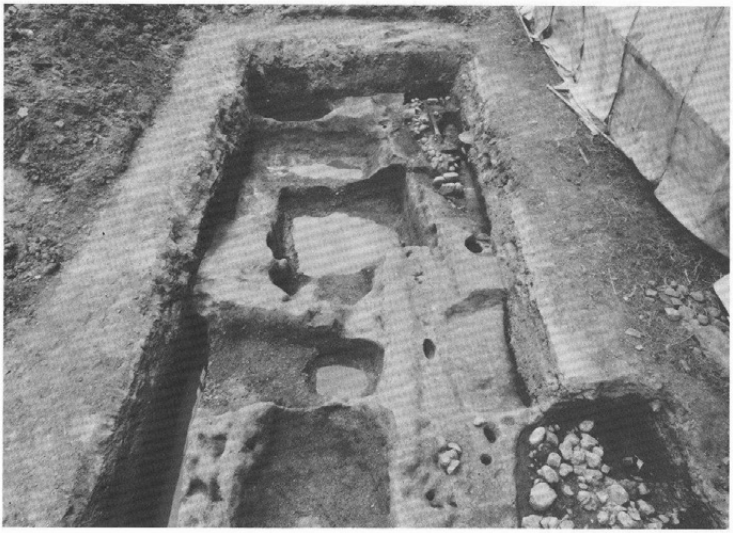


1.　発掘区全景（東から）

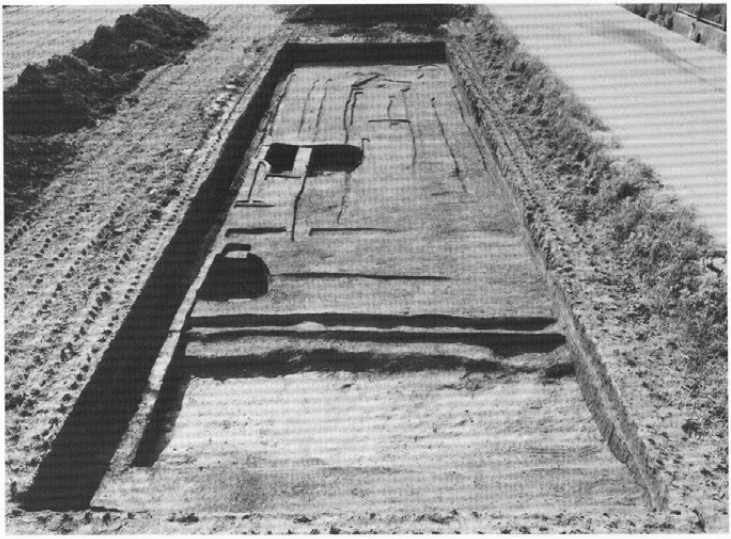


2.　発掘区全景（南から）

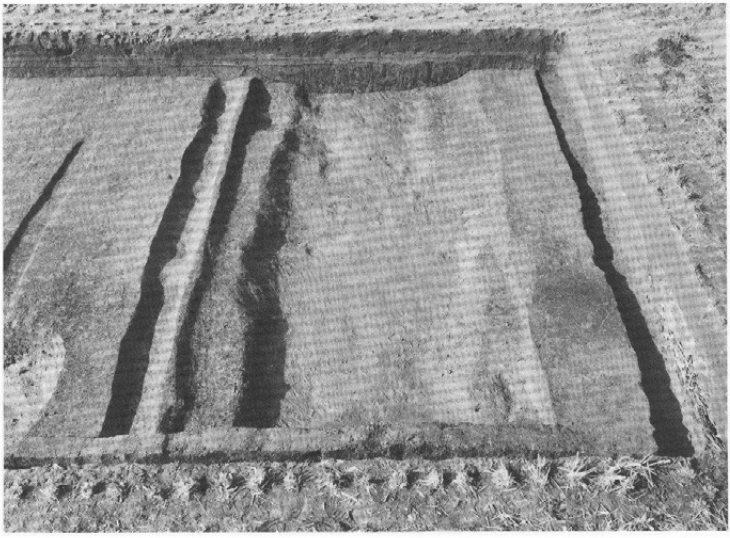
1．調査地全景（西から）



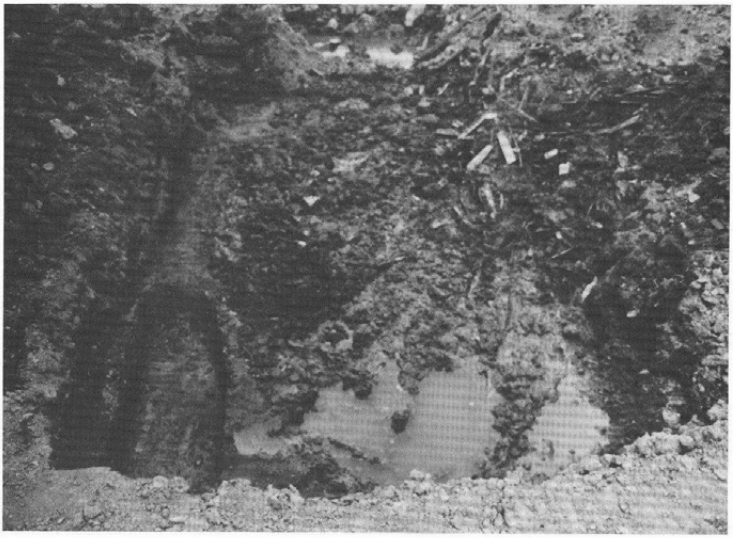
2．発掘区全景（東から）



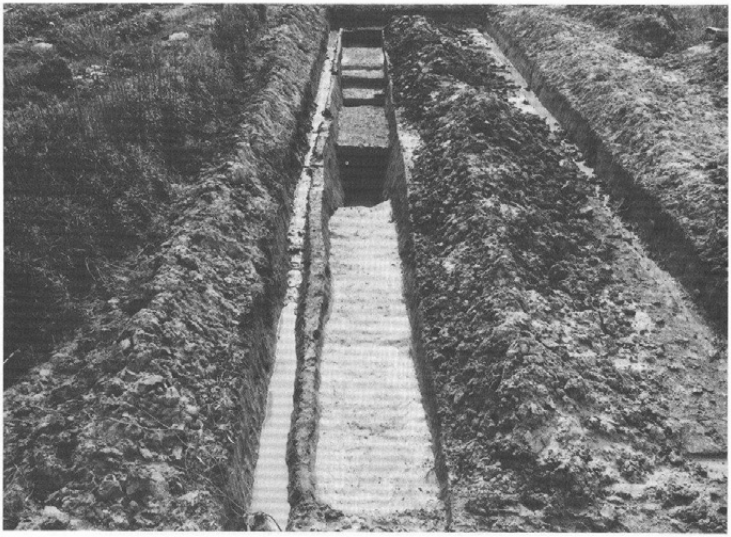
1.　発掘区全景（北から）



2.　SD01、SD02（東から）

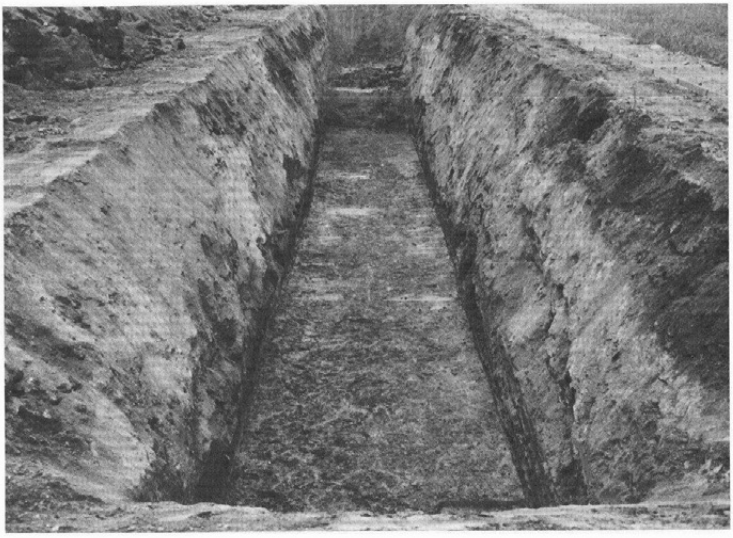


1．第108次 発掘区全景

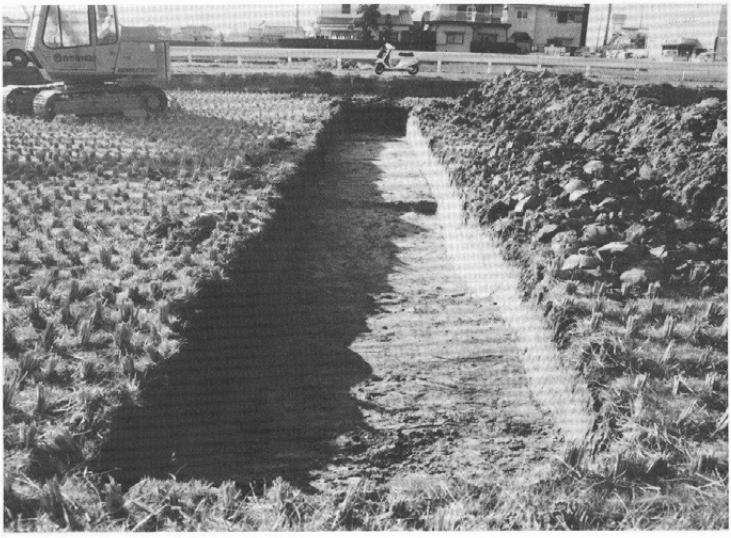


2．第112次 発掘区全景

図版二八　平城京左京七条一坊九坪　第一二三次・平城京朱雀大路　第一二四次

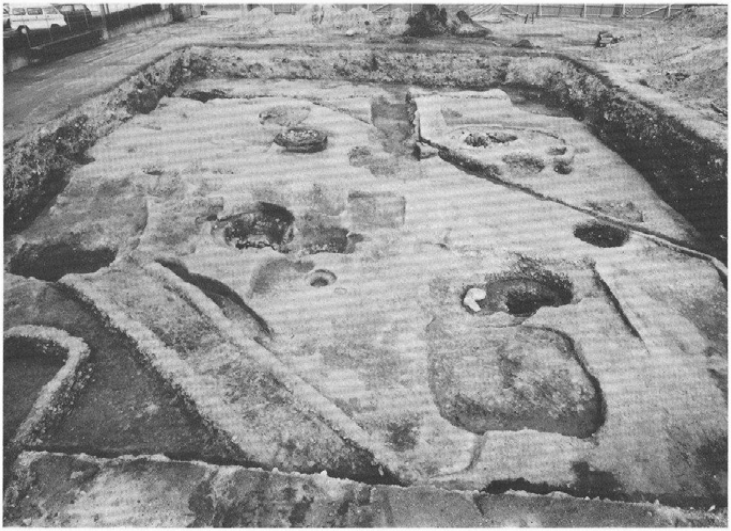


1．第123次 発掘区全景

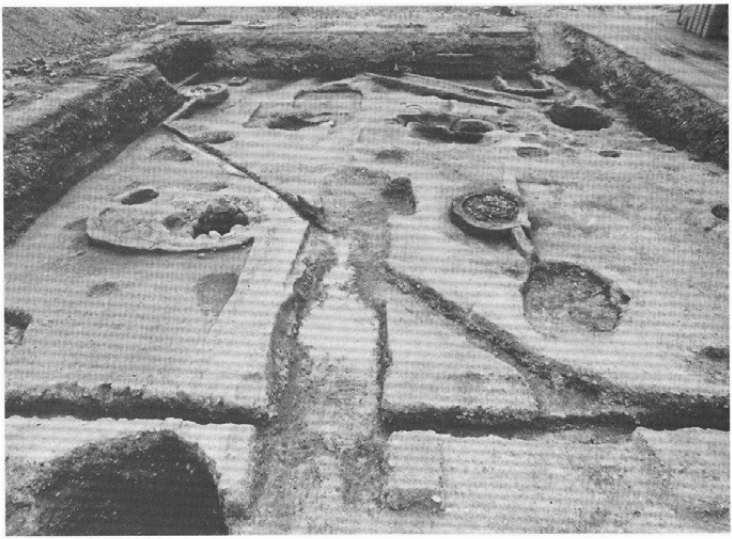


2．第124次 発掘区全景

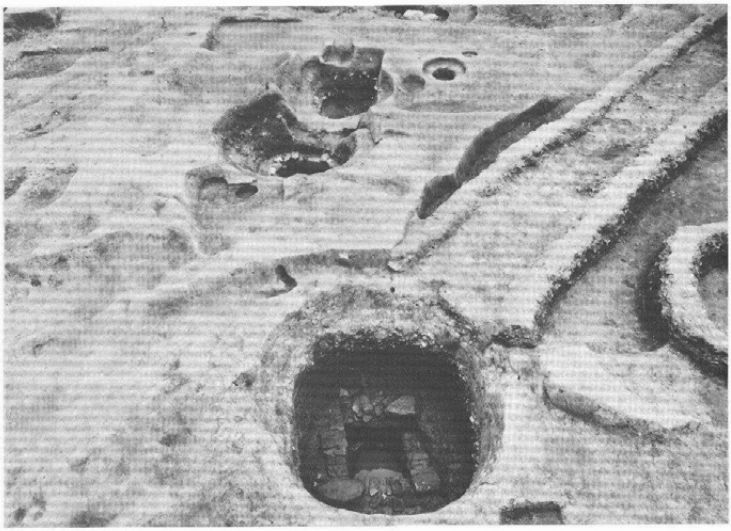
1.　発掘区全景（南から）



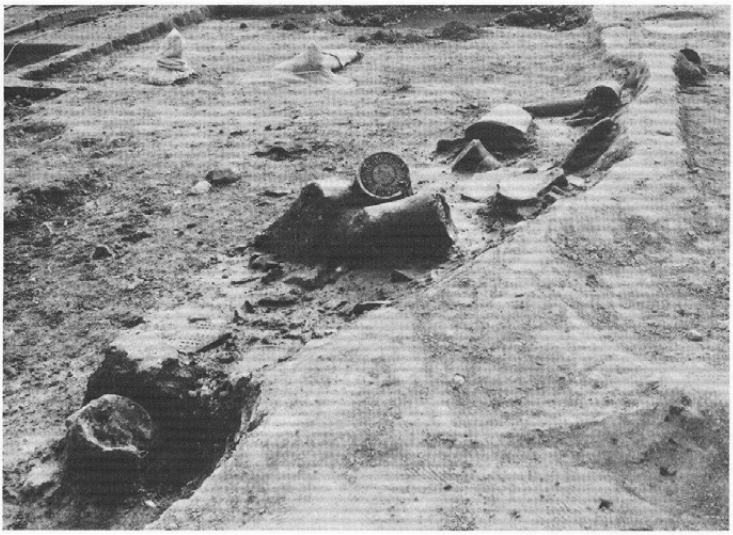
2.　発掘区全景（西から）



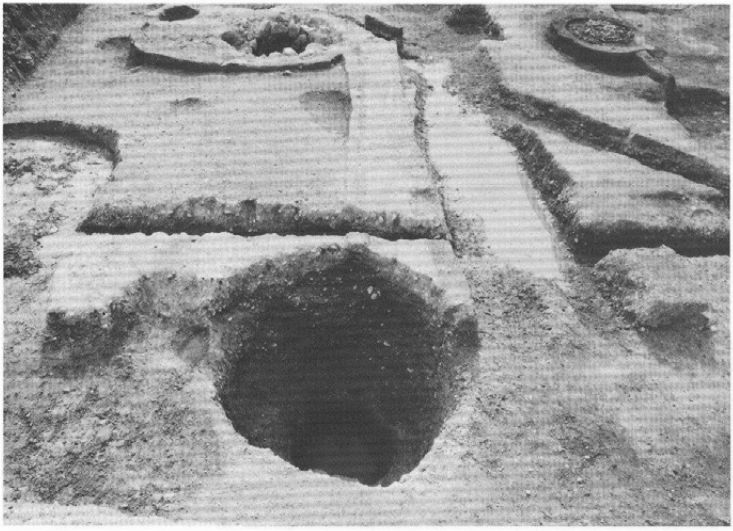
1．発掘区全景（東から）



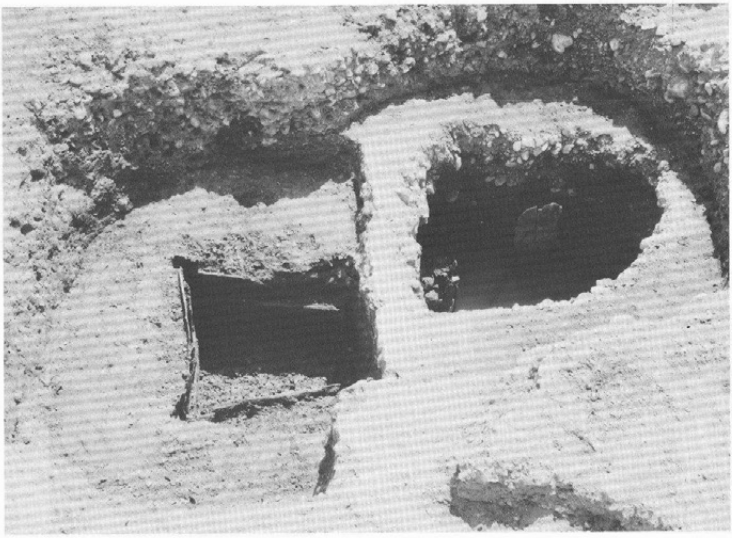
1．SK01～05、SE14、SD15（北から）



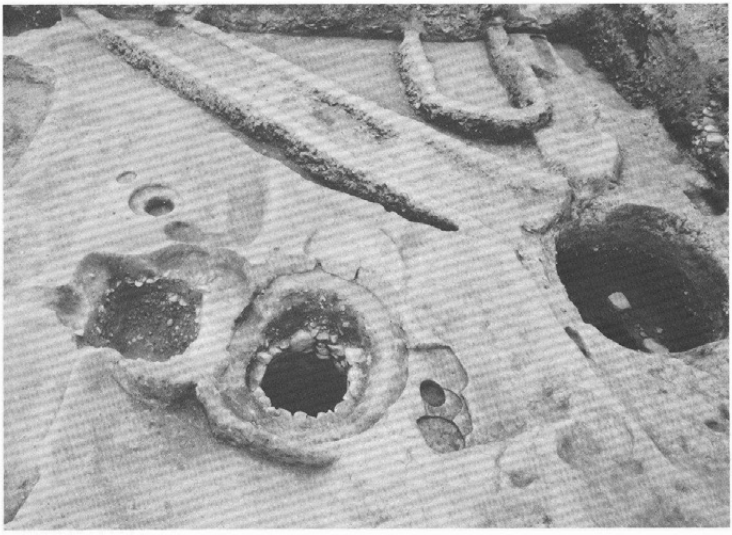
1.　SE06軒瓦出土状態（東から）



2.　SE08、SD19・24（東から）



1．SE10・11（西から）

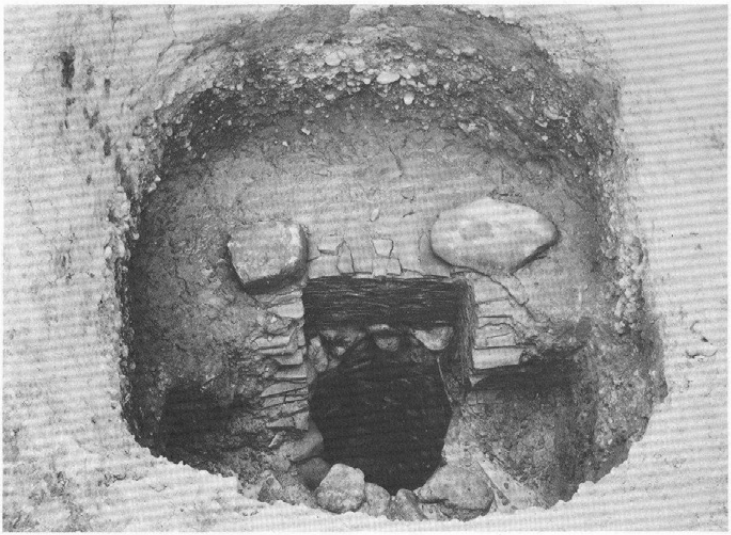


2．SK09・12・20、SE13（東から）

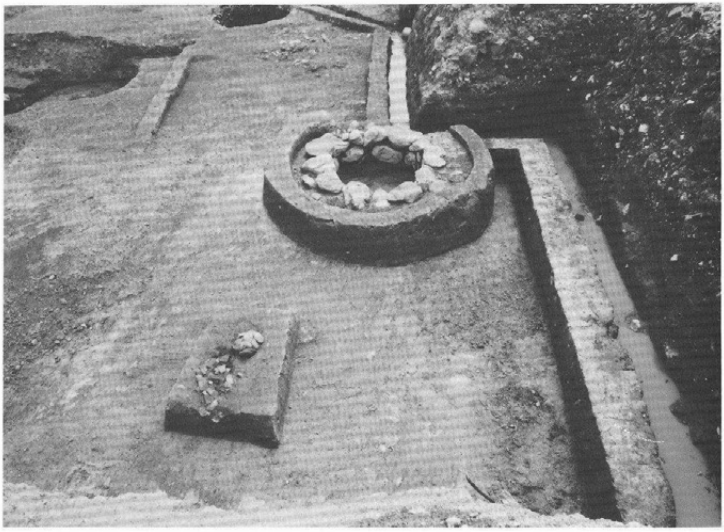
1.　SE13埋土上層（北から）

1.　SE13（東から）

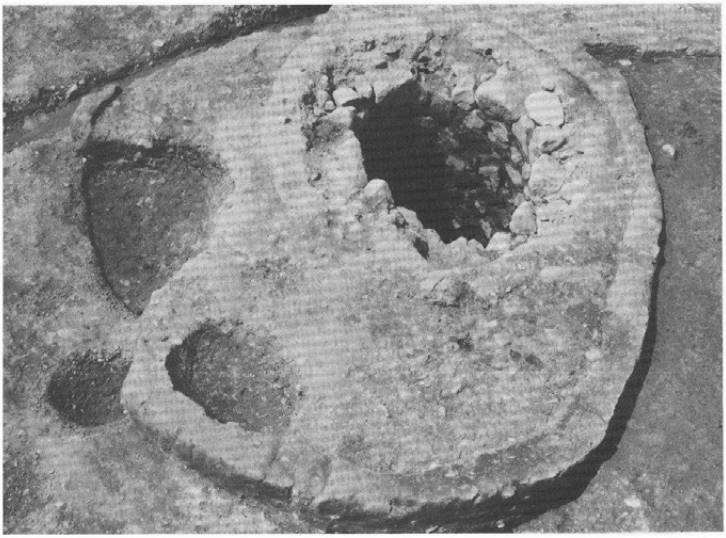
1.　SE14上段（南から）



2.　SE14下段（南から）



1.　SK07、SX21（西から）



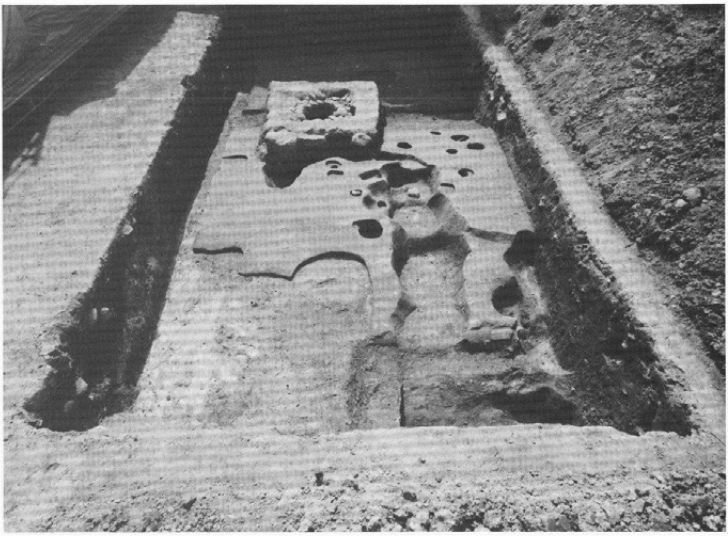
2.　SE22（南から）

1.　SK07出土土器

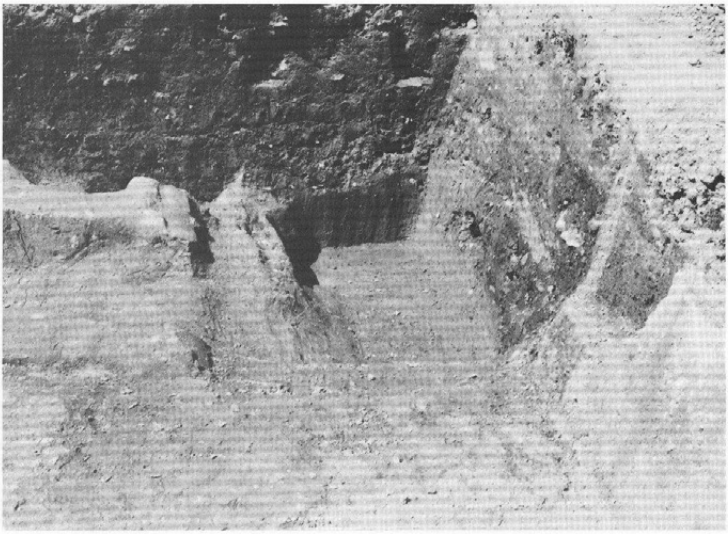
2.　SK01～05・09出土土器窯体片

1. SE08出土土器

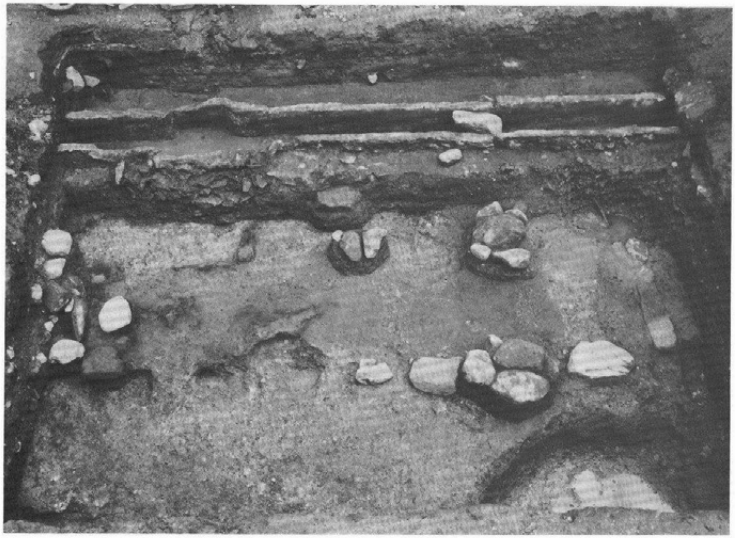
2. SE13出土土器



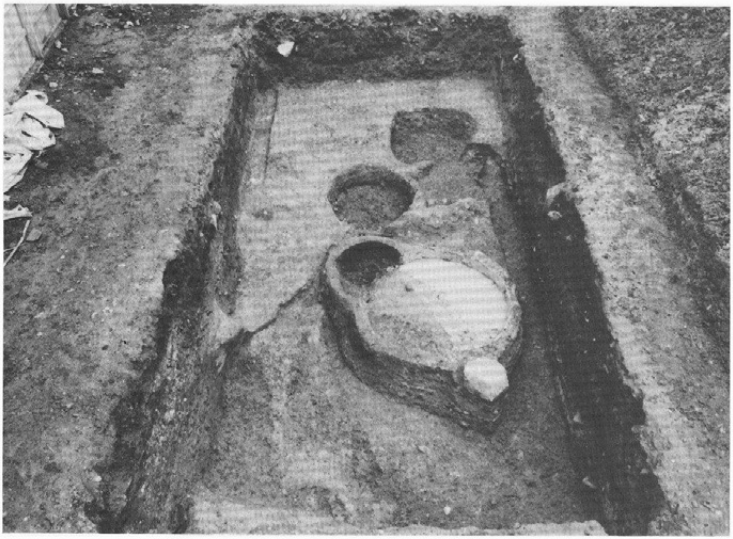
1．発掘区全景（東から）



2．SD02（南から）

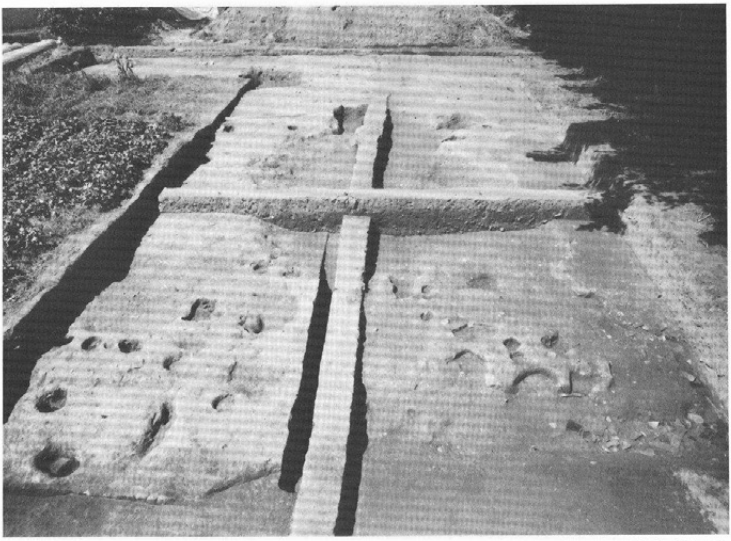


1.　元興寺旧境内８次（西から）

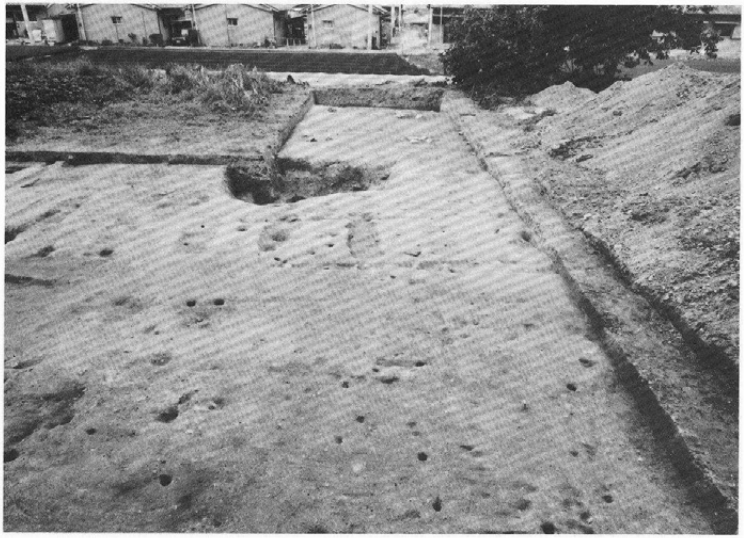


1.　元興寺旧境内９次（西から）

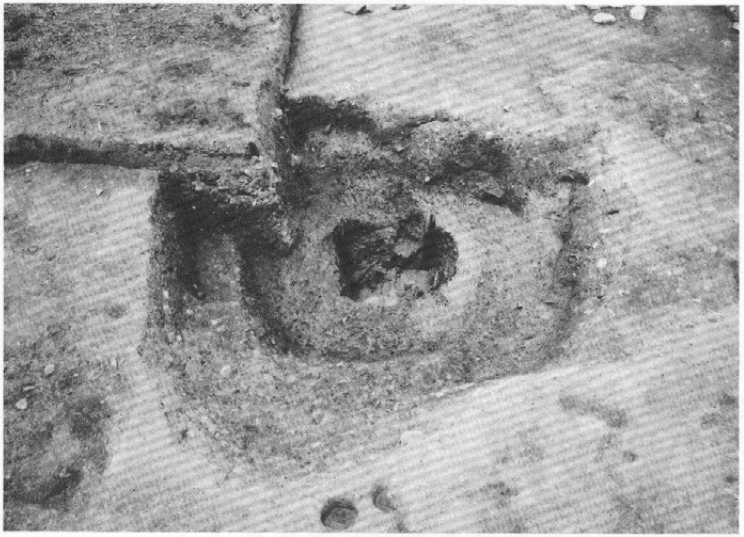
1.　発掘区全景（北から）



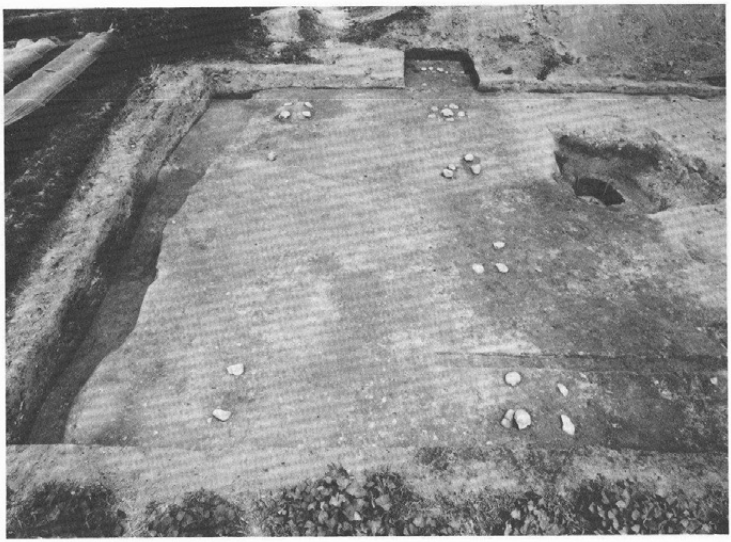
2.　発掘区全景（南から）



1.　発掘区全景（東から）

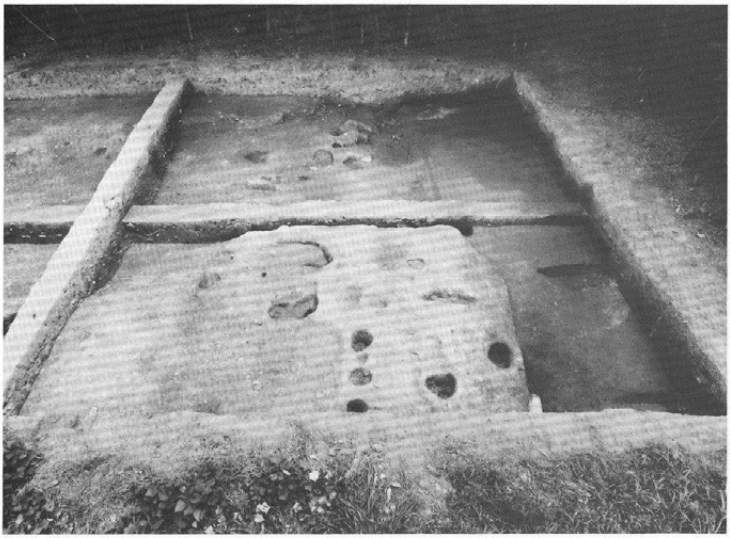


2.　SE03（東から）

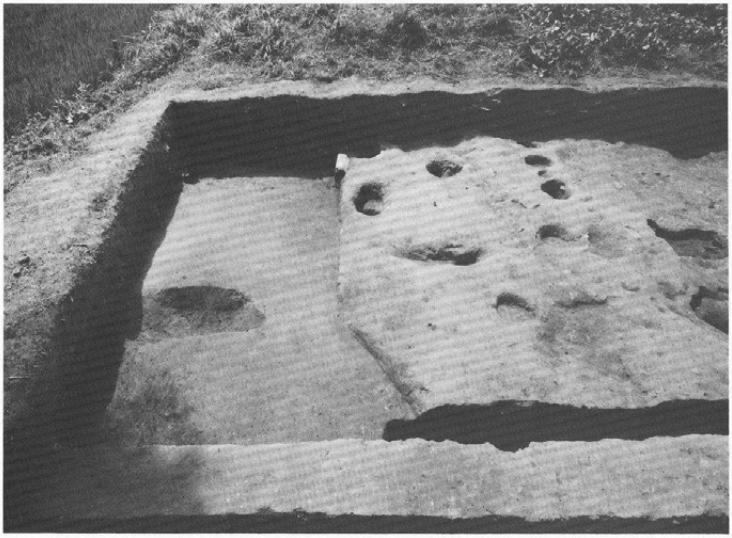


1．礎石建物SB02（南から）

2．礎石建物SB02（北から）

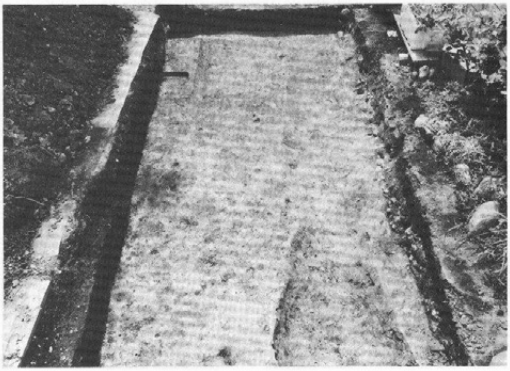


1.　発掘区南端部・SD01（西から）

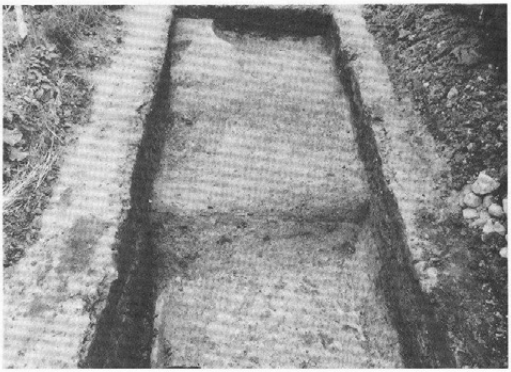


2.　発掘区南西部（東から）

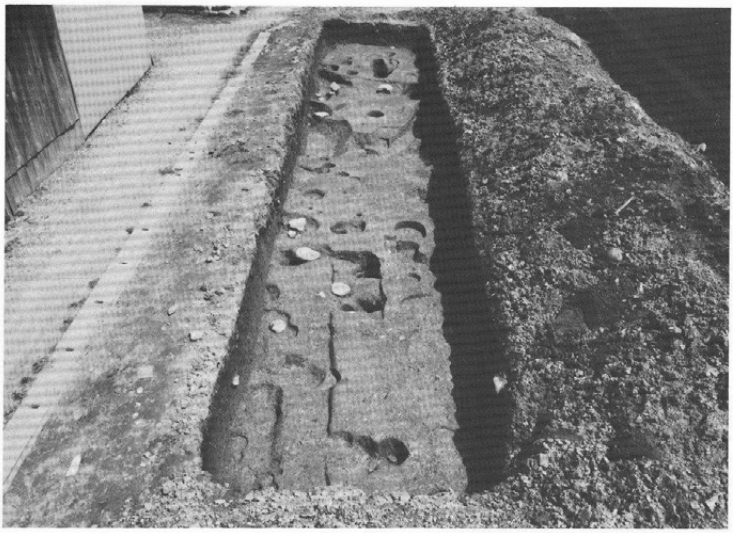
1.　第25次発掘区全景（西から）



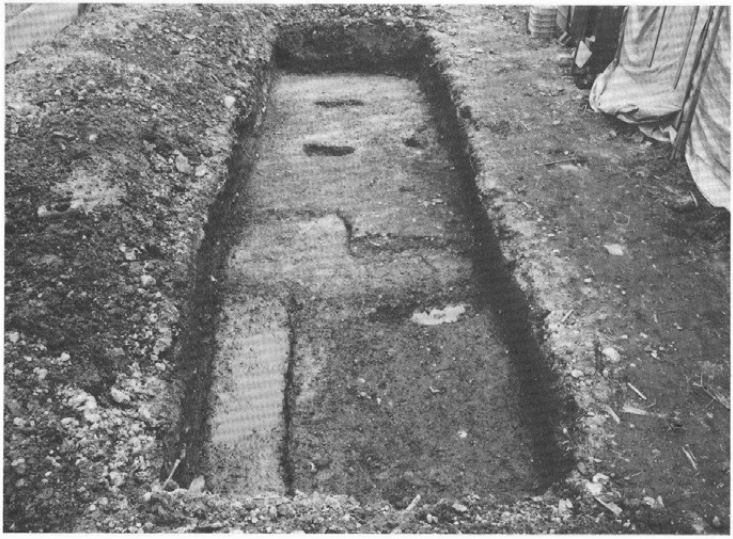
2.　第26次発掘区全景（東から）



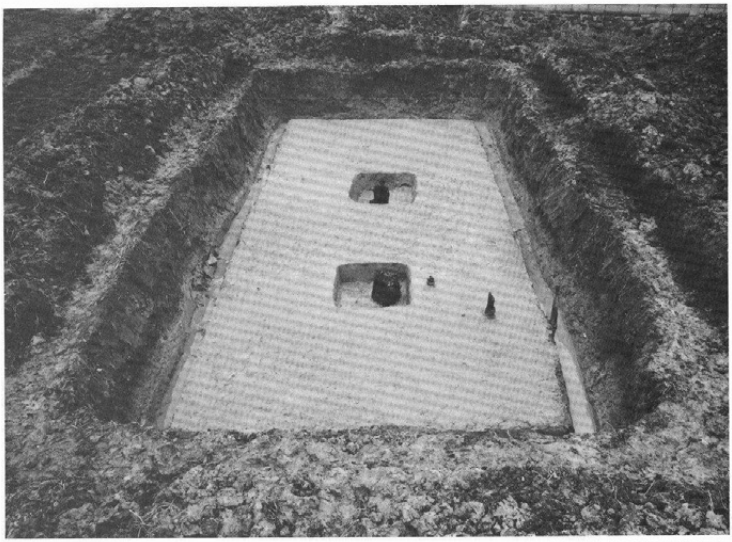
3.　第27次発掘区全景（東から）



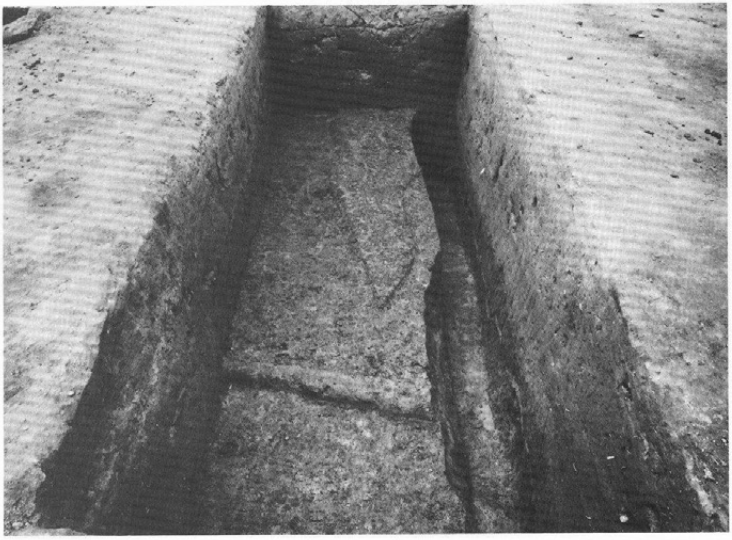
1.　第７次発掘区全景（南から）



2.　第８次発掘区全景（北から）

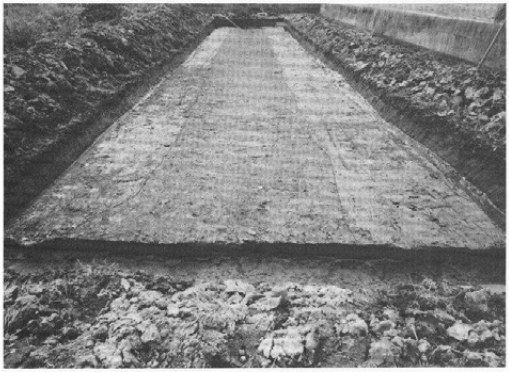


1.　第２次発掘区全景（南から）

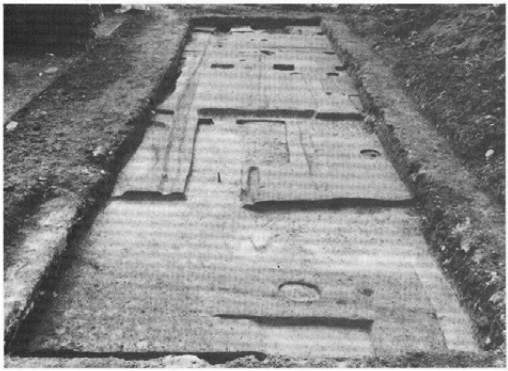


2.　第１次発掘区全景（南から）

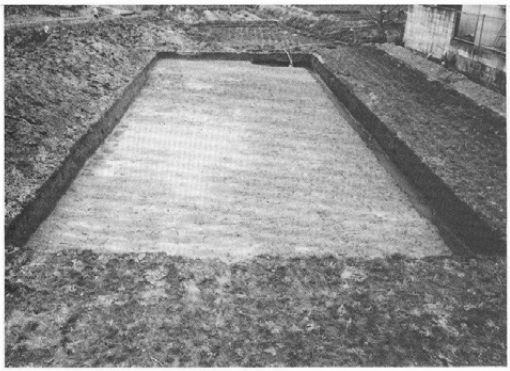
図版四七　西大寺旧境内　第一次・新薬師寺旧境内　第一次・菅原寺旧境内　第一次



1.　西大寺旧境内
　　発掘区全景（東から）



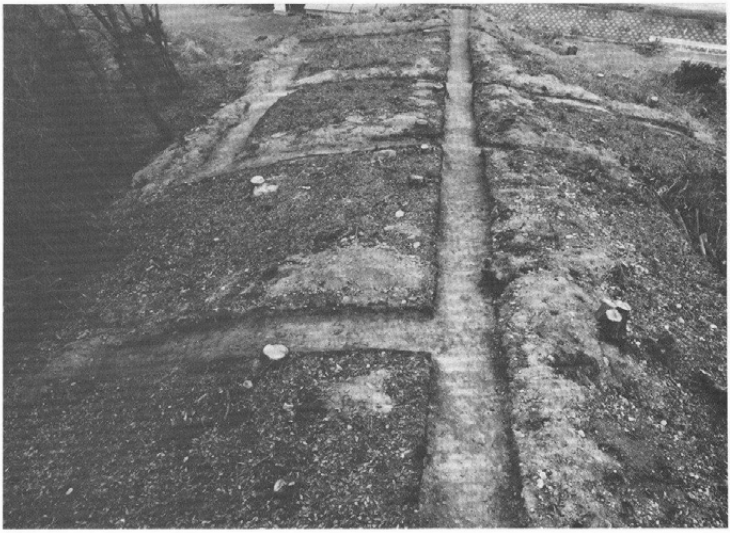
2.　新薬師寺旧境内
　　発掘区全景（北から）



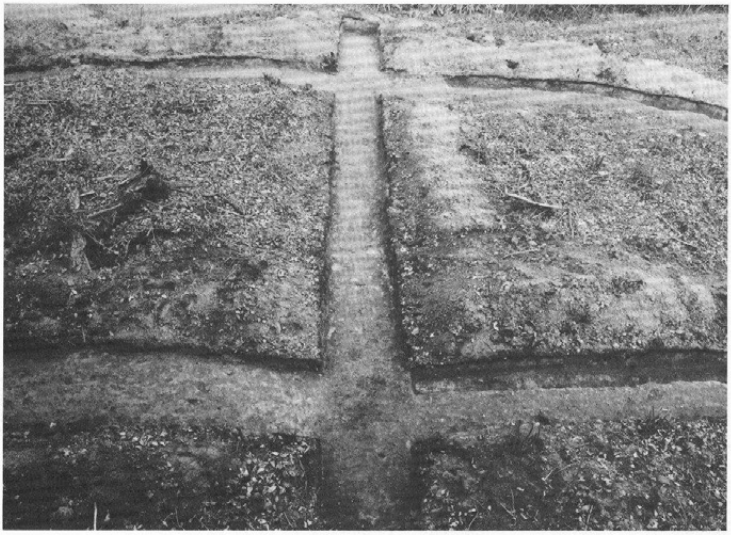
3.　菅原寺旧境内
　　発掘区全景（南から）

図版四八　佐保山遺跡群(1)

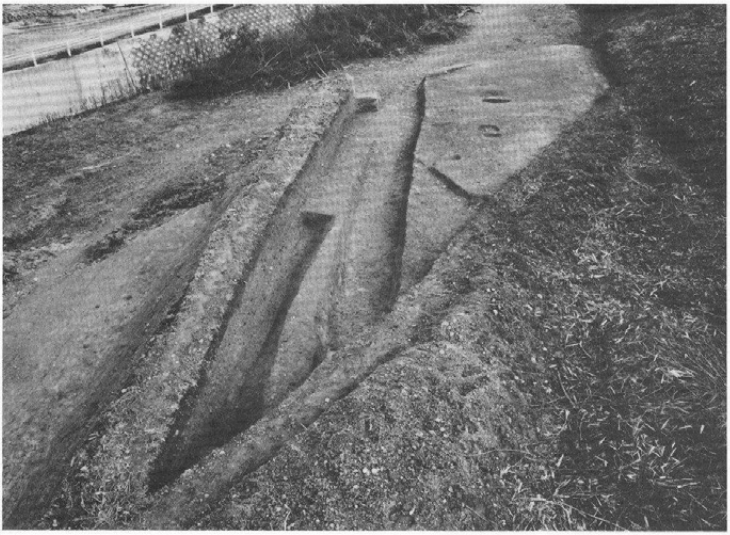
1．調査地全景（北から）



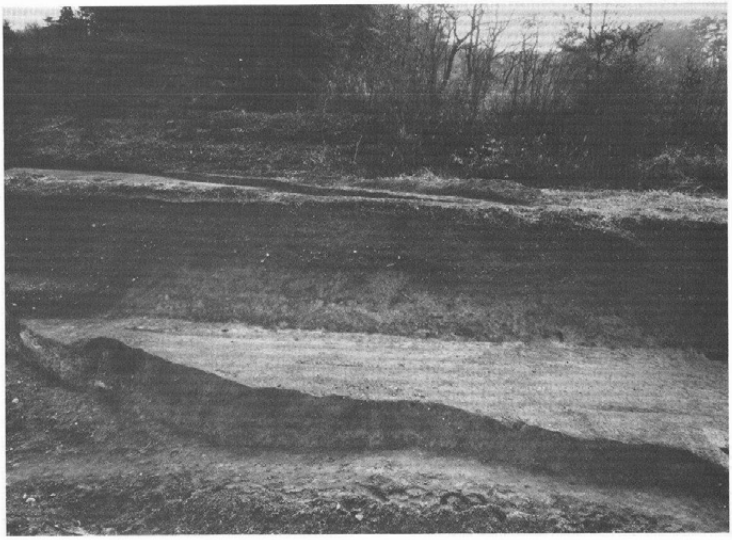
2．発掘区Ａ区全景（西から）



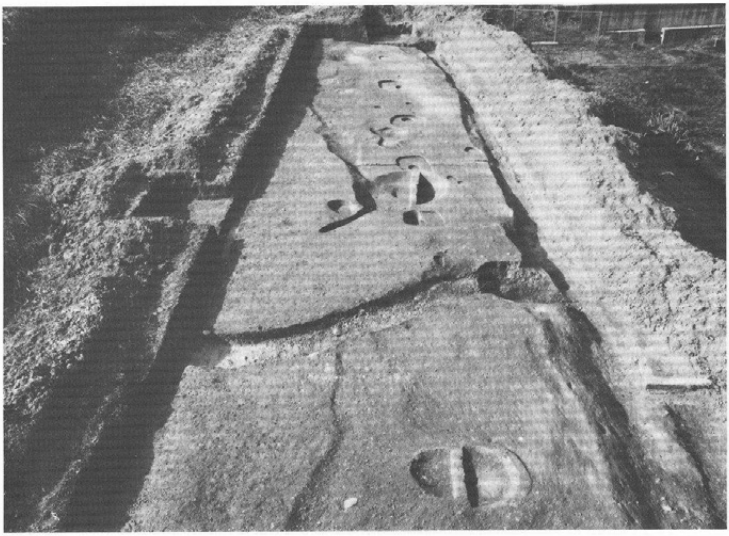
1.　発掘区Ｂ区全景（西から）



2.　発掘区Ｃ区全景（北から）



1.　発掘区D区全景（東から）



2.　発掘区E区全景（南から）

奈良市埋蔵文化財調査概要報告
昭 和 61 年 度

昭和62年３月25日　印 刷
昭和62年３月31日　発 行

編 集
発 行　奈 良 市 教 育 委 員 会
（奈良市二条大路南一丁目１－１）

印 刷　共 同 精 版 印 刷 株 式 会 社
（奈良市三条大路二丁目２－６）